

522  
56



始





522-56



シ  
ン  
グ  
戯  
曲  
全  
集

大正  
12.7.31  
内交





師 佐佐木博士に



So I am to write "a few words of preface" to introduce the plays of John Synge, who had in his mind so much of all that is most ancient in my country, to your countrymen, whose ancient poetry has come to mean so much to me, now that Mr. Whaley and others have published their translations. When I read the plays and essays of John Synge I go back at moments to our middle ages and even further back, but as I go back, though I find much beauty at the journey's end, I am all the time among poor unlucky people, who live in thatched cottages among stony fields by the side of a bleak ocean, or on the slopes of bare wind swept mountains. In your Noh plays, or in that diary of one of your courtladies of the eleventh century that I was reading yesterday, I find beliefs and attitude of mind not very different but I find them among happy cultivated people. Once or twice when I have read some Japanese poem or play I have wished that Synge were living. How like it is in its story, or emotional quality, to something he has recorded in his book on the Aran Islands, or in his "Well of the Saints" or in his "Riders to the Sea"

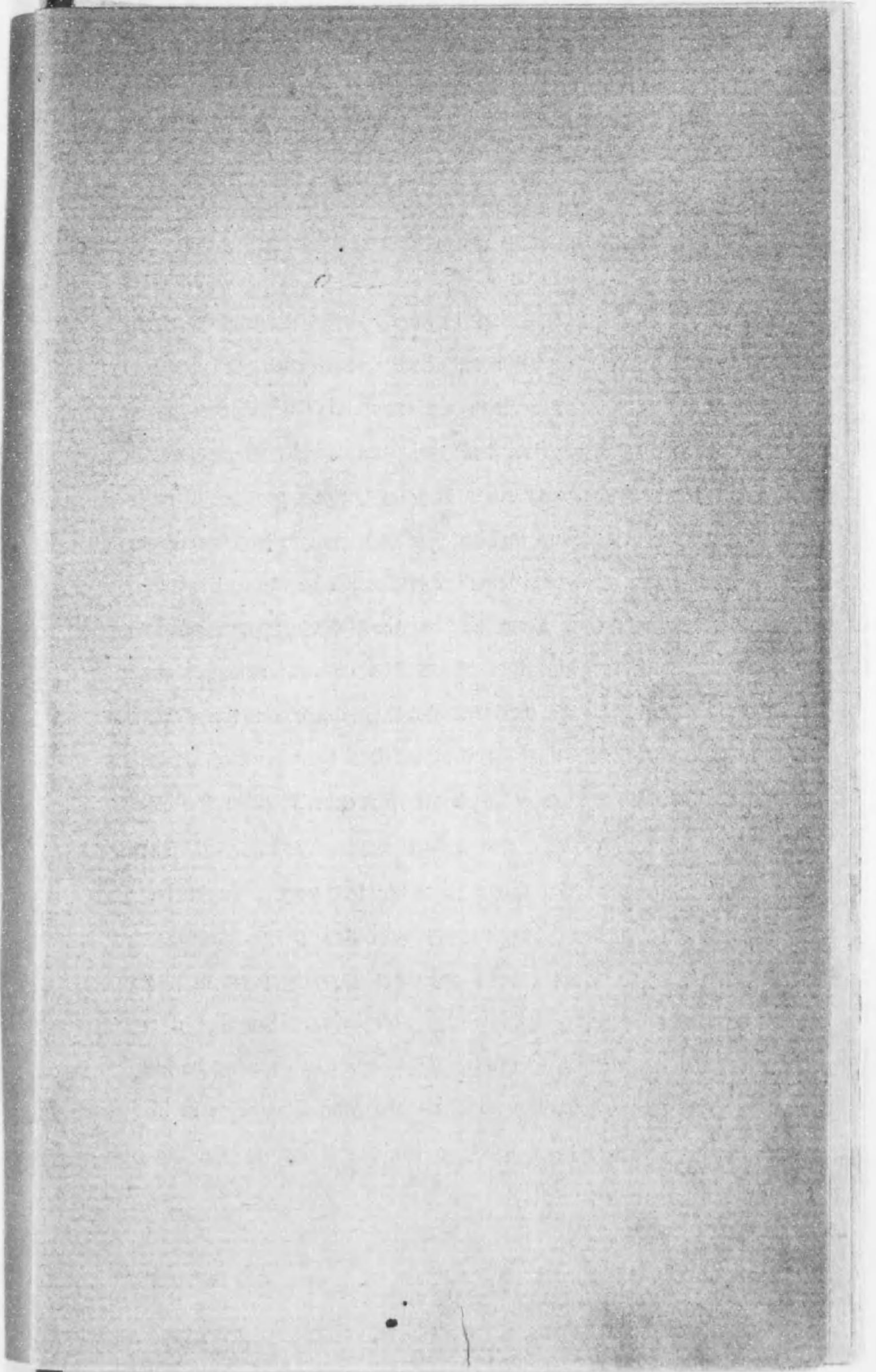
or that Lady Gregory or I have found in Galway or in Sligo. The story of your Nishikigi for instance exists among us but as a mere anecdote which no poet has changed into great poetry. Shortly before his last illness Synge told me that he meant to write no more peasant-plays and his last play, his unfinished "Deirdre of the Sorrows" is about old Irish kings and queens though written in the peasant dialect; and had he lived I think he would have been helped by your literature as I have been helped by it. He told me once that he got no pleasure from the success of his plays in England, and I think the one or two continental productions of his "Playboy" that took place just before his death meant little to him, but I am certain that the translations of his plays into Japanese would have given him very great pleasure.

WBS Yeats  
Dec

1929



欠





# 欠

持ち山におつ放すさ。さうなりや、霧が来ようがどうしようが、なんにも苦勞する種がなくなるよ。

ノラ (ウキスキイを注いでやりながら) どうして私がお前さんと夫婦になると思ふ、マイケル・ダアラ? お前さんだつて年をとるだらうし私だつて年をとるだらう、もうぢつき、お前さんだつて床の上に坐つて——あの人が坐つてたとほりに——顔はぶるぶる顫へるだらうし、齒は抜けて来るだらうし、羊がぬけ路にする枯やぶみために、ところまんだらに白髪も出て来るだらうぢやないか。(メン・バアク音をさせないで白布の中から起き出す、手で顔を覆うてゐる。白い髪は頭のまはりに亂れてゐる。ノラ氣がつかずに言ひつつける) 年をとるのは情ないことだが、でも、をかしたものだね、齒の一本もない老人が床の上に坐つて、口小言をいつて、顎は、戸板にする檜板の皮でも削れさうにとんがつてる様子を見ると、をかしたもんだよ……私たち誰だつてみんな老人になるんだから、こんな事を言つては濟まないけど、それでもをかしくなるよ。

マイケル そりやお前さんが長いあひだ老人と一緒に暮らしてゐたんで、寂しいからそんな事を言ふんだ、深い霧の中から山を下りて来た羊飼でも言ひさうなことを言つてるぢや



ないか（彼女を抱く）これからは若い男と一緒に面白い世が送れる——きつと、面白い世が……

二四

（ダン強くくしやみをする。マイケル入口へ逃げようとするが、行きつかない間にダンが奇妙な白い着物で寢室から飛び出す、手に杖を持って、入口へ行つて扉に背中をあてて立つ）

マイケル 神様、どうかして下さい！

（十字を切る、あとすまじりして部屋の向う側まで逃げる）

ダン （マイケルの方に手を伸ばして）おれが寺で腐る時分にこの女と婚禮は出来ないぞ。風のひどい時、貴様がうら山にゐても思ひ出すやうなひどい目にあはしてやる。

マイケル （ノラに）助けてくれないか、ノラ、お願いだ。爺さんはいつでもお前さんのいふ通りにしてゐたらう、今だつて乾度してくれるよ。

ノラ （宿なし男の方を見る）あの人は死んでるんだらうか、生きてるんだらうか？

ダン （彼女の方に向つて）お前は、おれの事なら、死んでゐようが生きてゐようが構はないんだらう、だがこれでもうお前の天下もおしまひだ。若い男たちがどうしようと老人共がどうしようと、霧がかからうと晴れようと、もうおしまひだ。（戸口をあける）その戸口

から出て行きなさい、ノラ・バアク、明日もあさつても、お前が生きてるうちは又とそこ  
の敷居をまたいで貰ふまい。

宿なし男 （立ち上がる）旦那さん、あなたも老人のくせにひどい事をおいひなさるね、お  
かみさんを追ん出して、おかみさんがどうなると思ひます？

ダン あのベギイ・カブナのやうにうろつき廻つて、四つ辻で乞食をやるか、唄をうたつ  
て男たちから金を貰ふがいい。（ノラに）さあ出て行け、ノラ・バアク、そんな真似をして  
ゐりやお前だつてちつき老人おじいさんになるだらう、齒はぬけるし、髪かみの毛だつて、羊が抜け路に  
する藪くさみたやうになるだらう。

（ダン言ひ止める、ノラ、マイケルの方を見る）

マイケル （怖々いふ）ラツスドラムまで行けば、立派な養育院もあるんだが。

ダン なんだつて此女がそんなところに行くものか……この女のことだから、寂しい路を  
うろつき歩いて、世間から隠れて死ぬんだらう、そしてその内には、死んだ羊みたいにし  
手の陰にぶつ倒れて、その上には霜が降つてゐるか、それとも大きな蜘蛛が巣をかけて  
か、そんなところを人に見つかるだらうよ。

二五



ノラ (くやしきうに) ダニエル、その時分にはお前さんはどうなつてると思ふ? その時分には、もう長いことお墓に寐てゐて、どんな風に自分がなつてると思ふんだい? 生きてる時だつて、お前さんは悪い人だつたから、死んでからも見つともないことだらうよ。(暫時激しい様子でダンを見る、やがて顔をそむけて今度はぐちっほくいふ) もしさうだつたところで、ダニエル、それは誰にだつてどうすることも出来ないね、だからお前さんは床にはいつて寐た方がいいよ、そんな薄着で、風に吹かれたり、雨に當つたりしてゐれば、死んでしまふよ。

ダン もしお前を追ひ出した日におれが死んだら、お前はうれしいだらうな。(戸口を指して) きあ、その戸口から出て行つてくれ、ひもじからうと、床の上に寐たからうと、もうこの邊は通らないこつた。

宿なし男 (マイケルを指して) おかみさんはあの人が引取るでせう。

ノラ 今更あの方が私にどうしてくれるだらう?

宿なし男 温かい床も半分わけてくれるし、うまい物も食はしてくれるでせう。

ダン これ、お前はこの男を馬鹿だと思つてゐるのか? それともお前が生れつき馬鹿なの

か? その女に出て行つてもらはう。そして、旅の人、お前が一緒についてくがいい——  
まだ雨は降つてるが——もうお前もいい加減しやべつたからな。

宿なし男 (ノラの側に行き) ちやあ、おかみさん、いきませう、雨は降つてますが、空気は暖かです、神様のおなさだけで、明日は好い天気になります。

ノラ 明日がよい天気になつたところで、私が死んでしまつたら、何になるだらう? 私やこれから宿なしになれば、ちつき死んでしまふ。

宿なし男 おかみさん、私と一緒になら、死ぬことはありません。私は何をしても自分の口に食はしてゆくだけの事は知つてます……さあ出かけませう、お前さんも今日まで此處に腰かけてゐて、一日一日と月日が通りすぎて自分だけ年寄になつて取りのこされたやうな気がしてゐましたらうが、これからは寒さが来ても、霜が来ても、大雨が降つて来ても、日が出て、谷から南風が吹いて来ても、濡れた土手に腰かけてゐて、そんなことは考へずといひのです。お前さんの考へることは、神様のおめぐみで、好い天気の時とか又ある時は、ひどい晩だ、神さまお守り下さい、きつとこれは無事に過ぎるだらうとか、又ある時は……  
ダン (二人の側まで行き、じりじりしながら叫ぶ) さつさと出て行けといふに、おしやべりは



下の谷へ行つてやるがよい。

(ノラ肩掛の中に何か少しの品物を包む)

宿なし男 (戸口に立つて) さあ私とおいでなさい、おかみさん、お前さんが聞くのは私のおしやべりばかりぢやありませんまい、まつ黒い湖の上を鳴いて渡る鶯の聲も聞えませう、それから山鶏も梟も鳴きませう、暖かい日には雲雀も鶉も鳴きませう、ああいふ鳥から、お前さんがきく話は、ベギイ・カヅナのやうに婆さんになる話でもなく、髪ぬける話でもなく、眼のつやの消える話でもありません、陽が上がる時分には好い唄が聞えます、そして耳のそばで、病氣の羊のやうに、せいせいしてゐる老人おぢいなんぞゐやしません。

ノラ 夜が寒くなつても野天に寐てゐたら、私こそせいぜいふやうになるでせうよ、だけれどお前さんは話が上手ねえ、私はお前さんと一緒に行きませう。(入口の方に行き、ダンの方に向く) お前さんは、死んだ真似なんぞして、うまくやつたと思つてゐるんでせう? こんな寂しいところで、路を通る男たちとでも話をしないで、女が暮らしてゆけると思つてゐるんですか? そして今日からお前さんは、どうして暮らしていくつもりです、だれも世話をしてくれる人がなくて? もうこれからのお前さんの一生はくらやみでせう、そして

て今度こそほんたうに死んで、あのシーツの下にもう一遍寐るのも、もう長い先のことぢやありませんまいよ。

(ノラ宿なし男と一緒に出て行く。マイケル二人の後について、こつそり逃げようとする。ダン彼を止める)

ダン マイケル・ダアラ、まあ腰かけて、一杯やつてきな。おれは渴いてしようがない、それにまだ宵のくちだあね。

マイケル (卓の側に戻つて) おれだつて飲みたいよ、お前には怒鳴りつけられるし、ひるつからずうつと羊を追つかけて廻してゐたんだから。

ダン (杖を投げ出す) お前をなぐるつもりだつたがな、マイケル・ダアラ、お前は氣の毒なやうに大人しい人間だから、勘辨してやらうよ。(二つのコップにウキスキイを注ぎ、一つをマイケルに渡す) お前の健康を祝してやらう、マイケル・ダアラ。

マイケル ありがたう、ダニエル・バアク、お前も長生きをして、苦勞なしに丈夫でくらすやうに。(二人ウキスキイを飲む)



海に行く騎者

(一幕)



人

モーリヤ

老女

バアトレイ

モーリヤの子

カスリン

モーリヤの娘

ノーラ

嫁むすめ

男女数人

舞臺 アイerlandの西海岸の離れ島



小さい家の臺所、網、油麻布、絲車などが見える、壁には數枚の新しい板がたてかけてある。二十歳ぐらゐの娘カスリン、菓子を捏ねてへて火の側の丸窯に入れる、それから兩手を拭き、絲車で紡ぎはじめる。わかい娘ノーラ戸口から首を出す。

ノーラ (低い聲で) お母さんは何處なの？

カスリン かはいさうに寐てゐるわ、ねむれたら、眠るつもりだらう。

(ノーラそうつと入り来て肩掛の下から包をとり出す)

カスリン (いそがしく絲車を廻しながら) なんだい、それは？

ノーラ 若い牧師さまが持つて來なすつたのよ。ドネガルで上がった死人のシャツと平編ひらびの靴足袋くつぞりなのよ。

(カスリン急に絲車を止めて話をきくために身をのり出す)

ノーラ これがマイケルの物かどうか、よく調べて見てくれつて言ふのよ、お母さんも時々海まで行つちや眺めてゐるんだからね。

カスリン だつてノーラ、マイケルの物の筈がないよ。どうしてそんな遠い北の方までマイケルが行くと思ふ？

ノーラ 若い牧師さんがいひなすつたよ、さういふ事もたまにはあるんだつて。牧師さんが言ひなすつたわ、もしこれがマイケルの物だつたら、お母さんに言つとくれ、神様のおめぐみで、マイケルは清い葬式をして貰つたつて。それでも、もしこれがマイケルの物でなかつたら、誰もなんとも言つてきかせちやいけな、お母さんは泣いたり愚痴をいつたりして身體をわるくするといけなからつて。

(ノーラが半分開めた戸が荒い風で吹きあけられる)

カスリン (心配さうに外を見る) お前、けふバアトレイが馬を連れてガルウエイガルウエイの市いちに行くのを止めて下さいつて牧師さんに頼んだ？

ノーラ 牧師さんがいひなすつたわ、私はバアトレイを止めることはしまい、しかし、決して心配しなさんな。お母さんが夜中ちゆうお祈りを上げてゐたらうから、神様だつてお母さんの息子を一人のこらす取つてしまひはなさんまいつて。

カスリン 白い岩の邊はひどく荒れてるかい？

ノーラ すゑぶん荒れてるよ、西の方でひどい波の音がしてゐるわ、風に逆さかつて潮が來たら、もつと荒れるだらう。



(ノーラ包を持ってテーブルの方まで行く)

ノーラ 今あけて見ようか?

カスリン お母さんが起きて来ると困るよ、私たちが見てしまはないうちに。(テーブルの側に来る) 私たち二人が泣きはじめたら、すぐ片づけることは出来ないからねえ。

ノーラ (奥の方の戸に行き、聴く) 床の廻りを歩いてるわ、すぐ出て来るよ。

カスリン 梯子を貸しておくれ。屋根裏の炭置場の中に入れとかう、さうすればお母さんは気がつくまい、そのうち潮合が變つて来たら又海まで出て行つて、兄さんが東の方からでも流れて来やしないかと見に行くだらうから。

(彼等烟突の破風に梯子を立てかけ、カスリン二三歩上がつて行つて炭置場に包をかくす。

モーリヤ奥から出て来る)

モーリヤ (カスリンを見上げながら、不平らしくいふ) 今日いちんち夜まで使つたつて炭は足りるだらうがなあ?

カスリン 今ちよつとの間お菓子を焼くんで火を使つてますよ。(泥炭を投げ下ろす) 潮が變つて、~~バ~~アトレイがコンネマラに行くやうなら、食べて行くでせうから。

(ノーラ泥炭を拾ひ上げて丸箆のまげりに置く)

モーリヤ (火の側の腰掛に腰を下ろして) 西南にしなんの風が出たから、バアトレイも今日は行きやしまい。きつと今日行くまい、若い牧師さんも大かた止めなさるだらう。

ノーラ お母さん、牧師さんは止めやしないよ、それに先刻さつエーモン・サイモンやシヨオン・ペテイだのゴラム・シヨオんだのが、バアトレイは出かけるだらうつて言つてゐてよ。

モーリヤ あの男は、いつたい、どこにゐる?

ノーラ バアトレイはこの週のうちにまだもう一度船が出るかどうか聞きに行つたのよ、もうちつき歸つて来るでせう、青い岩の邊はもう潮の向きが變つて来て、漁舟がいつばいに帆を張つて東の方から歸つて来るから。

カスリン だれだか大石のところを歩いて来るらしい。

ノーラ (外を見る) バアトレイが歸つて来たのよ、いそいでゐるわ。

バアトレイ (内にはいつて来て室内を見廻す。悲しそうに靜かに口をきく) カスリン、あのコンネマラで買った新しい繩はどうしたい?

カスリン (下りて来る) ノーラ、バアトレイにやつとくれ、白い板の側の釘にひっかけて



ある。今朝かけといたんだよ、あの脚の黒い豚が食ひ切りさうにしてゐたから。

ノーラ (繩をバアトレイの方に出して) これかい、バアトレイ?

モーリヤ バアトレイ、その繩は、その板の側にかけて儘でおいて貰ひたいがなあ。(バアトレイ繩を手に取る) もし、ひよつと、明日の朝か、あさつての朝か、それとも何時か近いうちに、マイケルの骸が波で上げられることがあれば、神様のお助けでわしらは深い墓をあの子のために拵へてやらすばなるまいから、その時には繩が入る。

バアトレイ (繩を手でまるめて) あの牝馬に乗つて行く手綱がないんだ、おれは大急ぎで行かなくつちやならないから。この舟をのがせば、もうこれで二週間か、もつと長くか、舟は出ないんだ、この市ぢはいい馬市だらうつて、村のみんなも言つてゐたからね。

モーリヤ もしマイケルの骸が波で打ちあげられた時、うちに棺をつくる男手がなかつたら、村でみんなが悪くいふことだらう、わしはコンネメラでいちばん上等の白い板を高い金を出して買つてあるのだけれど。

(モーリヤ首を曲げて壁際の板を見る)

バアトレイ 打上げられることはあるまい、もうおれたちみんなして毎日毎日九日も探し

たちやないか、それにこのあひだから西南のひどい風が吹いてゐるんだから。

モーリヤ もしマイケルは見つからないにしろ、今日はその西南にしんなんの風で海があらう「ゆんべお月さんのすぐ側に星が一つ見えてゐた、夜になつたら、もつと荒れるだらう。もしお前が百疋の馬を持つてゐたにしろ。千疋の馬を持つてゐたにしろ、千疋の馬も一人の息子に易へられるか、たつた一人切りしかない一人むすこに？」

バアトレイ (手綱を拵へながら、カスリンにいふ) 毎日そとを見廻つてね、羊が畑の麥の中にとび込まないやうに氣をつけとくれ、それからもし問屋の人が來たら、値がよかつたらあの黒い脚の豚のやつは賣つた方がいい。

モーリヤ あの子なんぞに、なんだつて好い値で豚が賣れるものか?

バアトレイ (カスリンに) もし明方になつても西風が止まなかつたら、お前とノーラで海草灰をとるにもう一と山も海草を拾つておいてくれ。これからは、働く男がおれ一人ぢや、家内うちぢゆうどうにもなるまい。

モーリヤ もしお前もほかの兄弟のやうに海で死んでしまつたら、それこそ、わしらはどうにもなるまい。わしも娘たちもどうして暮らしてゆける、もうぢきに墓へ行きさうなこ



んな老女のわしと。

(バアトレイ手綱を下におき、着てゐた古い上着を脱ぎ、同じフランネル地でもすこし新しい方を着る)

バアトレイ (ノーラに) 舟は棧橋まで来たかい？

ノーラ (外を見る) 今、青い岩のところを通り過ぎて、帆を下ろしてゐます。

バアトレイ (財布と煙草を持つて) あすこまでゆくには三十分かかるから、ぢや、二日か

三日で歸つて来る、もし風がいけなかつたら、四日ぐらゐかかるかも知れない。

モーリヤ (火の方に向いて、頭から肩掛をかぶる) としよりのいふ事を聞かないお前はひど

い男だなあ、海があぶないと止めてるに。

カスリン 海へ行くのは若い人の仕事だもの、老女が一つことをくどくど言つてゐたつて、

聞きやしません。

バアトレイ (手綱をとり上げ) ぢや、大急ぎで行かう。おれが赤い方に乗つて、灰色の仔

馬の方はひつばつて行かう。……さやうなら。(出て行く)

モーリヤ (まだ彼が戸口を出切らないうちから歎く) 行つてしまつた、どうしよう、もう送

へないだらう。もう行つてしまつた、今夜暗くなる時分には、もうわしにはこの世に一人の息子もなくなるだらう。

カスリン なぜ、バアトレイに祝福の言葉をかけてやらなかつたの、入口でお母さんの方を振り返つて見たのに？ 家内のものは今までだつてすゐぶん苦勞してゐるのに、お母さんは出て行く人にあんなえんぎでもない事を言つて、ひどいことを聞かせたのねえ？

(モーリヤ火箸をとり上げ、あてもなく火をかき廻して、振り向きもしない)

ノーラ (彼女の方に向いて) お母さんはお菓子が焼けないのに、火をとつちまふの？

カスリン (叫ぶ) ああどうしよう、ノーラ、バアトレイに食べさせずにしまつた。

(カスリン火の側に来る)

ノーラ 夜まで旅をしてゐたら、どんなにひもじい思ひをするだらう、お日様が上がつてからまだ何も食べないんだから。

カスリン (窯から菓子を外へあける) それは、ひもじからうとも、老人が愚痴ばかり言つてるところぢや、うちんなかぢう一同がぼんやりしてしまふんだねえ。

(モーリヤ腰掛の上で身を前後に振り動かしてゐる)



カスリン (パンをすこし切つて布に包み、モリーヤにいふ) あの泉のところまでお母さんが出て行つて、バートレイが通つたら、これをおやんなさい。あそこで會つたら、先刻のいやな言葉はとり消しにして、「達者でおいで」と言へるでせう、さうしたらバートレイも好い氣持がするだらうから。

モリーヤ (パンを手にとり) 間に合ふだらうか?

カスリン 今すぐ急いで行けば間にあひますよ。

モリーヤ (弱々しく立上がり) わしには、思ふやうに歩けないからなあ。

カスリン (心配さうに彼女を見て) ノーラ、杖を出しておあげ、大きな石のところでころびなるといけなさい。

ノーラ どの杖?

カスリン マイケルがコンネマラから買つて來た杖さ。

モリーヤ (ノーラが渡す杖をうけ取りながら) 世間では、老人が息子や子供たちのために形見を残してゆくものだけれど、この家では若い者が老人に形見を残して行くのだ。

(モリーヤゆつくりと出て行く)

(ノーラ梯子の方に行く)

カスリン お待ちよノーラ、ひよつとお母さんが歸つて來るといけなさい。かはいさうに、あんなにひどく弱つてゐるから、どんな眞似をするか分りやしない。

ノーラ もう藪のそこを曲つたかい?

カスリン (外を見る) もう見えなくなつた。早くそれを下ろしておくれ、いつ又引つ返して來るか知れないから。

ノーラ (屋根裏から包を出す) 若い牧師さんが明日あたり此處を通るといひなすつたよ、もしこれがほんたうにマイケルの物なら、わたしたちは外で牧師さんに會つて、さう言うう。

カスリン (包を受け取つて) これがどうして見つかつたか、牧師さんから聞いたかい?

ノーラ (梯子から下りながら) 牧師さんの話では、男の人が二人で密造酒を舟にのせて漕いでゐたのだとさ、「まだ鶏も鳴かない夜中なんだよ」漕いでると、一人の方の櫂が人の骸に觸つたんだつて、ちやうどその人たちは北の方の海の黒い岩のそばを通つてゐたんだつて。



カスリン (包をあけようとして) ナイフをおくれ。潮水で紐がしめつてるから、このまつ黒な結び目をほごさうとしたら一週間もかかるだらう。

ノーラ (ナイフを渡す) ドネガルといふところは太へんに遠いところだつてねえ。

カスリン (糸を切る) 遠いとも。いつぞやこの土地に來た人の話だつたが——このナイフを賣つた人さ——その人の話ぢや、向うの岩のところから歩き始めると、ちやうど七日歩いて行けばドネガルに行き着けると言つたよ。

ノーラ もし海の上を流れて行つたら、幾日ぐらゐかかるだらう?

(カスリン包をひらき、靴足袋を片づけ取り出す。二人熱心にそれを見る)

カスリン (低い聲で) 困つたねえノーラ、たしかにマイケルの物だと言ひ切ることはむづかしいぢやないか?

ノーラ 釘にかかつてるシャツを持つて來て此方のシャツと同じフラネルだかどうか比べて見よう。(彼女隅の方にかかつてゐる二三枚の服の中を探す) ここに見えないけど、何處へいつたかしら?

カスリン けさバアトレイが着たかも知れない、自分のシャツが潮でびつしよりだつたか

ら、(隅の方を指さす) あすこにあるあれは、袖のところが同じ切地だつたらう。あれを貸しとくれ、あれで分るよ。

(ノーラそのシャツを姉の許に持つて來る、二人フラネルの地合を比べる)

カスリン おんなじ地合だね、だけど、これとおんなじ品はガルウェイの店に行つたら幾巻だつてあるんだらう、だから、マイケルでなくつても、ほかの大勢の人たちがおんなじシャツを持つてゐるわけぢやないか?

ノーラ (靴足袋を取り上げて編み目を数へてゐたが、大聲でいふ) マイケルのだよ、カスリン、やつぱしマイケルだ、神さま後生をお助け下さい、お母さんが聞いたら何といふだらう、バアトレイは海に行つてしまつたし。

カスリン (靴足袋を取り上げて) 平編の靴足袋だね。

ノーラ 私が三足だけおんなじのを編んだその二足目のよ、これは。私は目を六十にして四つだけ落としたのよ。

カスリン (編み目をかぞへる) その通りの數になつてる。(大きな聲でいふ) ねえノーラ、マイケルがそんな遠くの北の方まで流されて行つて、海の上を飛んでる海婆よりほかにマ



イケルの爲に泣いてくれる人もないとは情ないことぢやないか？

ノーラ (半分ほど體を振り向けて、その服の上に兩腕をのせかけて) あんた立派な漕ぎ手で漁師だつた人が、こんな古いシャツ一枚と靴足袋だけになつてしまふとは、情ないことだわねえ！

カスリン (暫時の後) ノーラ、お母さんが歸つて來やしないか？ 路に小さい音がきこえる。

ノーラ (外を見る) 歸つて來たよ、入口の方へ歩いて來るわ。

カスリン お母さんはいつて來る前にこれを片づけておくれ。ペアトレイに祝福をかけてやつたから少しは氣が落ちついたかも知れないから、私たちは、ペアトレイが海にあるあひだだけ、何も知らない顔をしてゐよう。

ノーラ (カスリンを助けて包を拵へる) 隅の方に入れとかう。

(二人で烟突の隅のくぼみに隠す。カスリンは絲車のそばに戻る)

ノーラ わたしが泣いてゐたのがお母さんに見えるかしら？

カスリン 戸の方に背中を向けて光が顔にあたらないうやうにしておいで。

(ノーラ戸口に背を向けて烟突の陰の方に腰かける。モリーヤごく徐かにはいつて來て、娘たちの方を見向きもせず、火の向う側の自分の腰掛に行く。パンを包んだ儘の布をまだ手に持つてゐる。娘たち互に顔を見合せる、ノーラはパンの包を指さす)

カスリン (暫時絲車を廻して後) パンをやらなかつたんですか？

(モリーヤ振り向きもせず、小聲で泣頭をはじめる)

カスリン ペアトレイが馬で行くの逢ひましたか？

(モリーヤなほ泣頭を續ける)

カスリン (少し苛立たしく) しようがないのねえ、大きな聲を出して見て來た話したらいいぢやないの？ すんだ事をかなしがつてゐたつて仕方がないわ。ペアトレイに會つたんですか、よ？

モリーヤ (弱々しい聲で) わしの心は今日でもう碎けてしまつた。

カスリン (前の通りに) ペアトレイに會ひましたか？

モリーヤ わしは恐いものを見て來た。

カスリン (絲車を離れて外を見る) しようがないお母さんだね、今ペアトレイは馬に乗つて



青い岩のところを通つてゐるわ、灰色の仔馬をあとに連れて。

モーリヤ (びくりとする、そのはずみに肩掛が頭から落ちて亂れた白髪を見せる。怯ちた聲でいふ)  
あとから灰色の仔馬が……

カスリン (火の側に来る) いつたい、どうしたんです?

モーリヤ (こくゆつくり語る) わしは誰も見たことのないやうな恐いものを見たよ、むかし、ブライド・ダーラは死人が子供を抱いてゐるのを見たといふが。

カスリンとノーラ まああ!

(二人火の側の老女の前にうづくまる)

ノーラ 話して下さいよ、お母さんの見たものを。

モーリヤ わしは泉の側まで行つて、あそこに立つて口の中でお祈りを言つてゐた。さうするとバアトレイがやつて来た、あれは赤の牝馬に乗つて後に灰色の仔馬をつれて来た。

(兩手を上げて眼に見える何物かを隠さうとする) ノーラ、おそろしかつたよ!

カスリン 何を見たんです?

モーリヤ わしはマイケルを見た。

カスリン (静かにいふ) 見るはずはありませんよ、お母さん、あなたが見たのはマイケルぢやありません。マイケルの骸は遠い北の方で見つかりました、神さまのお慈悲で清い葬式が済んだのです。

モーリヤ (少し反抗的に) わしは、けふ、あれに會つたよ、馬に乗つて駈けて行つた。バアトレイが赤い牝馬に乗つて先きに來た、わしは「達者でおいで」と言はうとしたが、何か咽喉につかへて出なかつた。バアトレイは急いで通り過ぎたが、「御機嫌よう」と言つてくれた、それでもわしは何も言へなかつた。わしはその時、泣きながら、顔を上げて、灰色の仔馬を見ると、灰色の仔馬にはマイケルが乗つてゐた——立派な着物で、足には新しい靴をはいて。

カスリン (泣き始める) わたしたちは、今日からおしまひだ、もう、おしまひだ。

ノーラ 若い牧師さんが、神さまはお母さんの息子をひとり残さず奪り上げてしまひはなざるまいと言ひなすつたぢやないか?

モーリヤ (低い聲で、はつきりと) あのなんぞに海のことか……きつとバアトレイは死ぬ、エーモンさんと呼んで来て、白い板でわしのために立派な棺を造つて貰つ



てくれ、わしも長くは生き残るまい。この家では、わしの良人もゐたし、良人のおやちさんもゐたし、六人の子がゐた——立派な六人の子供だった、一人一人がこの世に生れる時、わしはどの子が生れるにも苦しい産をしたが——死んだあの子たちのうちで死骸の見つかつたものもあるし、見つからなかつたものもあつたが、もうみんな逝つてしまつた……ステーフアンとショオンはあの大荒れの時に死んだ、後になつてあの子たちはグレゴリー灣の入口で見つかつた、そして一枚の板に二人のせて持つて来てくれた、あの戸口から。  
 (モーリヤ暫時話を中止する、娘たちは自分らの後に半びらきになつてゐる戸の外から何かの物音がきこえたやうに思つて思はず振り返る)

ノーラ (ささやく) カスリン、あれを聞いた？ ひがし北の方のあの音がきこえた？

カスリン (ささやく) だれか濱で怒鳴つてるやうだ。

モーリヤ (何も聞えないので續ける) それからセーマスとお父さんと、お父さんのおやち様と、眞暗やみの夜に行方が知れなくなつて、明けの朝お日様が出た時には杖いつぽん残つてゐなかつた。そのつぎには、パツチが乗つてた小舟がひつくり返つて、溺れ死んでしまつた。わしはここにパアトレイを抱いて腰かけてゐた、あれはまだ赤ん坊で、わしの膝に

のつてゐた、さうすると女の人が二人、三人、四人とはいつて来た、女の人たちは十字を切つて黙つて物を言はなかつた。わしはその時そとを見ると、男の人たちが續いてやつて来た、赤い帆布を半分にした中に何やら包んで持つて来た、その包から水が垂れてゐた、——よい天氣の日だつたが——入口まで水の跡がついてゐた。

(モーリヤ戸口の方に手を伸して語り止める。その時その戸が靜かに開かれて、年老いた女たち入り来る、その人たちは敷居際で十字を切り、赤いマテコートに被つた儘で、舞臺の前方に跪く)

モーリヤ (半分はゆめ心地で、カスリンに) パツチかい、マイケルかい、それとも、何事が始まつたんだらう？

カスリン マイケルは遠い北の方で見つかりました、そんなところで見つかつた人がここに來る筈はありません。

モーリヤ 海で死んで流されてゆく若い男はたくさんゐるだらう、その引上げた男がマイケルだかマイケルに似た男だか、どうして見分けがつく？ 九日も海にはいつてゐて、荒い風が吹いてゐては、死んだ男の生みの母でもはつきりとその人は見分けられまいもの。



カスリン ほんたうに、マイケルなんです、遠い北の方から、死んだ人が着てゐた物をすこしだけ送つてよこしましたから。

(彼女手を伸してモーリヤにマイケルの身につけてゐた物を渡す。モーリヤ徐かに立つて両手にそれを取る。ノーラ外を見る)

ノーラ あの人たちは何だか擔つて来る、それから水が垂れて大きな石の邊まで水の跡がついてゐる。

カスリン (入り来た女たちにささやく) バアトレイなんですか？

女たちの一人 さうです、神さま、あの人の後生をお恵み下されまし。

(前の人たちより少し若い二人の女入り来てティアルを引出す。その時男たちバアトレイの死體を板に載せ上に帆布をかけて運び来て、ティアルの上におく)

カスリン (みんながさうやつて働いてゐるあひだに女たちに訊く) どうして溺れたんです？

女たちの一人 灰色の仔馬がバアトレイさんを海に蹴おとしたんです、それであの白い岩に大きな浪が立つてるところへ打上げられたんださうです。

(モーリヤは立つてティアルの頭の方まで行きそこに跪く。女たちは靜かにかなしみの聲を出

してゆつくりと身をゆすぶつてゐる。カスリンとノーラ、ティアルの他の端に跪く。男たち入口に近く跪く)

モーリヤ (頭を上げて自分のまはり到人々のゐるのも氣付かないやうにいふ) みんな死んでしまつた、わしのためには、海もこの上何をするとも出来まい……もうこれから、みなみが吹き出さうと、大波が東の方に聞え、西の方にも聞えて、二つの波が打合うて物騒がしい音を立てようとも、わしは眠らずに泣いたり祈つたりせずともいいのだ。これからは十一月祭のあとの眞暗な夜出て行つて聖水を取つて来ずともいいのだ、海が荒れてよその女たちが泣いてゐようと、わしは案じないでも済む。(ノーラに) ノーラ、聖水をおくれ、まだ戸棚にすこし残つてゐた筈だ。

(ノーラ、聖水を渡す)

モーリヤ (マイケルの衣服をバアトレイの足の上に置く、それから聖水をバアトレイの身にふりかける) バアトレイ、わしはお前のためにお祈りをしなかつたわけではないよ。暗い闇夜に自分の言つてることが分らなくなるまで、お祈りをしてはゐたが、それでも、今日からわしはらつくりするだらう、もうらつくりしてもいい時分だ。今日からわしは安心して、十



一月祭の後の長いよるもゆつくりと眠られよう、しめつた粉のちいつとばかりと、くさりかけた魚ばかりしか食ふ物はなくても。

(彼女十字を切りながら再び跪き、口の中で祈りをしてゐる)

カスリン (年老いた男に) 明朝になつたら、あんたとエーモンさんで棺を拵へて下さい、お母さんが自分で買つといた上等の白い板がありますから、かはいさうに、お母さんはマイケルの死體が見つかるかと思つてゐたのよ。ちやうど焼きたてのお菓子もあるから、仕事しながら食べて下さい。

老人 (板をながめて) 釘があるかい？

カスリン ないわ、コラムさん、わたしたちは釘までは考へつかなかつたよ。

他の一人 どうしてお婆さんは釘を忘れてゐたらう、あれほどたびたび棺をつくるのを見てゐたくせになあ。

カスリン もう年をとつて、ぼけてゐるんだからねえ。

(モーリヤこくゆつくりと立ち上がりマイケルの身に着けてゐた物を死體の傍に掛け、のこりの聖水をふりかける)

ノーラ (カスリンに囁く) けふはお母さんは落ちついて静かにしてゐるのねえ、マイケルが死んだ時にはお母さんの泣聲がこの家から泉のところで聞えたわ。マイケルの方が大事だつたのだらうか、誰だつてさうは思はなかつたわねえ！

カスリン (徐かにはつきりといふ) 老人といふものは直きに何でも草臥れてしまふんだよ、お母さんはまる九日といふもの泣いたり愚痴をいつたり、うちの中でするぶん悲しがつてゐたんだから。

モーリヤ (聖水のなくなったコップをテーブルに伏せて置き、両手をバートルレイの足の上に載せる) 今度こそみんなが一緒になつてしまつた、これでおしまひだ。神さまはバートルレイの後生も、マイケルの後生も、セイマスも、パツチも、ステーフアンも、シヨオンも、みんなの後生をお助けなされまし、(首を下げる) それからわしの後生も、この世に生き残つてゐるどの人の後生もお助けなされまし。

(彼女言ひ止める、その時女たちの中から泣眼の聲すこし高く聞えて、又低くなる)

モーリヤ (言ひ續ける) 神さまのお恵みで、マイケルは遠い北の海で清い葬式をすまして貰つた。バートルレイは、あの白い板で立派な棺を拵へて貰つて、深い墓が出来るだらう。



それよりほかに何が入るものか？ どんなんだつていつまで生きてぬるものでない、わし  
どもは不足はいない。

(彼女再び跪く、幕がゆつくりと下りる)

鑄掛屋の婚禮 (三幕)



人

マイケル・ピルン 鑄掛屋

メリイ・ピルン 老女、マイケルの母

セーラ・ケジイ 鑄掛屋仲間の若い女

舊教の僧

舞臺 日のくれ果てた田舎みち



## 第一幕

日のくれ果てた田舎道。すこし右の方に寄つた土手の側で枯枝をくべた火が燃えてゐる。マイケルその火の側で仕事してゐる。背景左手に、テントがかつたものがあり、生垣にぼろの着物が干しかけてある。右に、寺の門が見える。

セーラ (右手より入る、熱心に) マイケル、今夜、神父さんが家へ歸んなさる時、此處んここで話をつけようよ。

マイケル (しぶい顔をして) まことに、けつこうな、おありがたい話だ!

セーラ (鋭く) あたしの婚禮の指環が出来てゐなければ、ちつともおありがたくも、けつこうでもありやしない。(マイケルの側に行く) 今度は、もう出来上がるだらう、それとも、どんなあんばいの?

マイケル まだ、さうは出来てない、指環を拵へるなあむづかしい仕事で、おらあ、あん

まり其方に骨を折つたおかげで、明日の朝までにブリキの罐の方が出来さうもない。

セーラ (マイケルの側に坐し、火に枝を投げ入れる) むづかしくつたつて、それは仕方がないことさ、馬鹿な愚痴はおいひでない。

マイケル (ゆつくりと、むつりしていふ) セーラ、ケジイ、お前に馬鹿といふ字が言へた義理かい? まあだ今日が日までどんな拵へ話にだつて、お前のやる藝當みたいな馬鹿な話をきいたことがあるか? お前がおれと一緒にほうつき歩いてるのも、ずるぶん久しいことだ、そして散々ばかをやつたあげくに、今度は婚禮しようといふ、そしておれが頼みもしねえに、たうとう、おれをそこまで押つつけやがつた。(セーラ、男の方に背中を向けて、何か土手下の物を置きなほしてゐる)

マイケル (腹立たしく) これ、なんとか返事をしろ、おれはお前に物を言つてるんだ、いつたい、月がかはつてから、お前どうかしてゐるな?

セーラ (考へながら) マイケル、ピルン、あたし、どうもしてやしない、ただねえ、春つて時候は變な時候だから、時には、變てこた事も考へてるよ。

マイケル これ以上に變てこた事はお前にもめつたに考へられまいて。しかし、今夜おれ



を無理やりに神父さんそこへ引つばつて行つて何の得がいくんだ？ あすの朝になれば、  
またお前が新規な事を考へ出すかも知れねえんだに？

セーラ (からかひ顔に) あすの朝になつたら、チブラデンからタラの丘の方に歩き廻つて  
る金持の鑄掛屋さんのお連れになりたい氣が出るかも知れない、あの若い「氣取り屋」の  
ジムと馬車に乗つて歩いたら面白いだらうと思ふよ、さうすれば、徒歩いて高い山坂を上  
がつたり下りたりして、脊中の骨を痛くする心配もあるまいから。

マイケル (心配さうに) お前、そんな事を考へてるんか？

セーラ そんな事を考へてるのさ、「す」こうしても日が當つて、和らい空気に、頭の上の  
茨の木から好い匂ひがして来る時分には。

マイケル (恐怖を以て暫時セーラを見てゐる、それから指環を渡す) これでいいか？

セーラ (指にはめて見る) ちいつとかた過ぎるわ、端がブリキみたいに痛い。

マイケル (注意深く見ながら) お前の指がふとり過ぎてるんだ。馬鹿馬鹿しい、おれと婚禮  
しようの、おれを捨てて逃げたいの、なんのかんのと言つて、それでも、けつこう、そん  
な肥つちよの丈夫な體をしてゐやがる。

セーラ (彼に指環を返す) 拵へあげとくれ、それでいいから、又ちぢめてしまはないやう  
に氣をつけとくれ。

マイマル (また仕事をやりながら、陰氣くさく) 氣をつけろつて、口でいふのは容易しいこ  
とだ、大抵の事は口で言へば容易しいことさ、馬鹿にだつて言へらあ。(驚いて立ちかける)  
いめいめしい、おれは又火傷しちやつた。

セーラ (嘲るやうに) 今夜は、ひどく不器用だねえ。(聲を高くして) 大急ぎでやつとくれ  
よ、でないとお婆さんがお酒を持つて歸つて来るよ。

マイケル (反抗するやうに聲を高くして) 大急ぎだと？ 大急ぎで、ぶんなぐるぞ、そこう  
らがお前には入用のとこだ、おれはラスヴァアで始めてお前となじみになつた日のことを  
考へてるんだ、お前は泣き出してしまつたつけ、おれたちは岡から下りて来るところだつ  
た、お前は泣いて「お母さんそこへ歸ります」といひやがる、おれはお前のうしろから歩い  
てゐてお前の耳つたばをひどく打つた、するとお前は忽ち大人しく素直になつちやつて、  
それから今日までといふもの俺について歩いてゐる。

セーラ (立ちあがり持つてゐる枝をすつかり火にくべる) どうせ、あたしは、大馬鹿だつたの



さ、だけど、明日になれば「氣取屋」のヂムにバリナクラツシで逢へるわ、あの人はウイツクロウの馬市で白の仔馬を好い値に賣つたから、其お金を使ひ散らして歩くところは好い見物だらう、あの人は良い馬を見つけるのも上手だし、いい女を見つけるのも上手だよ。

マイケル (じりじりし乍ら仕事してゐる) 何方が上手だか知らねえが、あのやくざ野郎め！

セーラ (足で灰を蹴上げて) なにしろ、あの人は偉いよ、あたしあの人に逢ふのがほんとうに楽しみで、嬉しいわ、あたしのことをバリナクレイの美人と言つたのはあの人が始めてだつたよ。女には嬉しい名前だねえ。

マイケル (卑しむやうに) そんなやうな名を馬にもつけてるぜ、アクロウの競馬の馬に。

お前はつまらない事にうれしがるんだな、口先だけの言葉か、嘘つきのいふことに。

セーラ 嘘つきだつて！

マイケル 嘘つきだとも。

セーラ (憤然と) 嘘つきだつて？ お前にはまだ聞かせなかつたかい、マルールの谷で巡査さんが十哩もあたしの後に従いて来て、まつ暗やみの晩に戀をしかけた話を？ それから、學校がへりの子供たちが私に出會ふと、「けふはバリナクレイの美人のセーラ・ケジイ

を見た、すてきだねえ」とみんなで言ひ合つてるよ。

マイケル やれやれ、かはいさうな奴らだ！

セーラ かはいさうなのは、お前だよ、もう二週間か三週間も経つて、「お前がまつ暗な晩に眼を覺まして、あたしがおてんと様に照らされながら、氣取屋のヂムの荷馬車の後に乗つかつて行く様子を考へて見たらばね。」さういふ晩に土手のかげに寐てゐたら、寂しくつて寒いだらう、お婆さんは大きないびきをかいて眠つてゐるだらうし、蝙蝠は樹の中できいきい鳴いてるだらうし。」

マイケル 黙つて。だれかこの路をやつて来る。

セーラ (右の方を見る) 誰だかお醫者さんのところから出て来たやうだ。

マイケル 神父さんは、彼處でしよつちう骨牌をやつたり、一杯のんだり、夜明けまで唄をうたつてることがある。

セーラ 大またに歩いて、どら聲をする人だね、神父さんだよ、たしかに。もし今指環が出来上がつてゐれば、神父さんが一杯機嫌のところで、上手に談判してしまふけど。

マイケル (彼女の側に行き指環をわたす) そうら、指環だ、しかし神父さんはどんどん通り



過ぎちやつて、おれたちみたいなものとか口なんぞききやしまい。

セーラ (着物をきちんと直して、ひどく興奮して) お前は此處で腰掛けてゐて火を明るく燃し  
といておくれ、あたしの顔が神父さんに見えるやうにね、そしてお前は仕事をしてるやう  
に見せかけておいで、ああいふ人たちといふものは、働く話をするのが大好きだから。

マイケル (腰かけてアリキの籠を拵へようとして仕事し始める、陰氣くさく) …働く話が大好き  
か、大きに。

セーラ (熱心に) さあ、火をどしどし燃しとくれよ。

(神父右手より登場、セーラ彼の前に進み出る)

セーラ (ひどく巧者な聲で) 神父さま、こんばんは。いいお晩でございます。

神父 おどろいた！ ぜんたい、お前は何だ？

セーラ 神父さま、あたくしはバリナクレイの美人と云はれてゐますセーラ・ケジイでござ  
んす。その土手のとこにゐますのはマイケル・ビルンで。

神父 いや、いい御夫婦だ！ さあ通してくれ。(通りすぎようとする)

セーラ (彼の前に立ちふさがり) 神父さまにすこしお話がござんして。

神父 わしはあひにく一錢も持つてゐない。どうか通してくれ。

セーラ 一錢いただきたい譯ではござんせん。わたくしたちは婚禮した方がよかないかと  
思つてゐますんで、ひよつと神父さまがあたくしたちを一錢も出さないで婚禮さして下さ  
るかしらと思ふんでござんすが、あなたは御親切な方で、貧乏人には親切になさるさうで  
ござんすから。

神父 (びつくりして) 無料でお前たちを婚禮させろといふのかい？

セーラ さうでござんす。そしてひよつとあなたが銀貨でも下すつてあたくしに指環を買  
はせて下さるかと思つてをりますんで。

神父 (大きな聲で) 黙んなさい、黙んなさい、セーラ・ケジイ、お前たちにやるやうな銀貨  
はわしは一文も持つてゐない、もし婚禮さして貰ひたければ、きまりのポンドを拂ひなさ  
い。一ポンドだけでやつてやる、それでも此土地にゐるわしと同じ身分の人たちにやつて  
やるよりは餘程安くなつてゐるのだ。

セーラ 神父さま、あたしたちみたいなき身分のものが何處から一ポンド持つて來ませう？

神父 そりや驢馬を賣るなり、籠を拵へるなり、それとも、ウイツクロウでもウエツクス



ホードでもミースでも何處へでも行つて、至るところで盗んで歩けば容易に出来るだらう？ (通り過ぎようとする)そこを退いて、もううるさく邪魔をしないで貰はう。

セーラ (ポケットから金を出して、頼むやうに) 神父さま、少しはお慈悲をかけて下さいませな？ (金を出す) 半サヴレンで婚禮さして下さいませんか、現代の國王様のお母さんのお姿がある綺麗なびかびかのでござんすが？

神父 もしお前が十シリング持つてるなら、もうあと十シリング同じやうにして稼いで来なさい、さうすりや婚禮さしてやる。

セーラ (泣き聲で) 神父さま、あたくしたちがこれだけ溜めるには、彼方此方で一錢二錢三錢とこまかい物を寄せ集めて二年もかかりました。もし今婚禮さして下さらなければ、あの男と酒呑みのお婆さんと二人で、明日市に行つて飲んでしまふかも知れません。(前掛を眼にあてて半分泣きさうにして) さうすればもう私は一生婚禮が出来ないんです、お婆さんになる時分まであたくしは愚痴を云ひませうよ、貧乏人に生れるのは情ないことで、罪の深いことだつて。

神父 (火の方に向き直つて) 泣かずといひよ、セーラ・ケジイ。そんな事で泣くのはをかしい

な、お前は一生宿なしで歩いてる身の上だに。

セーラ (むせび泣きながら) このお金を溜めるには二年もかかったんだのに、これだけでは婚禮さして下さらないんですか、あたくしたち貧乏人の労働者は、まつ暗やみの晩も鐘を拵へたり、木の枝を燃やす黒い烟で眼をわるくしたりしてゐますのに。

(左手の方に酔つぱらつた老女の唄の聲きこえる)

神父 (マイケルが造つてゐる鐘を見ながら) その鐘は何時ごろ出来る？

マイケル もうすぐ出来ます。いま接目にハンドをひいてるところですから。

神父 今の十シリングにもう一クラオンとそのガロン入の鐘をよこしなさい、さうすれば婚禮の式をしてやるよセーラ・ケジイ。

メリイ (酔つぱらつて、突然うしろの方で怒鳴る) ラーリイは好い子だ、ラーリイは好い子だ、おい、セーラ・ケジイ――

マイケル 二人とも一寸黙つて下さい、今おふくろが来ますから、もし今のやうな話を酔つぱらつたところで聞いたら、わしどもはどんな目に會はされるか知れないから。

メリイ (唄ひながら登場)



どんな死にざまをすることか  
首絞められても改心せぬかと  
きけばラーリイは、よしてくれ、そりやみんなでたらめな  
坊さまたちのつくりごと。

セーラ さあその徳利をおよこし、土手下にこぼしてしまふといけないから。

メリイ (両手で壘を押へて、傲然といふ) 構つておくれでない、セーラ・ケジイ。なんだつて  
わたしが零すものか、ジエミイ・ネールの店から遠い路を歩いて来てわたしのこの両手で持  
つて来た徳利に、今ごろの時刻になつて、まだ酒がいつばい入つてると思ふのかい？  
マイケル (心配さうに) ちつたあ残つてるかい？

セーラ (壘の中を覗き見る) ほんのぼつちりしかなささうだよ。

メリイ (神父を見て、壘をかれの方に出す) 神父さん、よくおいでなさんした、おいしい口  
を一杯持つて来ましたから、どうぞ上がつておくんない、あんたは何時でもかなり飲み  
なさる方で、それにああ、今夜はひどく咽喉が渴く晩でござんすからねえ。(彼女神父の方  
に近づき、セーラ後から抑へ止める)

神父 (手で拂ひ止めるやうに) 「地獄の火に墮ちるやうな真似をするな、わしの側に來てはな  
らんぞ。

メリイ (機嫌をとる) 神父さん、わたしたちの前で遠慮しなさんなよ。わたしたちは、誰  
もかれもみんな罪人でさあねえ！ さあ一口上がつておくんない、最後審判の日までわ  
たしたちは一言だつて人にいふことちやありませんから。

(メリイ錫の杯を出して酒を注ぎ、神父に出す)

メリイ (片手に徳利を持ちながら、うたふ)

バリガーンのさびしい土手で

お安い鐘を造つてゐたが、

バリダツフのさびしい岸を

ちやうど……

(中途でうたい止める)

これは悪い悪い唄だねえ、セーラ・ケジイ、もうわたしを土手へ寐かしておくれ、神父さん  
が去つてしまふまで、唄をうたふのは止めておよう、あの人はずるい人だから、私



たちがあの人をもつと悪くしちや氣の毒だよ。

セーラ (メリイを寐かして、すこし笑ひながら神父にいふ) 神父さま、お婆さんのいふ事を氣になさらないで下さい、一杯飲んだあとは恥も外聞もありやしません、たとへ羅馬から法王様がおいでなさつても、やつぱり自分の杯で一杯上げて神父さんに云つたやうな事をいふのでござんせうよ。

メリイ (神父に) 神父さん、飲んでおくんないよ。ほんとに飲んでおくんないよ。飲まないやうな顔をしないでいいんですよ、から堰の山が天まで届くぐらゐあるくせにして。  
神父 (あきらめて) では、これでお前の健康を祝さう、神様の御免を蒙つて。

(神が飲む)

メリイ でかしたよ、神父さん、お前さんも達者でおいでよ。偉いね、お前さんは、ちつともえばらないで、わたしたちのやうなものとお酒を飲んでくれるとは。世界中のどこにだつてわたしたちみたいなの、貧乏な、けちな、おなかの空いた人間はゐやしないよ。

神父 お前たちは腹も空つてゐようが、しかし、飲みたい時に飲んで、足が草臥れば横になつて眠る、お前たちは幸福だ。(陰氣くさく溜息をする) わしの身になつて見てくれ、ひ

と口も飲まないでお彌撒を上げなければならず、病人があれば西にでも東にでも駈け歩き、その上に百姓たちの罪の懺悔もきかなければならないんだから。

メリイ (氣の毒さうに) 春の好い天氣の日に、お百姓の罪の話をきいてるのはつらうござんせうとも。

神父 (元氣なく) つらい生活だよ、實際つらい生活だよメリイ・ピルン、それに主教様が朝廻つて来て、それが老人と來てるから、何か見つけ出されれば大事さ。

メリイ (ひどく同情して) 神父さん、お前さんがそんなに溜息をついて話してゐなさんのをきくと、お氣の毒でたまらないねえ。(神父の膝を撫でてやる) さあ、元氣をお出しなさいよ、お前さんはかはいさうな獨身者だけど、わたしが夜ちゆう唄をうたつて聞かして上げるから。

神父 (彼女を止めて) 唄なんぞよしてくれ、お前のやうな、もうちき死なうといふ人間は、神様の前に兩膝をついて祈りでもしてゐる方がいいことだのに。

メリイ もしわたしが祈りをしなくつちやならないわけなら、神父さん、お前さんが一つやつておくんないよ、わたしたちにはお祈りは出來ないからね、わたしや始終きいて



ることだが、神父さんでもものは其ために出来てるもんだつてねえ。さあ、神父さん、一つやつておくんないよ、わたしや此世に生きてるあひだにすむぶんいろんな事を見ききしたけれど、ほんたうの神父さんがお祈りするのには、まだ一度も聞いたことがないんさ。

神父 おどろいたなあ！

メリイ 神父さん、嘘はいはないよ、わたしやお百姓連が寐る時、變てこな聲を出すのは始終きいてるが、あんな人たちの事なんぞ誰が相手にするものか？ わたしやお前さんのやうな學者が天の聖人さんたちにラテン語でしゃべるところを聞いたら、面白いことだらうと思ふよ。

神父 (あきれて) 黙んなさい、メリイ・ピルン、お前はそら恐しい無信者の婆さんだ、わたしはもうお前たちのやうなものと一緒にをはられぬ。

(立ち上がる)

メリイ (彼の服を抑へて) 神父さん、是非おいのりをやつて行つて下さい、ちよつと短かいお祈りでもやつて行つて下さい、わたしやお禮を言つて、この徳利に残つてゐるお酒をすつかり飲まして上げるから。

神父 (ふりもぎつて) 放してくれメリイ・ピルン、わたしは二十二年來この土地に住んでゐるが、お前ほどの罰あたりにはまだ會つたことがない。

メリイ (無邪氣に) まあ眞實ほんまですかい？

神父 ほんたうだ、神様にゆるしていただけ。(神父左手に行く、セーラ追ひかけて行く)

セーラ (低い聲で) 神父さま、あたくしのお願ひのことは何時やつて下さるんです、ほんとにやつて下さるんでせう、まさか此あたしをあのお婆さんみたいな罪の深い婆さんにならせるつもりぢやないんでせう？

メリイ (きいろい聲を出して呼ぶ) セーラ・ケジイ、こつちへおいでよ、神様のお顔の前で、神父さんとなしよ話はわるいよ。

セーラ (神父に) 神父さま、あれが聞えませう？ ほんとに、この世界を滅しちまひさうな恐しいわる婆さんですわねえ。

神父 (歩いて行きながらセーラにいふ) では、わたしは明日早く寺に行く、わしが通るのを見たらちつきにやつて來なさい、金とブリキの罐を持つて來るんだ、さうすれば婚禮さしてやる、すむぶん僅かの禮だが、わしがお前をあのお婆さんのやうな罪の深い婆さんにならせ



てしまふと思つては、良心がゆるさないから。

セーラ (舞臺から見送つて) 神父さま、ありがたうござんす、神様が今日からあなたをお守りなさつて好いことが來ますやうに。

メリイ (マイケルを肘で突いて) マイケル・ピルン、あれを見たかよ？ この月がかはつてから、あの女が浮氣つぽくなつたとわしや言つたらう？ 婚禮をしたがつてゐるかと思へば、それでゐて、路とほりのあつちの人やこつちの人にないしよ話をやつてゐる。

マイケル 黙んなさい、歸つて來ると、なぐられるよ。

メリイ あゝあゝ、天氣は好いけれど、わるい世の中になつて來たものだ、わしが若い時分から、あんな男とないしよ話をやつてるのをお前見たことはあるまい？ この世に生きてる男であのくらゐいやな爺さんはないんだがなあ。

(セーラ急いで戻つて來る)

メリイ (呼ぶ) 何を彼處で神父さんと話してゐたんだよう？

セーラ (機嫌よく) おやすみよ、もう黙つてね。

(マイケルとこそ、こ話をする)

メリイ (藁を入れた煙管を突き出して、うたふ)

あつちへ行つちやこそこそ、こつちへ來てもこそこそ——

(咳でうたひ止める) もう唄がうたへなくなつちやつたよ、セーラ・ケジイ。(煙管に火をつける) お前は浮氣もんぢやあるが、好い女だねえ、鑄掛屋さんの自慢女で、ウイツクロウの評判者で、バリナクレイの別嬪さんさ。お前のやうな女を暗い土手下でこんな晩に寂しく眠らせるのはかはいさうだねえ、木の葉にも春が來てゐるのに。だからね、その大きな枝に腰をおかけ、わたしが面白い話をきかしてやらう、ダンダルクに行かうとバリナクレイに行かうと、こんな面白い話は又とないよ、どれも偉い女王の話で、始めからしまひまでいゝんな相手を持へる話さ、どの女王もみんな晝間はひかる絹の着物を着てゐて、夜になると白い肌着になるんだよ。

マイケル (フリッキの鍵を持つて立上がり) さあ眠んなさい、もう俺たちの邪魔をしないこつた。

メリイ (れむたさうに仰向けに寝ながら) セーラ・ケジイ、この男なんぞに構ひなさんな。さあ腰をお掛け、この春の時節に、お前のやうな女がききたいやうな話をしてやるから。



セーラ (マイケルから鐘を取り布切で包みながら) かうしておけば、夜露でさびることはない。明朝あしたすぐ出せるやうに土手下に置いておかう、まづこれで此方は済んだからねえマイケル、あたしもいつしよに行つてチム・フラハルテの鶏を失敬して来ようよ。

(鐘を土手の下にかくす)

メリイ (れむさうに) わしはなあ、アイルランドの偉い女王さんのいい話を知つてゐるがなあ、セーラ・ケジイのやうな白い頸で、セーラ・ケジイが好い手つきでびしやりと打つやうに、びしやりと打つ好い手つきの女王さんの話だ。

セーラ (左手で手招きする) さあマイケルおいでよ。もう眠つちまふから。

(マイケル左手へ行く。メリイ二人が出かけるのを見て不意に飛び起きて、両手と膝をついてしまふ)

メリイ (あはれつぽく) どこへ行くんだよう? 歸つて来ておくれよう、こんないい晩に、ここへおれをひとりぼつちで置いてかないでおくれよう。

セーラ お前のおしやべりで世間ぢゆうを起しちまはないでおくれ、あたしたちは後の森を抜けて行つて、チム・フラハルテの家の鶏が井戸のよこの秦皮あまのこの樹に宿つてゐるのを二羽ば

かし取つて来るんだよ。

メリイ それでおれを一人ぼつちで置いてくんか? 歸つて来てくれようセーラ・ケジイ、ね、歸つて来ておくれ、もしどうしても出かけるんなら、銅貨を二つばかり置いてつて貰はう、もうちつと経つたら、わしも出かけて行つて眠られるやうにもう一杯のんで来るから。

セーラ あんまり飲みすぎたんだよ、横になつてぐつすりお寐よ、それが誰にだつて一ばんいい事だから、お前のやうな酔つばらひ婆さんには、それがいちばんいいんだよ。

(彼女マイケルと左手に退場)

メリイ (ゆつくりと起き上がる) 行つてしまつた、おれの足は弱つてゐて葦で打つてもぶつ倒れさうだ、頭の中には音がして、河の流が雨の降る中で二つの岩の間を流れ落ちる時のやうな音がする。(彼女土手下に行き、布で包まれた鐘を取り上げる) ああ、ああ、つまらないなあ! いくら好い話を知つてゐたつて、誰がこんな婆さんの話をきくものか、いよいよ赤ん坊が生れる時が来たと思つておつかながつてる若い娘か、寒い晩に腹が空つて眠れない小さい子供でもなければ、誰が聞いてくれるものか? (包の中から鐘をとり出し、三本の



から壘と藪とをその代りに入れて包を拵へる。あの二人も、もういくらもない若いあひだに勝手に歩き廻らうといふのも無理はないんだろ、だが、あいつらが歩き廻るのが無理でないにしろ、こんな好い晩に、空には乾いたお月さんもあるんだに、このメリイ・ピルンが飲みただけ飲ませずにおくといふ法があるものか。(鐘をとり上げて、代りの包を戻しておく) ジェミイ・ネールは正直者だ、この鐘の代りにするぶん飲ましてくれさうなものだ、で、明日は市の始めのうちだけ巡査の近所について歩いてたら、あの女もこのおれをぶんなくりやしまい、もし、ぶんなくつたところで、こんな好い晩に一人ぼつちで坐つてゐて、犬のほえるのを聞いたり、蝙蝠の鳴くのをきいたりして、もう死ぬのも長いこつちやない、なんぞと考へつづけてゐるのに比べて見れば、ちつとやさつと頭をなぐられるぐらゐ、何でもありやしない。

(「ラアライが死ぬ前の晩……」と唄ひながら退場する)

## 第二幕

舞臺、前幕と同じ。朝はやく。

セーラは古バケツで顔を洗つてゐる、それから髪を編みなほす。マイケルも服裝をなほしてゐる。メリイ・ピルンは土手により添つて眠つてゐる。

セーラ (欣ばしきうに、興奮してマイケルにいふ) そのこの包のどこに行つてごらん、お前の襟へまく赤いハンケチみたいな切れがあるよ、あたしには青のが。

マイケル (取り出す) こんな物につまらなく金を使ふんだな。なにしろ、今度はえらい散財さ、そして一文にもならないんだ。(ハンケチを持つて) この二つか？

セーラ さうよ(一つの方を取る)それをお前の頸のどこへ巻きつけるのよ、それからお寺にはいつて行く時、忘れずに帽子を取るんだよ、あたしやピデイ・フリンに訊いて見たのよ、あの人は二度目の御亭主と婚禮したからねえ。さういふ風にするんだつてあの人が教へて



くれたのよ。

八二

(メリイあくびをして、眠つた儘でねがへりをする)

セーラ (心配さうに) もう目を覺まして見つけちまふかも知れないよ、あたしや、婆さんがちつとも知らないうちにみんな片付けてしまふつもりだったのだけど。

マイケル きつと婆さんはおれたちを怒鳴りつけて、馬鹿にするに違ひない、大たはけだと言つて。

セーラ もう一度うまく眠らしちまはう、それでなければ何とかしてうまくはづしてしまはう、こんな悪魔のお弟子が不信心のおしやべりをやつて神父さんの御機嫌を損ねてしまつちやまづいからねえ。

メリイ (眼をさまして起き上がる、不思議さうに二人を見ながら、無邪氣らしくいふ) めかして  
るねえ、セーラ・ケジイ、それに今日は大騒ぎだな、顔なんぞ洗つて。鐵槌の音にや馴れて  
るから、耳にもはいらないが、顔を洗ふたあ珍しいこつたよ、おかげで起されちやつた、  
おてんと様にあたりながらよく眠つてゐたんだが。

(彼女注意深く見廻して、壘を隠した包の方を見る)

セーラ (イカすやうに) お婆さんもう一度横になつてお寐よ、まあだ、あたしたちが市に  
出かけるまでにや、かなり時間があるから。

メリイ (疑はしさうに) お世辭がいいなあ、セーラ・ケジイ、だがなあ、寐ることはけつこ  
うなことだが、こんな日には、起きるのもけつこうなこつた、日はぬくといし、空氣は好  
い氣持だし、丘の上からは山鳩の鳴いてる聲もきこえる。

セーラ そんなに好い氣持なら、お前すこしそこいらまで出かけて行つて、市に早くから  
出かけて行く金持連からちいつと貰つておいでよ。

メリイ 金持が朝はやくから出かけるのは、變な御機嫌の時だけさ、そんな時には悪口や  
お小言だけしか貰へやしない。

セーラ (癩癩を起して激しくどなる) ちやあ、お金を貰ふのもいやだし、眠るのもいやな  
ら、さつさと此處から出ておいで、ここちやお前に用はないから、夕方になつたつて歸つ  
て來るにや及ばないつ。

メリイ (マイケルの方に向つて、少し不安らしく) マイケル、困つたなあ、また朝つばらから  
がなり出したが、どうも、月がかはつてから、ひどく氣があらくなつてるぢやないか？

八三



(徐かに立ち上がり) おりや、あのガロン入りの罐でも賣りに出かけて来ようかな。

(そつちの方へ行き、包を取上げる)

セーラ (怒り立ってどなる) それはもとへお返し、ほんたうになんてしようがない飲んだくれ婆さんだらう、その罐まで飲んじまはうといふのかい、まあ草の露も乾かない朝つばらから?

メリイ (まだ手に包を持った儘で、御機嫌とりのやうな調子で) けふはおりや飲みたいんぢやない、胸がやけてるからな、あそこの井戸まで行つて腹んなかを冷して来ようかと思ふんだ、そのついでに此罐は村の先生様の娘つ子に賣りつけてやらうよ、好い氣の正直者だから、ちいつと嘘でもいやあ、金はたくさんくれるだらう。

セーラ その罐はそこへお置き、お前の話しつぷりで飲みたいのはちやあんと分つてる。

メリイ ここから市まで酒屋は一軒もありやしない、市で罐の代はすつかり渡すよ、一文も手つかずに。(左手に行かうとする)

セーラ (飛び立つて、鐵槌を取り上げ、嚇すやうにいふ) その罐を置いといで、といふんだよ。

メリイ (恐しさうに暫時彼女を見て、それから包を土手下におく) 氣がふれたのか、お前のや

うな偉い女が、どうしたつてえんだ?

セーラ (メリイの側に行き、彼女を左方に突きとばす) あたしや氣ちがひだとも、さあ、さ

つさと出て行つとくれ、用心するがいい。

メリイ (彼女の方に振り向いて) おれが出てゆけばな、おれは世間中にきかしてやる、お前はひどい不信心の野蠻人だ、いつかも、牧師さまのキヤベツの玉と自分の着物といつしよくたにして鍋で煮たといふ話も、(神父、彼女のうしろ、左手に来て、聞いてゐる)それからお前の影がお寺の内部に映るといつしよに神様の聖壇の上の明るい燭が、消えてしまつたといふ話も。

(セーラ彼女に向つて行く、彼女逃げようとして神父の腕の中にとび込みさうになる。神父を見つけると、彼女は肩掛で自分の口を叩きながら土手の方に行く、ひとり笑ひして)

神父 (今聽いてゐた言葉で少し怖くなつてセーラの方に向き) どうもお前たちは大へんな手合

だねえ? ゆうべはわしをかついだんで、わしなんぞに用はないんだらう。

セーラ (まだ壁の中に怒りを含んで) かついだんですつて! 神様の前で口約束したことを止めにするんですか?



神父 (曖昧に) お前は洗禮式で名を付けてもらつた人間ぢやないだらうセーラ・ケジイ、さうするとお前のやうな人たちにキリスト教の儀式をしてやるのは妙なもんだと思ふがな。  
(ポケットの中み探しながら、機嫌をとるやうに言ふ) で、わしはこのシリングをやつて一杯飲んでもらふことにして、これつきりで別れた方がいいだらうと思ふ。

セーラ それがあなたの言ふことですか？ もしあなたの約束したことを破りなされるんなら、あたしや冠を被つたピシヨツプ様のとこへ行つて、大勢ある前で訴へてやるからいいわ。

神父 訴へるつて？

セーラ 訴へますとも、もしあたしが跣の足を傷だらけにして血だらけにしたつてダブリンの市まで歩いて行つて訴へますよ。

神父 (困り切つて、自分の耳をひっぱりながら) 早くこんな日が済んじまふといいな、お前たちと何かしら關係のある仕事するのはあぶなつかしいからな。

セーラ ぢや急いで下さいよ、何も考へてる暇がなく、すぐ済んでしまひますよ。

神父 (負けて) ぢやあ、お前のいふことが道理かも知れないから、わしが入口から顔を出

したらば、すぐ寺に来てくれ。

(寺の中に入つて行く)

セーラ (後から呼びかける) ぢや行きますよ、神父さん、ありがたう。

メリイ (二人の側に来て、仰天したやうに、しかし怒つてはゐないでいふ) お寺に行くつて！ また婚禮しようつて馬鹿を考へてるんかい、さうぢやないか？ (セーラ彼女に背中を向ける) それで顔なんぞ洗つたんだな、それでゆんべはおれを酒の使にやつて、路で徳利の半分も飲ましたんだな？ (セーラの前に廻つて来て) また、婚禮といふ馬鹿な夢を見てゐるんか？

セーラ (誇るやうに) さうだよ、もうすぐあたしや婚禮しちまふ。もう今日からは誰にもあたしの事を悪い名なんぞ呼ばせない、ウィツクロウやウエツクスホードやダブリンの市であたしが金物を賣つてる時も。

メリイ (マイケルに向つて) それでお前がこの女と婚禮するのか、マイケル・ピルン？

マイケル (陰氣に) さうさ、仕方がないよ。

メリイ (暫時セーラを見てゐて、やがて馬鹿にし切つたやうに吹き出して笑ふ) へええ、この女は、ほんたうに、しつかり者だよ、ほんたうに。だが、おりや今日が日までおれの子がそ



れほどの阿呆者とは知らなかつた、世間でいふことだが、驢馬を育てるのも、密獵の犬を育てるのも、むづかしいことぢやない、馬は風をなめても育つといふことだが、男の子に分別をつけるのはむづかしいことだなあ。

マイケル (陰氣に) もしおれが婚禮しなければ、あの女は今夜あたりは氣取屋のジムと一緒になつて行つてしまふ、お前も知つてるだらう、あの女ぐらゐ男の連中に唄をうたつたり金を貰つたりするのが上手な女はゐやしない。

メリイ それでお前は神父さんに金を拂へば、女が何處かへ行かうと思ひ立つたのが止められると思ふのか？

セーラ (怒つて) お前の口前で邪魔をしないでおくれ、あたしが婚禮したけりや、したつていい譯さ、そこいらの眞つくりの小屋に寐てゐるそばつかす面の女が、驢馬の子の首を絞めるんだつておんなじ譯さ。

メリイ (なだめる調子で) そりや、婚禮したつていいわけだがな、セーラ・ケジイ、婚禮して、何のいいことがあるだよ？ 婚禮の指環を指にはめてゐれば、婆さんにならずにすむとでもいふのか、お前の綺麗な顔が何時までもしなびずにあるといふのか、痛い時に痛

みが癒るとでもいふのか、絹の着物を着て金の指環をはめて婚禮する立派な奥さん衆が子を生む時のくるしみは誰よりもひどいといふことだ、さういふ時にダブリンの市のお醫者さんに拂ふ金はいしたもので、立派な驢馬と車が一臺買へるくらゐなたいした金ださうだがなあ。

セーラ (惑つて) ほんたうかい？

メリイ (それだけ説き得たのを喜んで) 嘘だと思ふ人があるかい？ なにしろ、お前はまだこの世に生れて來てから何年とも經つてゐないんだからね、お前は何もろくすつば知らないんだ。

セーラ (不安には思ひながら、強くいふ) お前が立派な奥さん衆の事を知るわけがないよ、お前みたいなる者をあの人たちは側へよせつける筈はないぢやないか？

メリイ こつちの町で一杯、あつちの町で一杯と飲んで歩いてるうちには、人間もいろいろな智慧がついて世間のことがすつかり分つて來るのさ、暗い晩に、あつちこつちの樽の上に腰かけてしやべり合つてる男や女の話をきいてゐれば、お前みたいな人間だつてちつきに三月の野兎みたいに利口になつてしまふだらうよ。



マイケル (セーラに) 婆さんのいふのは眞實だ、もしお前がちいつと物が分つてゐりや、今でも馬鹿な眞似は中止にして、金を無駄にすることは思ひ切つてしまふんだ。

セーラ (きつぱりと) あたしや利口でも馬鹿でも構はない、ちやあんと約束したんだから、約束を守るよ。

メリイ どれだけよこせと神父さんは言つたんだ？

マイケル 金貨で十シリングと、あすここに袋で包んであるブリキの罐をやるんだ。

メリイ (驚きと恐怖を以て包の方を見る) 金貨とブリキの罐と、かい？

マイケル 半サヴァレンとガロン入りの罐とだ。

メリイ (あわてて立上がり) どちら、市の方の路へ出かけることにしよう、お前たちが坂路をぐんぐん歩いてくから、一緒ぢやおれが草臥れちまふ。(左手へ二三歩行き、それから振り向いて、セーラに御機嫌とりの聲でいふ) セーラ、あの罐は袋から出さない方がいいよ、そこいらを通る人がお前がそんな眞似をするのを見つければ、大笑ひで指さしをやりさうだからね、袋の中へそうつとしとけよう、セーラ、それが一ばんだ。

(左方へ行く、暫時立止まつて、困つたやうに周囲を見まはす)

マイケル (低い聲で) 何を考へてるんだらう？

セーラ (不安さうに) あんな優しい口をきく時はひどく悪いことを考へてる時だよ。

メリイ (ひとりごと) お寺にゐた方が無事らしいな、もし後で往來で見つかれば、あの女にぶつ殺されるかも知れない。

(よちよちながら右の方に大急ぎで戻つて来る)

セーラ 何處へ行くんだい？ そつちの方は市へ行く方角ぢやないよ。

メリイ おりやお寺へ行つてお前たちを祝つてやり、神父さんのお祈りも聞いて見ようよ。

グリーンナンに下りてく路は寂しい路だし、女の身にはどんな事が来るか分らないからねえ、寂しいところを一人で歩いてゐれば。

(寺の門に彼女が行きついた時、神父は白い法服を着て門に出て来る)

神父 (呼ぶ) さあさあ、来てくれ。一日ぢゆう此處で祈りをして待たせられてゐては大へんだ。まだ一と口も食はないで腹はすき切つてゐるし、朝飯は冷えてしまふし、主教様が今日あたり巡回においでなさるかも知れないから。

セーラ 今いきますよ、神父さま。



神父 まづ金を渡して貰はう。

セーラ ここにあります。

(セーラ金を神父に渡す。マイケル包を土手下から持ち来り、セーラより少し後に立つ。マイケル手で包に觸つて見て、メリイの方を意味ありさうな眼つきで見る)

神父 (金を見て) この金は確かだね、お前たちが何處で手に入れたものか知らないが。それから、罐はどこだい？

セーラ (包を取つて) ここにきれいな袋に包んでおきました。夜露でさびるといけませんから、包んでおきましたけど、どうぞ開けないで置いて下さい、でないと、みんなが、私たちの話を西にも東にも、丘の麓の方まで噂し歩いて大笑ひしますでせうから。

神父 (包を取りながら) わしに渡しなさい。鑄掛屋が罐を拵へたところで、誰が何といふものか？

(神父包をあけはじめる)

セーラ 神父さま、立派な罐ですよ、あたしたちは何も知らない貧乏人ですけど、罐は上等なのを造ります、この人は仕事の方ちや立派な腕があるんですから。

(神父包をあける。三本の空罐がこぼり出る)

セーラ あらどうしよう！

神父 こんな話があるだらうか？わしをだまして嘘を言つておいて、子供を婚禮させるにも足りないやうな僅かの金で婚禮させて貰はうとしたんだな。

セーラ (面目なさと驚きとを以て) 神父さま、これは悪魔がしたこととごさんすよ、あたしや決して嘘はいひません。(兩手をあげて) 神様の罰であたしが死んでも構ひません、もし、悪魔が包の中から罐をひき出したのでないのなら。

神父 (烈しく) もう歸つてくれ、嘘の誓言なんぞしないがいい。さあ歸つてくれ、わしがそんな話を信じるほどの大馬鹿だと思つてゐるのか、お前たちは賣つてしまつたんだらう、でなければ、大かた、ゆんべ酒と交換してしまつたのだらう。

メリイ (自分の手を神父の左の腕にのせて仲裁するやうな調子で) 神父さん、そんな事をこの女はしやしませんよ、この女には、てんで酒がちつとも飲めないんですからね。それに婚禮するのをひどく楽しみにしてゐたんですから、どうか勘辨してやつて罐のことは怒らないで下さいよ。からつ罐の一つばかり、あなたのやうな立派なお金持には何でもないぢや



ありませんか？

九四

セーラ (頼むやうに) 神父さま、十シリングの金貨だけで、婚禮さして下さいね、さうすれば今晚きつと立派な鐘を拵へて上げますわ——神様におつとめする神父さまが持ち歩きなされるにちやうどいいやうな鐘を。どうぞ今、婚禮をさして下さい、さうすればあたしこれから朝も夜もあなたの爲に一生懸命にお祈りを上げます、どんなに雨が降つてゐる時でも、雨の中で二つの黒い孔の中にあたしの膝をついてでも。

神父 (大きな聲で) お前たちはみんな、泥棒ずきの、嘘つき、たくらみばかりする、悪い奴らだ、みんな揃つて、さうだ。さあ、さつさと此處を立ち退いて貰はう、その土手の陰にあるきたらしい襪はひとつばも残さず持つてつてくれ。

メリイ (頭の上に肩掛を被つて) 神父さん、神さまのお情で、婚禮さしてやつて下さいよ、この儘でそんな風にこの女を追ひ拂つてしまひなされば、そこいらに行つてどんな事をやるか知れませんよ、路でどんなに狂人まがみたいにあばれるか知れませんよ。

セーラ (腹を立てて) それはほんたうだよ、どうも考へて見ると、婆さんがお酒と鐘と取つ換へたらしいね、ゆんべあたしたちが丘を歩いてゐる時分、めつちやくちやに飲みたがつ

てゐたから。

メリイ (怒つて叫ぶ) セーラ、ケジイ、神父さんにそんな嘘を言つて、たしなむがいい。

セーラ (だんだん腹立たしくなつて来て、メリイに) あたしに馬鹿な目を見せて、世間ぢゆうのおわらひ草にするんだね、それで、こすく逃げてくつもりか、お寺の中へ隠れるつもりか知らないが、今日はお前を抑へたが最後、にげようつたつて逃がさないぞ。

(とつくりを一本取り上げる)

メリイ (神父の後に隠れて) 神父さん、側へよせないで下さい、どうぞ、お助けに、側へよせないで下さい。もしこことここでわたしが頭を打ち割られて倒れてゐるか、それともお寺の入口であんた達二人がわたしのお墓を掘つてるところを主教様が見つけなすつたら、何と言ひなされるだらう？

神父 (セーラを手で拂ふ) あつちへ行け、わしの足許で人殺しをやる氣か？ さあ彼方へ行つてくれ。わしは親切な心からこんな困つた目に會つて、大馬鹿だつた。

セーラ (叫ぶ) わたしは世間ぢゆうの強い男が何人來たつて恐れやしないよ、神父さんぐらゐに負けてると思ふのかい？ さあ、そこをお退き、退かなきや、ぶんなぐるから。

九五



神父 駄目だよ、セーラ・ケジイ、お前たちの仲間なんぞわしは怖くはない。さあ、どこかへ行つてくれ、お前の用のないところなんぞにやつて来て、寺の門前で怒鳴つたり人殺しの騒ぎはやつてもらふまい。

セーラ あたしは此婆さんの頭を打ち割るか、この男と婚禮するか、どつちかしなければ、一步も退かないよ。もしお前さんがあたしたちとはつきり手を切りたければ、さつさと婚禮さしておくれよ、十シリングの金貨はお前さんにや結構なお禮だ、そんなに脂肪ではち切れさうな體をしてゐるぢやないか。

神父 わしはお前たちを側に寄せてこの寺を汚すつもりはない、お前のやうな者は何をどうしたところで地獄の罰は逃れがたいのだ。(前の十シリングを地に投げ捨てる) さあ、その金を拾つて、わしの眼に見えないところに行け、もしもう一度わしの眼にかかれば、巡査にいひつけて、フリーイ・オカレンの持つてゐた黒い驢馬を盗んだ人間は誰だか、茶色の驢馬がどこの草を食つてゐるか、教へてやる。

セーラ ほんとに教へるつもりかい？

神父 ほんたうに、教へる。

セーラ もしそんな真似をすれば、ウツイクロウからウエスホードやミースの土地の鑄掛屋仲間がお前さんところの窓ガラスを塞いじまつて、若い女を眺めたり色眼を使つたり出来ないやうにしてしまふだらうよ。さうして、レントの長い口にちのあひだもおなかに入れる物がなくなつて、すゐぶん困るだらう、あたしたちは玉子を産みさうな牝鶏なんて一羽だつてお前さんところの庭に残してはおかないから。

神父 (たうとう本當に腹を立てる) 行かないか、行かすば警察にお前たちの罪をすつかり書いて送りつける——火つけ、泥棒、強盜、強姦と、切りなしにやつてゐるんだ。早く行け、監獄か絞首臺から逃げる覺悟で。

マイケル (上着を脱ぐ) 神父さん、お前さんなんぞから逃げていく俺たちかい？ 早くお前さんところの小舎に歸るがいい、歸らなければ、おらあ驢馬の手綱で打ちのめして、お前さんの唸り聲をここからクレアの海岸まで聞えさせる。

神父 わしに手を擧げるつもりか？ もし、今わしに手を觸れれば、神はお前の手足を枯らしておしまひなさるぞ。早く行け。

(突きのける)



マイケル 神様がおれの手足を枯らしちまふと？ よし、神父さん、打たれて見る、神様がどうするか。

(マイケル手綱を持つて神父に向ふ)

神父 (土手に駈けあがり、叫ぶ) 巡査があそこにある、ありがたい。おうい、おうい！

メリイ (神父の口を片手で抑へる) なぐつて、路へ倒してしまへよ、向うに聞えるもんか。

(マイケル神父を倒す)

セーラ 口をふさいでおしまひ。

メリイ 齒のあひだにその袋をつめちまへ。

(鐘を包んであつた袋で神父の口を塞ぐ)

セーラ 袋を頭から被せる方がいい、もし巡査がやつて來たら、土手の向うつ側の泥炭池へさかさに突つ込んでしまはう。

(彼等何かの袋で神父を包む)

マイケル (メリイに) 静かにさせといてくれ、怒鳴るといけないから、ぼろを固く結んどけ。(自分のテンに戻る) 巡査は此方へ來やしない、今のうちに逃げてしまはう。

(彼等大あわてにそこいらの物を取りまとめる、神父は地に寐かされた儘もがいたり動いたりしてゐる、老女メリイ一生懸命彼をおとなしくさせようとしてゐる)

メリイ (神父の頭をそつと叩いて) 神父さん、静かにしておくれよ。どうしたんだい、そんなにもがいて？ 息がつまるのかい？ (袋の中に片手を入れて神父の口邊を探る、片手で背中を撫でながら) 息のつまる眞似をしたんだね、神父さん、お前さんの息は樂に出たり入りたりして、まるで四月ごろのひがし風みたいぢやないか。(優しさうな聲を出して) さあねえ神父さん、じいつとしてゐて、すこしは分別も辛抱もおぼえておくんさいよ、そしてこれからももう二度とかはいさうな罪人の溜めといた金を奪るやうな好い氣な眞似をしないでくれ(神父すこし靜かになる) さう、さう、それで好い子だ、神父さん安心してゐてもいいよ、決してお前さんに怪我はさせないから。こつちだつてお前さんをいぢめるのはほんたうにいやなのさ、なぜお前さんはわたしたちのやうな人間におせつかいに出て來たんだ、わたしたちは長あいことかういふ生活をやつて來たんだよ——父から子に、またその子に、母から娘に、その又娘に、だんだんと傳へて來たのさ、わたしたちにやお寺に行つて誓言する用はない——お寺ちや誓言するつて聞いているが——誰も本氣に出來ないやうな誓言をし



たり、それから、指環をはめるつてことだが、そんな物をはめてゐたら、小舎から驢馬をひつぱり出す時や、雨の降る空の下をまごつき歩いて、驢馬の足が滑りさうな時、手綱をひつぱつたりしたら、指に怪我をするぐらゐのことさ。

マイケル (荷物をまるめ片付け終り、セーラと二人で来る) さあ片づいた、泥炭池に入れちまはうか、今の話を巡査にしやべると困るから。

セーラ その方がいいだらう。

メリイ (すかさやうに) セーラ、神父さんに亂暴しない方がいいよ、ゆんべ一緒に一杯のんだ仲ぢやないか。それよりかみんなに迷惑はさせないつて、えらい誓言でもやらせて、勘辨してやらうよ、もし此人に溺死をさせちやつたら、きつと警察でこちとらをつつからげに絞罪にしちまふだらう、男だつて子供だつて女だつて驢馬だつて。

マイケル 誓言したつて守りやしまい？

メリイ かういふ人たちは神様が怒るのを怖がりぬいてくらしてゐるぢやないか？ (袋の中の神父の耳に自分の口を持って行く) 神父さん、誓言してくれるだらう、わたしたちをほうつておいて、しやべらないといふ誓言を？ (神父袋の中でうなづく) そうら見たか？ かはいさ

うに、袋の中の方で承知承知をやつてるよ。すつかりほどいて、動けるやうにしてやらう。

マイケル (馬にでも物をいふやうに) 神父さん、首を上げるだ。

(袋をとりはずす、神父髪の毛をもじやもじやにしてゐる。口の布を取りはずす)

メリイ 誓言するまで抑へてゐなさい。

神父 (弱い聲で) 誓言する、もし無事にわしを放してくれたら、お前たちの事は何もいはん、お前たちのやうな者のいふことを耳に入れたのはわしの誤りだ。

セーラ (指環を神父の指にはめる) 神父さん、指環を上げる、一生かかつてもけふの誓言を忘れなさんな。あたしはもうお前さんの馬鹿な話ですつかり氣持が悪くなつちやつたから、當分は婚禮だのなんだのつて口にいふ氣もない。

メリイ (徐かに立上がり親切さうに) あの子はいま氣が立つてゐるんだから、神父さん、氣にかけずにおいでよ、だが、あの子のいふのはほんたうだ、わたしたちは今までお前さんのお世話にならないで食べたり、飲んだり、戀愛もしたのさ、わかかつて、顔の綺麗なうちは。

マイケル さあ、急がう。おれたちの金を無駄にしないで済ませたなあ、神父さんも好



い人だよ。あれだけの金をクラツシの原で宿なし仲間と飲んじまつて大愉快をやらかさう。  
(彼等手に手に荷物を持つ。神父立上る)

神父 (片手を舉げて) わしは今日、お前たちの罪を言ひ立てて人間の罰をば受けさせぬと  
誓言はしたが、全能の神の御手から天の火を呼びおろさぬとは誓言しなかつた。

(宗教家くさい大聲でラテン語の呪詛を言ひはじめる)

メリイ 悪黨ぢぢいめ。

一同 (二緒に) にげろ、にげろ。生命がけで逃げろ。

(彼等かけ出す、神父一人みんなに勝ったかたちで残る)

—幕—

聖者の泉 (三幕)



人

マアチン・ダオル

やつれ汚れた盲目の乞食

メリイ・ダオル

マアチンの妻、やつれ果てた醜婦、同じく盲目、五十近い女

チミイ

初老にちかい中年の男、元氣のいい鍛冶屋

モリイ・ピルン

金髪のさつくしい娘

ブリード

同じく綺麗な娘

マツト・シモン

聖人

雲水の僧

ほかにも大勢の男女

百年かあるひはもつと昔のアイerland 東部の山中のさびしい村



## 第一幕

一〇六

右手、數個の大きな石などある道路、後方、低いくづれかけた石垣、その中央に近く垣の壊れた抜路あり、右手、寺院の壊れかけた門、門の傍に灌木のやぶあり、マアチン・ダオル及びメリイ・ダオル左手より探りながら出て来て右手の石の方に行き、その邊に腰かける。

メリイ　マアチンや、ここは何處だらうな？

マアチン　抜穴のここは通り過ぎたらう。

メリイ　（首を上げて）そんなに來たかねえ！　何しろ、今日は日が暖かになつたねえ、秋ももう末なんだが。

マアチン　（日あたりに両手を出して）暖かい筈だよ、こんなに高く南に廻つてるからなあ！　ひる前いつばいお前がその金色の髪をいちつてる間に、みんながクラツシの市いちに行つてしまつたらう。

メリイ　市に行きがけは駄目さ、牛をひつばつたり、豚の兒を車に載せてキウキウいさせて

行く時なんぞ、何をくれるものか。（腰かける）お前だつてそのくらゐ知つてるくせに、口小言ばかり言つてる。

マアチン　（彼女の側に腰かけて、彼女から渡された繻を裂き始める）口小言でもいはざあ、お前のどら聲をきいてると氣が變になる、どうもまつたく、不思議などら聲を出すなあ、お前は器量はいんださうだが。

メリイ　年が年ぢゆう、雨の降るなかでも野天でくらししてゐりや、どら聲にもならうぢやないか？　こんな生活くらしは聲のためにはわるいんだよ、それでもな、何時もわしらの顔や頸に吹きつけるあのくめつばい南風は、白い綺麗な皮膚かわのためにはいいんだよ、——わしのやうな皮膚のためにはな——綺麗な皮膚ほど、女をうつくしく見せるものはないからなあ。

マアチン　（機嫌よく、併しからかふやうに）おれは時々お前の美貌かほのことを考へると、分らなくなるよ、時々、お前がべつびんでないのぢやないかと思ふこともあるんだ、おれが子供で、目あきの時分には、美しい顔のものは聲も好い聲だつたがな。

メリイ　そんな事をいひなさんな、鍛冶屋のチミイやマツト・シモンやパツチ・ルウやほか

一〇七



にも大勢がわしの顔をほめたのをお前も聞いてるだらう、ペリナトーンではわしのことを盲美人と言つたのをお前も聞いてるぢやないか。

マアチン (前と同じ調子で) それもさうだが、いつかの晩がたモリイ・ビルンが言つたことがほんたうなら、お前は化物みたいださうだ。

メリイ (鋭く) かはいさうに、あの女は嫉妬(や)んだあね、鍛冶屋のチミイがわしの髪を褒めたあとだつたからねえ——

マアチン (嘲るやうな皮肉な聲で) やけたんだと!

メリイ やけたんだとも、マアチン・ダオル、もしあの子がやいたのでなかつたにしろ、年の若い馬鹿な人間は眼の見えない者をからかふのが癖だあね、わしらをだますのを手柄にでも思つてるんだらう、どんなにわしらが器量よしだつて、わしらにやそれが見えないんだからねえ。

(彼女満足し切つた様子で片手を自分の顔にあてる)

マアチン (す、し愚痴っぽく) おれは長い夜夜考へることがある、もしおれたちにたつた一時間でも、たつた一分間でも、自分の姿が見えたら素的だらうと思ふんだ、おれたちが

東部トウホの方の七つの縣に誰ひとり追つけないほどの立派な男や立派な女だと、自分たちで見ることが出来たらなあ——(にがく) さうすりや目あきの彌次どもがどんな嘘をいひやがらうと、ひと言だつて聞くんぢやないがなあ。

メリイ お前が大馬鹿でなけりや、今だつてあいつらのいふことは聞かないがいい、マアチン・ダオル、眼の見える人間は悪い奴らだよ、どんな美しい物を見たつて、見ない振をして、馬鹿馬鹿しい嘘を言つて悦んでるんだ、あのモリイ・ビルンがお前に聞かしたやうな嘘を言つて。

マアチン あの女は嘘をいつてるかも知れないが、あの女の聲は何時きいても好い聲だなあ、豚を呼ぶ時の聲だつて、長い草の中で鶏を呼んでる聲だつて。(考へ深く) ああいふ聲を持つてるのは、美しい柔かい丸つこい肉つきの女だらうと思ふ。

メリイ (呆れ切つて、また鋭くいふ) 丸つこからうと平つたからうと、餘計な心配をしなさんな。あの女が浮氣つばい馬鹿な女だつてことは遠くからでも分らあね、何時も井戸端で大騒ぎをして笑つてるぢやないか。

マアチン 若い女が笑ふのは氣持のいいもんぢやないか?



メリイ (にがく) 氣持が好いと? 女があんな大きな聲で馬鹿笑ひをしてるのを聞いてるのが氣持が好いのかい? ああ、ああ、あの女は男の心を取るのがうまいねえ、チミイが店で仕事をやつてる時、あの女がグライナンからやつて来ようもんなら、チミイは息をはずませたり、自分の手を握つて見たり、大騒ぎやらかすから。

マアチン (少し愉快げに) お前の側に並べて見れば、あの女なんぞ何でもない、いつもあの男が云つてるが、それにしても俺は、どこの男にしろお前の顔を見て息がはずんで来るのをまだ聞いたことがない。

メリイ わしはな、そこらの路をはね歩いて、足を見せびらかしたり、首を長くして男に眼づかひするやうな娘つ子とは違ふんだから……やれやれ、この世界はひどい事だらけだなあ、マアチン・ダオル、物欲しさうな眼つきをして、うまい口をきいて、何一つ本氣にもならないで、のし歩いてる奴らを見るとなあ。

マアチン (悲しきうに) そりや、まつたくさうかも知れねえ、が、人の話ちや、若い娘が路を歩いてるのを見るなあ素的なもんださうだ。

メリイ お前が目あきでゐたら、お前もほかの連中に負けない惡ものかも知れないな、わ

しや目あきと夫婦にならないでいいことをした、大悦びでわしの亭主になつてくれる男はたくさんゐたけれど——目あきといふものは、よつほど變なものだな、どんな眞似をやらかすか見當がつかない。

(暫時の間)

マアチン (何かに聴き入る) だれか路をやつて来る。

メリイ その草を隠してしまふがいい、あいつらがあら探しの眼で又見つけ出して、わしどもを金持だなんて云つて一文もくれないかも知れないから。

(彼等闇をかくす。左手から鍛冶屋のチミイが来る)

マアチン (乞食らしい聲を出す) おだんな様、どうぞ盲目めくらのマアチンに銀貨を一つやつておくんなさいまし、銀貨を一つ、銅貨でもよろしうございます、おだんな様が御繁昌なされますやうに、神様にお祈りいたしますでございます。

チミイ (兩人の前に立止まる) なあんだい、つい先だつて、俺の足音が分ると言つてたくせになあ!

(チミイ腰かける)



マアチン (平常の聲に返る) モリイ・ピルンがお前の前に歩いてる時か、それとも五六間も後からのらのらついて来る時なら、俺にも分るがなあ、お前が今日のやうな歩き方をやつてるなあめつたに聞いたことがないて。路で何かちがつた事にでも出つくはしたやうな歩きつぷりだな。

チミイ (息を切りながら暑さうに顔の汗を拭く) ほんたうに、お前はいい耳だな、嘘つきにしてもなあ。おらあ、まつたく、市いちで奇妙不思議な事をきいたんで、大急ぎでやつて来たんだ。

マアチン (少し馬鹿にした調子で) お前はいつでも不思議な事をきいたと言つてるが、大てい不思議でも何でもねえ事ぢやねえか、だが、今日のは、まつたく不思議な話かも知れねえぞ、お前が午すぎにもならない内に歸つて来て。クラツシの草つ原で音楽入りの見世物をやつたり、飛びつくらだの、踊りだのやるのを見ないで来るんだからなあ。

チミイ (ふくれて) おれはな、今ぢつきに此處んとこですばらしく不思議な事がおつばじまるのを知らせに来てやつたんだ(マアチン・ダオル仕事する手を止める) クラツシの草つ原にだつて廣いレンスタアぢゆうにだつて、まあだこんな事は一度だつてあつたことはねえ

んだ、だが、お前はたゞしたお利口もんだから、おれの話なんざあ聞く氣はねえんだらうよ。

マアチン (興味を以て、それを信じないらしく) ここで不思議な事がおつばじまるんか、ここでか？

チミイ ここで、この路の四つ辻んとこで、あるんだ。

マアチン ここんとこで何かあつたのは、いつぞや爺さんが金を持って家へ歸つてくところをぶつ殺されて、死骸は沼に打ちこまれた、かはいさうに、あれぐらゐなもんだらう。そんな事を今夜またやられちや困るよ、この四つ辻はおれたちの領分なんだ、お前たちの悪戯わるわざだの、不思議な眞似だのは眞つびら御免だ、俺たち二人が、これでけつこう不思議な見物みぶつだからなあ。

チミイ もし俺に思召があれば、今日ほんたうの不思議な話があるのを聞かしてやるんだがなあ、お前たちが考へもつかない嬉しい事が起るまいものでもないんだが。

マアチン (興味を以て) 岩のうしろへ酒屋でも出来るんかな？ 雨の降るなかを大骨折つて探りさぐり沼を越していかねえでも、ここにゐて一杯のめれば、ありがたいこつた。



チミイ (まだ機嫌わるく) 酒屋なんぞ出来やしない、まるで、そんな話ぢやねえ。

メリイ (チミイに機嫌をとる調子で) 泥棒をそこの樹へぶら下げるんぢやないかい、人間が首をくくられてぶら下がつてるところは面白い物だつてわしや聞いたことがあるが、それにしても、わしらにや面白いことはないよ、見えないんだからねえ。

チミイ (少し機嫌よくなる) だあれも今日は首なんぞ絞られやしない、メリイ・ダオル、だが、神さまのお助けで、お前が死ぬ時まで、首を絞られる人間を幾度でも見物が出来るかもしれない。

メリイ はあて馬鹿な事をいひなさんな……どうしてわしに大勢の人間が首を絞られるのを見物が出来ると思ふ、七つの時から盲らになつたわしに？

チミイ お前いま迄に聞いたことがあつたか、その海の向うに島があつて、四人のえらい聖人さまの墓所があるといふ話を？

メリイ 聞いたことがある、西の國からもみんなが其處までおまわりに行くといふ話だつた。

チミイ (力を入れて) その墓所のうしろに、青々した苔の生えた泉があるさうだ、その泉

の水を一滴でも盲らの目につけてやつたら、盲人は忽ちこの世に生きてる誰にも負けなく眼が見えるやうになるといふ話だ。

マアチン (興奮して) チミイ、ほんたうか？ お前、うそぢやねえか？

チミイ (不愛想に) ほんたうだ、マアチン・ダオル、お前今度こそほんとにしてもいい、お前もずるぶんいろんな出たらめを今まで本當だと思つてゐたんだからなあ。

メリイ どこかの若い衆でもやつて其お水を持つて来て貰はうか、あしたの朝、塚を洗つて、パツチ・ルウに行つて来て貰はう、あいつにたつぷり酒を飲まして、藁の中に隠してある錢をちいつとくれてやらう。

チミイ 俺たちとおんなじやうな罪の深い人間を役にやつても役にや立つまい、おれが聞いたにや、そのお水を持運ぶ人間の心がきたねえと、その清いお水まで汚れちまふんださうだ、路で娘つ子をながめたり、酒屋でひとくち飲んだりしてゐる間に。

マアチン (失望して) おれたちが自分で歩いてゆくには恐しく遠いとこだからなあ、いくら不思議な事でも、おれたちにや、ありがたくねえなあ。

チミイ (マアチンの方に向き氣短かく) 何しに歩いていくんだ？ お前たち、目が見えない



とほり耳もつんぽになつたんか、おれは、此處で不思議な事が始まると言つてきかしたぢやないか。

マアチン (カツとして) そんならそれで、涎のたれさうなお前のでけえ口をあけて、どんなあんばいしきにその不思議な藝當が始まるんか聞かせるがいい、無駄口をきいてるうちに日が暮れちまふ。

チミイ (不意に立ち上がる) どうら歸らう、(メリイ・タオール立つ) お前たちと尋常な口をきいて時をつぶすがものはねえ。

メリイ (立つて、自分の興奮を抑へ隠して) チミイさんや、まあわしの方に來て、あれに構はないでくれ。(チミイ立止る、彼女手探りでチミイの側に行き服をひつげる) お前わしにや怒つてゐやしまい、どうぞなあ、わしにすつかり話して聞かして、もうだますのはよしてくんな……お前が自分でそのお水を持つて來たんか？

チミイ なあんの、おれは持つて來やしない。

メリイ ぢやあ、その不思議な話をきかしておくれよ、……チミイさん……誰がそのお水を持つて來るんだい？

チミイ (心が和らいで) それはな、立派な聖人様を持つて來なさる、神様の聖人さまだ。

メリイ (畏れ入つて) 聖人さまが？

チミイ さつよ、立派な聖人さまが、長あい上着を着て、はだしで、アイランド中のお寺をめぐつて歩きなさるんで、お水をちいつとばかり提げて來なすつた、ああいふお方なりや、どんなぼつちりのお水でも、死にかけた者も癒してやりなさり、目の見えない者にも一靜かな日に高い空を飛んで行く茶いろの鷲のやうに、はつきりと物を見させて下さるさうだ。

マアチン (杖を探りながら) チミイ、どこにおいでなさる？ すぐ行かう。

チミイ まあ落ちついてゐなさいマアチン。聖人様は此處と山とのあひだの、お寺や名所を廻つてお祈りをあげてゐなさる、そして聖人様の後にはいつも大勢が従いて歩いてゐる——聖人様はけつこうなお祈りをお上げになつて、それから斷食もやりなさるんで、そのおかげでまるでお前の膝の上のからつぼの藺のやうに瘦せてゐなさるよ、それが濟むと此處へ來なすつてお前ら二人を癒して下さる——おれたちがお前らの話を申上げておいたか  
らな——それから其處の寺でお祈りをお上げなさるさうだ。



マアチン (急にメリイ・ダオルの方に向いて) ちやあ、今日おれたちは自分を見ることが出来るんだな? ああ、ありがたい、まつたく、ほんただらうなあ?

メリイ (ひどく悦んでチミイに) わしや、ちよつくら行つて、しまつといた肩掛を持つて来るひまがあるだらうか、人の話では、わしがあれを頭に被つてる時がいちばん美しく見えるさうだから。

チミイ そりや持つて来る時間はあるとも——

マアチン (何か聞き入る) 黙つて……河の方から人が来るやうだ。

チミイ (左手の方を眺めて、不思議さうに) あの娘たちは俺が来る時は聖人様の後について歩いてゐたんだがなあ……こつちへやつて来る(舞臺の入口ちかく行く) 何か手に持つて来る、まるで子供が前掛にたくさん玉子を隠して歩いてるやうにゆつくり歩いて来る。

マアチン (聞きながら) あれば、メリイ・ピルンだらう。

(メリイ・ピルンとアライド左手より登場、マアチン・ダオルの方まで行く、お水の器、聖人の鈴及び上衣を持つてゐる)

メリイ (口かるく) マアチン、よろこびなさい、わたしはね、西の國の四人の聖人さまの

お墓の側のお水を此處へ持つて来たよ、お前もぢつきにわたしたちとおんなじやうに眼があくよ——

チミイ (メリイの側まで行き、彼女の話を遮る) その話はこの男も知つてるんだ。だが一體、どこへ聖人様は行つてしまひなすつた、どうしてお前たちみたいな者にお水を預けなすつたんだ?

メリイ 向うの空に雲が出て来たんで、聖人様は遠路をするのが心配になりなすつたんだよ。今ね、グライナンの十字架のところで御祈禱するつて、繁つた森の中を分けて昇つて行きたすつたよ、あとで此路を通つて、そこのお寺へ來なさるとさ。

チミイ (まだ驚きが止まず) それでお前たち二人にお水を預けなすつたんかい? まつたく不思議だなあ。(すこし左手へ寄る)

メリイ 若い衆たちが聖人様にお話したんだよ、聖人様の昇つていらつしやうてえ路は茨だの、まつすぐな滑りさうな岩だのばかりで、誰にだつてとても物を持つては行かれませんで、それで聖人様はそこらを見廻しなすつたが、私たち二人にお水と、長あい上衣と、鈴とお渡しなすつたのよ、この世の中に、若い娘ほど汚れ氣のない清い者はゐないとお



つしやつて。

(メリイ・ダオルもとゐた席近く行く)

メリイ (腰かけながら、ひとりて笑ふ) はてさて、聖人さまは正直だねえ、だが、それも嘘ぢやないわ。

マアチン (前の方に屈みながら両手を出す) お水をおれの手に持たしてくれ、メリイ・ピルン確かにほんとだと思へるやうに。

メリイ (マアチンに水を渡す) 奇蹟といふものはあらたかなものさ、お前が手に持っただけで、癒るかも知れないよ。

マアチン (見廻す) だめだよ、メリイ。ちつとも見えやしない。(器を振る) ぼつちりつか入つてゐないぞ。まつたく驚いた奇蹟だなあ、これつばかりの物が盲人を癒して、立派な女だの、若い娘だの、この世の中にあるいろんな美しいものまで見せてくれるとはなあ。

(マアチン手探りでメリイ・ダオルを探して水の器を渡す)

メリイ (器を振る) やれやれ、ありがたいねえ――

マアチン (ブライドの方に指さす) あの子が持つてるなあ何だい、音がしてるが?

ブライド (マアチン・ダオルの側に行く) これは聖人様の鈴だよ、聖人様が御祈禱なさりに

どこかの山を上がつていらつしやる時この鈴を鳴らしていらつしやるのさ。

(マアチン・ダオル両手を出す、ブライド鈴を渡す)

マアチン (鳴らす) 美しい、いい音がするねえ。

メリイ その可愛い涼しい音をきいてみると、断食ばかりやつてゐなさる聖人様がお體につけて遠くの方から持つて来なすつたものだと分るねえ。

(ブライド、マアチンの後方を通り少し右手に寄る)

メリイ (聖人の上衣を擴げて) マアチンや、立つてごらん、聖人様の長い上衣をお前に着せて上げよう。(マアチン・ダオル立上がり少し中央に近く、前に進み出る) お前が神さまの聖人さんになつたら、どんな恰好だか見てやらう。

マアチン (立上がり、少し恥かしさうに) 聖人様といふものは美しいものだぞと教父さまたちが褒めなさるのをおれはたびたび聞いたことがある。

(メリイ・ピルン、上衣をマアチンにひつかける)

チミイ (心配して) メリイ、構はずにおいた方がいいよ、お前がその上衣で悪戯をしてる



のを聖人様が見なすつたら、何といひなさるだらう？

モリイ (氣にもかけず) 見える筈がないぢやないか、森の中でお祈りしてる人に？ (彼女

マアチンも振り向かして見る) なんて立派なありがたさうな聖人様だらう、ねえ鍛冶屋のチ

ミさん？ (ばからしい顔をして笑ふ) メリイ・ダオル、立派な好い男だよ、今お前が見たら、お

前はひどくえげつちまふだらうよ、神様のところから落つこちた天の使の長み<sup>かじ</sup>たいに。

メリイ (静かな自信を以てマアチン・ダオルの側に行きその上衣に觸る) ほんとに、今日わしらはえばれるだらう。

(マアチンまだ鈴をふつてゐる)

モリイ (マアチンに) ねえマアチン・ダオル、お前、一生のあひだ、さういふ姿で歩いてゐて、神様の聖人様たちと鈴を鳴らしてゐたら、うれしいと思はないかい？

メリイ (彼女の方に向いて、激しく) どうして神さまの聖人様たちと鈴が鳴らして歩けると思ふ、わしといふ女房があるに？

マアチン あれのいふのはほんたうだ、鈴を鳴らして歩くのは立派な生活<sup>よすび</sup>かも知れねえがおらあバリナトーンの盲美人<sup>めくらび</sup>と夫婦でゐた方が好いやうだ。

モリイ (嘲る調子で) そんな事を考へてるのかい、かはいさうに、どんな女だか、まるで知らないんだねえ。

マアチン まるで知らねえんだ。だが、今日あれの顔を見るのかと思ふと、たまらなく待ち遠しい。

チミイ (困つた様子で) お前はよく知つてるぢやないか、お前たちのやうな人間は手で觸るだけでもいろんな事が分るだらう。

マアチン (まだ上衣をいぢりながら) それは、分るとも。だが俺には顔のことはまるで分らねえ、それから立派な綺麗な上衣なんぞもな。俺は今までめつたに上衣に觸つて見たことはない、顔にもめつたに觸つたことはないんだ (愚痴っぽく) 若い娘つ子といふものは、ひどくはづかしがりなものでねえ、チミイ、それに俺なんぞのことは娘つ子は構つてくれな

いんだ、俺は好い男だとみんなが言つちやゐるが。

メリイ (機嫌よく、馬鹿にしながら) あの聲はどうだい、をかしいぢやないか、瘠せつぼちの若い娘たちの話をする時つていふと、あんな聲を出す、この西の土地の奇<sup>かづらしいもの</sup>観<sup>かん</sup>といはれてる女を女房に持つてゐるくせにして。



チミイ (構むやうに) お前たち二人とも今日は奇観あつらしいものを見るんだ、うそぢやない。

マアチン 彼女の黄あはろい毛だの、白い肌だの、大きな眼だの、奇観あつらしいものだとみんなが言つて聞かしてくれたが、まつたく……

ブライド (左手を眺めて) 聖人様が森の裾のそこから出ていらつしやる……モリイ、上衣を脱がしておしまひ、見つかるよ。

モリイ (ブライドにせはしく) 鈴を取り返して其人を石のところに立たせてお置き。(マアチン・ダオルに) さあ上を向いとくれ、上衣をはづすから。(彼女上衣を脱がして、それを自分の腕に投げかける、それからマアチンを押しやつてメリイ・ダオルの側に立たせる) そこに立つてゐて、大人しくしてゐるんだよ、口をきいちゃいけない。

(彼女とブライド、マアチン等より少し左方に、神妙にして立つ、手に鈴や上衣を持つて)

マアチン (心配らしく自分の着物をなほしながら) こんな風をしてお目に懸つて悪かあないか、手水をつかつてキチンとしないでもいいだらうか?

モリイ どんな風をしてゐたつて構ひなされるものかい……聖人様は、アイルランドいちの別嬪の側を歩いてゐなすつたつて、御自分の眼を上げてその女の顔を見なさりもしまし……

……だまつておいで!

(聖人、左手より、群衆を従へて来る)

聖人 これが話にきいた二人の氣の毒な人たちか?

チミイ (世話人らしく) 左様でございます、聖人様、こやつらは何時もこの辻に出てをりまして、通りがかりの人たちに錢を貰ひましたり、燈明あかりのために藺の皮を剥がしましたり、それでちつとも悲しさうな顔もいたしませんで、大聲で勝手な事を申して、常談好きの者とは常談も言ひ合つたりしてをります。

聖人 (マアチン・ダオル及びメリイ・ダオルに) 月日の光も見ることが出来ず、神に祈つてをる聖いひじりの姿を見ることも出来ぬお前方の身の上はつらいものであらう、しかし、お前方のやうに不幸の中で元氣よくしてゐる者こそ今日神がお前方に與へて下さる視力めいりきをも立派に役に立てることであらう。(上衣を取つて身にまとい) 草もない裸の岩の上に神の四人のひじりの墓がある、この水がまづしい裸の人たちの爲に用ゐられるのも、不思議はない。(水と鈴とを受取つて肩からぶら下げる) わしが遣はされたのは、お前方のやうなしなびた貧しい人々のところだ、金持はお前たちを見返りもしまし、ただ僅かの錢かパンくづでも投



げてやるぐらゐなものであらう。

マアチン (心配さうに身を動かして) その人たちが彼女を見つけますと、こんな美しい女……

チミイ (マアチンを振り動かす) 黙つて、聖人様のお言葉をきいてゐろ。

聖人 (彼等を暫時ながめて、言葉を續ける) たとへお前たちはどんなに汚れやつれてゐようとも、全能なる神はアイルランドの金持どものやうではおいでなさらぬから、お前たちをあはれに思召されて、カシラの灣にわしが小さい舟に載せて持つて来た水の力で、お前たちの目をあけて下さるであらう。

マアチン (帽子を取り) 聖人様、わしや待つてゐます——

聖人 (マアチンの手を取り) わしはお前を先きに癒して、それからお前の妻を癒すことにする。その寺に行かう、神に祈りを捧げなければならぬから。(行かうとしてメリイ・ダオルに言ふ) 心を静かにして心の中で神にお禮を申上げてゐなさい、この世の主であらせられる神の御力が、お前ごとき者の上に與へられるといふことは誠に大なる奇蹟と言はねばならぬ。

群衆 (聖人の後に押合つて) 行つて見よう。

ブリイド おいでよ、チミイ。

聖人 (彼等を手眞似で押へる) その儘で待つてゐなさい、わしは大勢の者に御寺の中でひそひそ話をやつて貰ひたくない。そこで待つてゐなさい。そして罪に依つて盲らもこの世に生れ来たといふことを考へて、いつはりの豫言者や異教人や、婦女子や鍛冶屋どもの言に迷はされぬやうに、人間の靈を汚さうとする凡ての知識に迷はされぬやうに、自分たちめいめいの爲に祈りを上げてゐるがよい。

人々退く。聖人寺に入る。メリイ・ダオル寺の入口の方に半分ほど手探りで進み、路に近く跪く、人々右手の方にかたまつてゐる。

チミイ 聖人様の聲はすてきな好い聲だねえ、斷食なんぞやりなさらなければ、立派な強い人だらうになあ！

ブリイド 聖人様が手を動かしたさるところを見た？

メリイ この土地で誰か聖人様みたいにお祈りが出来ると、すてきだわねえ、この土地の私たちの井戸の水だつて、お祈りさへ本式に出来れば立派に利目があるに違ひないんだよ。



さうなればあんな寂しい所から水を持つて来なくつても大丈夫なだけけれど、あすこの土地と来たら、ちやあんとした家もなし、立派な様子の人間もゐないんだつてね。

ブリイド (右手より寺の戸口の方を見入りながら) ごらんよ、マアチンがひどく顛へてゐるわ、跪いて。

チミイ (心配さうに) かはいさうに……今日あれが自分の女房を見たら、どうするだらう？ あんな皺くちやのしなびた婆さんを美しい女だなんて嘘をきかしてゐたのは悪かつたなあ。

マツト あれが怒る理窟はないよ、おれたちはあの男が目が見えないあひだ悦ばしたり、うぬぼれさせたりしてゐたんだからなあ。

モリイ (メリイ・ダオルの席に腰かけて、髪を直したりして) もしそれで怒つたところで、これからはおかみさんの事はかし考へてゐる暇はないだらうよ、誰だつて二週間か三週間も自分の女房の顔を見てゐたら、女房なんて澤山になつてしまふだらうさ。

マツト それは眞理だよモリイ、お前の御亭主になる男が、夜ひる、お前の側にゐて、嬉しい思ひをするよりは、あすこの路つばたに跪いてゐるあの婆さまの事で、おれたちが嘘

をついたお蔭で、盲らのマアチンの方がどれだけ嬉しい思ひをしたことか分らねえ。

モリイ (侮り切つて) 餘計な口をきかないがいい、マツト・シモン、わたしの御亭主になるのはお前ぢやないから、たとへお前にその思召があつて、どんなにうまい口をきいたつてお世辭を言つたつて。

チミイ (あきれてモリイに) 聖人様がそこで祈りをしておいでなされるに、大きな聲をしなさんな。

ブリイド (大聲で) 黙つて……黙つて……目があいたやうだよ。

マアチン (寺の中で大聲でいふ) ああ、ありがたい……

聖人 (おごそかに) アイルランドをあはれみて、おんめぐみを下したまはりたる父と子と聖靈をほめたたへまつる……

マアチン (感極まつて) ああ、ありがたい、ほんとに見える……お寺の石垣が見える、石垣の上の青い羊齒が見える、そして聖人様、あなたも見えます、大きい広い空が見えます。

(マアチン歡び切つて夢中で駆け出し、メリイ・ダオルが立たうとするところを通り過ぎる、通



り過ぎる時彼女の方を少しよけて行く)

チミイ (他の人たちに) 彼女がまるで分らないんだね。

(聖人マアチン・ダオルの後から出て来てメリイ・ダオルを寺に連れて入る。マアチン・ダオル人の方に来る。男たちはマアチンと娘たちの中間にある。マアチン杖を以て自分の位置を確かめる)

マアチン (嬉しそうに叫ぶ) あれがチミイだ、おれには、頭の黒さでチミイが分る……あれがマツト・シモン、マツトは脚の長さで分る……あれはパツチ・ルウだ、悪戯すきの眼をして、赤い毛だ。(メリイ・ダオルの席にあるモリイ・ピルンを見る、マアチンの聲の調子で、) 燃る) ああ、みんなの聞かしたのは嘘ぢやない、メリイ・ダオル。ああ、おれがお前を見ないうちに死んでしまはなかつたことを神様にも七人の聖者様にもお禮いはう。あのお水にもお禮いはう、そのお水を國ぢゆう持つて歩きなされるそのおみ足にもお禮いはう、今日といふ日にもお禮いはう、聖人様をここへ連れて来てくれた人たちにもお禮いはう、お前の髪は美しい髪だなあ(モリイ少し困って頭をうなだれる)そして柔らかい肌も、眼も、うつくしいなあ、今まで見えなかつたその目が見えるやうになつたら、聖人様方も天からおつち

て來なされるかも知れない。(彼女の側に行く) 首を上げて見せてくれメリイ、おれは東の國の王様たちよりももつと幸福だといふことをよく知りたいからなあ、首を上げてくれ、もうちつきお前もおれを見ることが出来るよ、おれだつてそれほどみつともない人間ぢやな

い。

(マアチン彼女に手を觸れる、彼女飛びあがる)

モリイ 退いておいで、わたしの顔をよごさないでおくれ。

(人々大聲に笑ふ)

マアチン (心惑ふやうに) お前の聲はモリイの聲だ。

モリイ わたしが自分の聲を出したつて、それがどうしたの？ わたしを幽霊だとも思

つてるのかい。

マアチン お前たちの中でどれがさうなんだ？(アソイドの前に行く) お前がメリイ・ダオルか？ みんなの言つたのにお前の方がよく似てるやうだ。(彼女を熱視する) お前の髪は黄ろいし、肌は白いし、お前の肩掛からはおれが持つてる草の匂ひがする。

(マアチン彼女の肩掛を抑へる)



ブライド (肩掛をひつたり) わたしやお前のおかみさんぢやないよ、そつちへ行つとくれ。

(人々また笑ふ)

マアチン (あやぶみながら、他の娘に) ぢやお前か？ お前はそれほど器量よしぢやないがお前でもたくさんだ、お前の鼻つきはいいし、手や足も綺麗だから。

娘 わたしはまだ盲らと取つ違へられたことはないよ、目あきの女はお前みたいなもの夫婦になる氣づかひはない。

(彼女横を向く、人々また笑ふ、彼等すこし後方に離れて、マアチンを左手に一人のこす)

人々 (嘲る) マアチン、もう一度當てて見な、もう一度、今度は見つかるよ。

マアチン (腹立たしく) どこへ彼女を隠したんだ？ お前たち、けちな畜生の仲間が、おれの一生の大事な日におれをなぶり者にしたり、馬鹿にしたりするといふのは、ひどいやないか？ ああお前たちは好い氣になつてるんだな、ろくでなしの泣きさうな眼をしてるくせに、西の土地に二人はないと言はれたおれの女房とこの俺をなぶりものにして、好い氣でゐるんだな？

(背中を寺の方に向け此言葉を言つてる間にメリイ・ダオル目あきになつて寺を出て来る、にやにやとはにかみ笑ひをしながら左手に向つて寺から出て来て、マアチンの少し後方まで来る)

メリイ (マアチンが言ひ止めると同時に) どれがマアチンだい？

マアチン (急に身を振り向けて) たしかに彼女の聲だ。

(二人あつけに取られて見交す)

メリイ (マアチンに) 側に行つて、願のところに手をかけて、わたしに言つたやうな事をいつてごらん。

マアチン (低い聲で、激しく) もし今俺が口をきけば、おれはお前たち二人にひどい事をいはなけりや……

メリイ (メリイ・ダオルに) メリイお前何もないのかい？ 肥つた脚と、羊のやうな短かい頸の、この人をお前どう思ふ？

メリイ 神様が目をあけて下さつても、目の前にかういふ人を見せて下さるとは、なさない。

マアチン 自分の眼に自分が見えないのを、神様の前に兩膝ついて禮をいへ、もしお前に



自分の姿が見えたら、きいきい聲を出して谷の中をかけ廻る氣違ひ婆のやうに、お前も氣が狂つて、そこらを駈けずり廻るだらう。

メリイ (少しづつ自分を呑み込めたらしく) もしわしがみんなの言つたやうに美しくはないにしろ、わしや髪のももある、大きな目もある、白い肌も――

マアチン (怒りに充ちた聲で叫ぶ) 髪の毛だと、大きな目だと? ……世界のどこの隅の牝馬の頭のひとつちよぼの毛だつて、お前の頭のきたならしいもじやもじやつ毛よりは餘つぽど見方がいい、どんながつがつの牝豚の二つの眼だつて、お前が海のやうに青いといつて、その眼よりは美しい。

メリイ (彼の言葉を遮つて) けふお前を癒してくれたのは悪魔だらう、そんな牝豚なんぞの悪口をいふのは、悪魔がけふお前を癒してくれて嘘つき狂人にしたんだらう。

マアチン お前こそ、十年この方、俺によるひる嘘をついてゐたな、だがもう神様がおれの目をあけて下さつたんで、皺くちや婆の正體が見えた、お前なんぞおれの子を生む女ぢやな。

メリイ お前に似たくしやくしやの子なんぞ生むものか。お前よりはもつとましな男と夫

婦になつた女でも、子供がないのを神様にお禮いふがいい、空を飛んでゐる雲雀や鴉や天の使を驚かすやうな子供を生んでこの世界のお荷物にして天を寂しくしないことを、お禮を言はう。

マアチン どこか寂しいところを探して身を隠してしまへ、さあ行け、さもなければ、男も女もお前を見て、神様の聖いお水でどうぞ自分たちの目を見えなくして下さいと、夢中になつて膝から血が出るまで祈りすることだらう、誰だつてお前のやうなものを見てゐるよりは百年も目が見えないでゐた方がいい、千年も見えないでゐた方がいい。

メリイ (杖を上げて) わしがひどくお前を打つたら、お前はまた盲らになれるだらう、そしてもうお前の願つてゐることも叶つたから――

(聖人寺の入口に現はれる、祈りに首をうなだれてゐる)

マアチン (杖をあげてメリイ・ダオルを左手の方に追ひ拂ふ) 退いてゐろ、退かなけりや、お前の頭のけちな腦みそを往來に叩き出してやる。

(マアチン彼女を打たうとする、チミイ彼の手を抑へる)

チミイ 亂暴をやつちや済むまいぞ、聖人様がお祈りをやつてゐなさになあ?



マアチン 聖人なんぞ勝手にしやがれ。(チミイから離れようともがく) たつた一週でいい、うんと彼女を打たしてくれ、後生だ、さうすりや、もう俺は死ぬまで大人しくしてゐる。チミイ (彼を振り動かす) 静かにしないかといふに。

聖人 (進んで中央に立つ) 二人とも歡びに心が亂れてをるのか、それとも、見る物がはつきり分らんのか、始めて癒された者は、よくそんな事もあるが？

チミイ 聖人様、二人ともはつきり見えすぎるのでございます。今二人とも大喧嘩をやりました、お互にみつともない恰好をしてゐるといつて。

聖人 (彼等のあひだに進み入る) お前たちの目をあけて下すつた神がお前たちの頭にもう少しの分別をも與へて下すつて——この世の二人のあはれな罪人であるお前たち二人の互の姿をばかりは見えてゐないで——時には高い山々にも海に流れおちる急流の上にも輝く神の靈の光輝を見ることが出来るやうに、わしは祈る。さういふ事を考へてをれば、お前たちは人間の顔のことを忘れてしまふであらう、そして神に祈り神を讃へて、すぐれた聖人と同じやうに、古い衣を身にまとひ皮は骨を蔽ふばかりの生活をもするやうにならう。(チミイに) もう落ちついてをるやうだ、放してやりなさい。(マアチンをはなす) そしてお前も、

(メリイ・ダガルに言ふ) 大聲であらがあがふことは止めなさい、女には悪いことだ。そして神の御力を見ることが出来たお前がた皆の衆、暗い夜々もけふの事を忘れずに、アイルランドのまづしいともしい人たちの上に神の大なる慈悲と愛憐とを與へられたことを考へてゐなさい。(上衣を身にひきまとひ) それでは、お前がたみんなの上に神の祝福を祈る、わしはこれからアナゴランに行く、そこにはつんぼの婦人がゐる、それからララダに行く、そこには白痴の男が二人ゐる。それからグレンアシルに行く、そこには生れつき盲らの子供たちがゐるといふことだから。そして今夜は聖ケピンの床に寐て、神に感謝し、お前がたみんなの上に大なる祝福を祈らうと思ふ。

(聖人首をさげる)

—幕—



## 第二幕

村の往來際、左手、鍛冶屋の仕事場の戸口、毀れた車やその他いろいろ散らかつてゐる。中央に近く井戸あり、その上に板がのせてあり、その後方に人の通る餘地あり。マアチン・ダオル仕事場近くに坐つて木の枝を小さくちよん切つてゐる。

チミイ (仕事場の中でカンカン音をさせて、やがて呼ぶ) おい、急いでやつてくんない……ひるつからあたらしく火を起さなくつちやならないんだに、まあだ半分もやつてゐないぢやないか。

マアチン (陰氣くさく) ひるまでこの枯枝を叩き割つてゐたらおれは死んじまふ、豚の食ふほどの物も食はせられないで、腹が空つてしようがない。(戸口の方に向き) お前が自分で出て来て叩つ切れ、ぜひ此枝がいるのなら。人間といふものはなあ、毎日ひとつきりは休息の時間がなくてどうなるものかい。

チミイ (籠み持つて出て来て、じりじりしながら) もう一ぺん追ん出されて、乞食がしたいの

か? 考へて見ろ、お前は食はして貰ひ、寐る小屋も貰ひ、仕事賃も貰つてる、お前の話をきいてると、俺がお前をなぐつたり、お前の金貨を盗みでもしさに聞える。

マアチン 盗まれるやうな金貨を俺が持つてれば、お前は泥棒だつてやりかねないぞ。

チミイ (籠を投げ捨て、すでに切られた枝を拾ひ上げ戸口に投げ) だいちやうぶお前が金貨を持つ心配はない、そんななまけ者のやくざものが。

マアチン さうさ、お前んとこにゐちや、金貨を持つ心配はあるまいよ、おれが盲目でグライナンに坐つてゐた時分の方が、此處へ来て一日ちゆう一生懸命働いて貰ふ金より、よつぽど餘計もらつてゐた。

チミイ (呆れて、手を止めて) 一生懸命はたらくと?(マアチンの側に来て) おれが、一生懸命はたらく働き様を教へてやる、上着を脱ぎなさい、袖をまくるんだ、そしておれが仕事の灰をかき捨ててしまふあひだに、うんとどつさり切れ、でなければ、もう一刻もお前を置いちやおかれない。

マアチン (恐しさうに) この寒そらに上着なしでゐて風をひけといふんか?

チミイ (命令するやうに) そら上着をぬぐんだ。それとも追ん出されて乞食になるか。



マアチン (にがく) ああ、なさけない！(上着を脱ぎはじめ) お前はおかみさんが死んだ時、シーツをひつばいでお墓に埋めたといふ話だが、それに、お前は冬になると生きてる家鴨の毛をむしつて、皮ばかりで寒中大雨の中を駆け廻らせておくといふ話もきいた。(袖をまくし上げる) ほかにもいろんな不思議な噂をきいたがな、今日といふ今日から、おれはどの話もみんな眞實にする、そして人にもきかしてやる。

チミイ (ふとい枝を下から引き出して) さあ、こいつを切るんだ、おしやべりはもう止めた、おれはてんでお前の話なんぞ聞いちやゐないから。

マアチン (枝を受け取り) ひどく大きな枝だなあ、こんな大きな木を切るのはつらいな、樹皮はつべたいし、空氣のなかの霜で手がすべるに。

チミイ (もう一と抱へかかへ上げて) 今月になつたんだ、寒いのも當前だらう、氷るのも當前だらう？(仕事場に入る)

マアチン (枝を切りながら不平さうに) あたりまへかなあ、チミイ？「毎日毎日しめつばいいやな日ばかり来る、おれは盲人でゐて、山の上に吹きまくられるうす黒い雲なんぞ見ない方がいい、みんなが、寒さのために、お前の鼻みたい赤い鼻をしてるのを見ない方が

いい、お前の目みたいなの、泣きさうな眼をしてゐるのを見ない方がいい、氣の毒になあ、チミイ。

チミイ (月口に向いて瞬きしてゐるのが見える) 目があいたのが不足になつて来たのか？

マアチン (ひどく愚痴に) 目が見えるのは、情ないことさ、お前のやうな人間の側でくらすのも、情ないことさ(枝を切り割つて投げ捨てる) 女房を持つのも情ないことさ(また別の枝を切り) おれが思ふに、神様がこの世を見なされば、悪い日ばかりで、お前のやうな人間ばかり歩き廻つてゐて、それが濕糞どろくその中にすべり込んでばかりゐるんだから、神様も情なく思ひなさるだらうよ。

チミイ (鐵床の上で鍋鉤を叩きながら) 忘れちやいけないぞマアチン・ダオル、聖人様が癒して下さつた者でも、又暫らく立つてから見えなくなる者が澤山あるんだ。噂にきけば、メリイ・ダオルも又眼がかすんで来たといふ話だ、もし神様が今のお前の言ひぐさを聞きなさりや、恕してはお置きなさるまい。

マアチン おれの目が見えなくなる心配はない、こんな曇つた日でも、お前の目のまはりの意地わるの皺まで、おれには一本のこらす見えるんだから。



チミイ (鋭くマアチンを見る)「東の方の雲が晴れてから、今日は曇つてはゐないぞ。」

マアチン おれを恐しがらせようと、そんなに一生懸命になりなさんな。おれが盲らの時分、お前はおれにでたらの嘘ばかりついてゐたつけ、もう好い加減に、嘘はやすみだ (この時メリイ・ダオル右手より人に氣づかれず入る、青い物をいっばい入れた袋を腕にかけてゐる) アイルランドの大馬鹿どもが時々馬鹿をやりくたびれてやすみにしてくれなけりや、人間もらつくりと落ちつく暇はないよ (ふつと顔を上げてメリイ・ダオルを見る) やれ、くはばら、また來やがつた。

(マアチン、彼女に後を向けて忙しく働きはじめる)

チミイ (彼等の方に見向きもしず通りすぎようとするメリイ・ダオルに、面白さうに) メリイ・ダオル、あの男を見な。朝つばらから今までなまけて無駄口ばかり叩いてゐたあの男に一生懸命仕事を始めさせたとは、お前も偉いな。

メリイ (かたぐるしく) チミイさん、いつたい、何の話だい？

チミイ あの男の話さ、あすこにゐるあの男を見な、シャツから背中がはみ出てゐるぜ。今夜お前ここへ來て着物のほころびを縫つてやるがよからう、すゐぶん長く話もしないぢ

やないか。

メリイ お前さんたち二人でわしをいちめておくんなさるな。

(つんとして左手に去る)

マアチン (仕事を止めて彼女の後を見おくる) 不思議だなあ、あいつは二日とおれの顔を見ずにはゐられないんだから。

チミイ (嘲りながら) お前の顔をか？ まるでお前の方を見ないで横を向いて行つちやつたちやないか、土手の此方側で酔つばらひが女と話でもしてゐるのを神父さんが見ないで通るやうになあ。(マアチン・ダオル立上がり、仕事場の隅まで行つて左手を眺めてゐる) よせよ、あんな女なんぞ構ひなさんな。よせと言つてるになあ、お前の着る物や食ふ物の心配もせず、かなしいとも思はずに、ぐんぐんお前を捨ててつた女だ、そんな奴の心配をしなさんな。

マアチン (腹を立てて大聲で) チミイ、お前も知つてる筈だ、おれの方からあの女を追つ拂つたんだ。

チミイ 嘘をいへ、だが、何方が何方を追ん出したつて、おれの知つたことぢやない、早



く此方へ戻つて来て仕事をやんな。

マアチン (向き直つて) いま行く。

(マアチン中央に向つて一二歩進み、立ちどまつて右方を見る)

チミイ 何を見てるんだ?

マアチン 向うから来る人がある……モリイ・ピルンのやうだ、水の入物を持つて歩いて来る。

チミイ モリイが来たつて、お前がなまけてゐるにや當らない、あの女に構はずどしどし枝をちよん切つてくれ、もうちつと立つたら輪を吹いて貰ひたいから。(鍋鉤を投げ出す)

マアチン (叫ぶ) 今度はおれに焦げるやうなあつい思ひをさせるのか? (振り向いて鍋鉤を見て、それを取り上げる) 鍋かぎか? こんな物をこさへるんで朝つばらからくしやみやつたり汗をかいたりしてゐたのか?

チミイ (鐵床の上に身をよせかけて、満足したやうにいふ) 女房を持つ前にやいろんな物を拵へなくつちやならないよ、昨夜ゆんべきいた事だが、聖人様が又ぢつきにこの村をお通りになるさうだから、おれは聖人様の手でおれとモリイを夫婦にして貰はうと思ふんだ……あの聖

人様は、無料たぶでやつてくれるといふ話だ。

マアチン (鍋鉤を下において、チミイをじつと見る) モリイもお前のやうな立派な丈夫な身體の亭主を授かつたことを神様によつぽどお禮いはなくつちやなるまいよ。

チミイ (不安らしく) お禮を言つてもいいだらうぢやないか、あの女がいくら器量よしにしたところで?

マアチン (右手の方に眼をやる) それは、まつたく、さうだらうとも……神様はお前さんたち二人をうまく組合せなすつたもんだ、もしお前とおんなじやうな器量の女をお前が女房にしたら、この世に又と見られないやうなみつともねえ餓鬼どもを生み出すことだらうかな。

チミイ (本氣に氣持をわるくして) ひどいことをいふ、お前はひどい顔をしてゐるが、お前の口はお前の顔よりまだひどいや。

マアチン (同じく氣持を悪くして) おらあこんな寒い思ひをさせられていくら醜い顔をしてゐるにしろ、お前のやうなびしよつたねえ顔をした男は、おらあまだ見たことがねえ、モリイがやつて来るに、そつちの古くさい小舎にはいつて顔でも洗つちやどうだ、そんなた



だれ眼をして、大きな鼻をつん出して、まるで路におつ立つてるぼろつ案山子のやうだ。

チミイ (不安さうに路の方を見る) おれがどんな顔つきをしてゐたつて、そんな事をあの女がかれこれ云ふにや當らない、おれは四部屋もある家を岡に建ててやつたんだからな。

(立上がる) だが不思議だよ、お前とメリイ・ダオルと二人のおかげで、この村ぢゆうの人はかりぢやない、ラスヴァアナの方の連中まで顔つきがどうかうのと、顔のことばかり考へたり言つたりするやうになつた。(仕事場の方に行く) お前に顔つきの話をされると不思議に氣になるよ、おれも、ちよつと部屋にはいつて、目のまはりのよこれでも洗つて來ようか。

(チミイ仕事場に入る。マアチン、着物の端でこつそり顔をこする。メリイ・ピルン、バケツを持って右手より登場、井戸に來てバケツを充たさうとする)

マアチン こんちは、メリイ・ピルン。

メリイ (氣にもかけず) こんちは。

マアチン うす暗い、いやな日で、難儀なこつたねえ。

メリイ そんなに薄つ暗い日でもないわ。

マアチン いやな天氣も、うすつ暗い朝も、けちくさい奴らも(肩こしに手眞似で指す)目が

あいてれば見なければなんないが、しかしなあ、目のあいてるおかけには、お前のやうな素的な、色のまつ白な、美しい娘を見ることも出来る……おらあお前を見るたんびに、聖人様と、お水と、天にゐる神様の力をありがたく思つてゐる。

メリイ わたしは教父さまの話にきいてるよ、だれだつて若い女を見てゐちや、お祈りは出來やしないとさあ。

(コップでバケツの中に水をしゃくひ込んでゐる)

マアチン それは誰だつておれみたいな思ひをしたことはあるまい、お前の聲をきいてゐながら、眼でお前を見ることが出來ないといふやうな思ひは。

メリイ お前みたいにするの腹ぐるの馬鹿ぢぢいが眼が見えないで彼處に坐つてゐて、娘や年増が路を通るのをひと目も見ることが出來なかつたのは、つらかつたらうよ。

マアチン それはつらかつたが、おれはお前が何かいふ聲を聞いたり、お前がグライナンまで行く足音を聞いたりするのが、どれほど楽しみで、嬉しいことだつたか(悲しみを含んだ激しさを以て語り始める) お前の聲はおらがやうなみじめな盲人の心にいろんな事を考へ出させた、だからお前の聲を聞いた日には、おれはなんにもほかの事を考へることが出來な



かつた。

モリイ そんな話をするんなら、お前のおかみさんに言つつけるよ……知つてるかい、おかみさんは後家のオフリンさんところで蕁麻取りをやつてるのよ、オフリンさんはお前たち二人があのおかみさんをかはいさうがつてしまつたんだよ。

マアチン (じりじりして) 誰でもいいから一人ぐらゐ、あの婆々や、グライナンのあの日の事をおれに思ひ出させないで、けふはどうした? とか何とか言つてくれないでよさうなもんだがなあ?

モリイ (意地わるに) お前が一生のうちの好い日だと言つたあの日の事を思ひ出させるのは結構なことだとわたしは思つたのさ。

マアチン 好い日だと? (仕事をうつちやつて、彼女の方に身を屈めながら、再び悲しそうに) それとも大悪日かもしれない、おれはあの日に目が醒めたんだ、ちやうど小さい子が婆さまの話をきいて、夜になつて夢で立派な金の家に住んだり斑點の馬に乗つたりしてから、ちつきに目がさめると、身體がさむくつて、薬屋根から雨が落ちてゐて、腹の空つた驢馬が

背戸で鳴いてるのを聞く時のやうな、眞實の事に目がさめたんだ。

モリイ (氣にかけないで仕事を續けながら) マアチン・ダオル、お前けふは面白い夢を見てるね、ゆんべ酒屋に行つたのかい?

マアチン (立上がり、彼女の方に来る、しかし井戸から——右手——離れた邊に立つ) 酒屋なんぞにいくもんか、その薄ぎたねえ小舎に寐てゐたんさ……煤けた藁の中に横になつてゐておれはお前の歩くのを見たり、乾いた路にお前の足音のひびくのを聞いたりすると思つた、夢の中で、お前が笑つたり、かわいた丸木の天井の大きな部屋で面白い話をしてゐると思つた、その時のお前の聲は好い聲だつた、おれは、盲らが寐てゐるやうに寐てゐる方が、ここに起きてゐてこの薄つ暗い天氣に鍛冶屋のチミイの小言をきいてるよりはよつほど増しだと思ふ。

モリイ (興味を以て彼を見る) お前はけちなつまらない爺さんだけど、言ふことは變つてるのねえ。

マアチン おれは人がいふほどの爺さんでもない。

モリイ 若い女とそんな話をするには、お前は爺さんだよ。



マアチン (がっかりして) お前のいふのも嘘ぢやあるまい、おれはこの世に生きてる長い年月を無駄にしましてしまった、年寄の女を相手にして、戀を思つたり、戀を談したりして、おれはそのあひだちゆう鍛冶屋のチミイの嘘でだまされてゐたんだ。

モリイ (少し誘ふやうに言ふ) 鍛冶屋のチミイに好い警打を考へついたものさ……今日お前はあの人の嘘ばなしに戀をしてゐるんぢやないねえ、マアチン・ダオル。

マアチン さうぢやないとも、モリイ、おれは一生懸命だ。(彼女の後方を過ぎて左手に来る) おれが聞いたには、イヴァレイクの塞の邊やコルクの領内では暖かい陽があたつて明るい空が見られるさうだ。(彼女の方に屈んで) 盲らだつた男のためにも、お前のやうな好い恰好の頸つきの、お前のやうな皮膚の女のためにも、明るい陽の光が何よりだ、今日これから二人で出かけよう、おれたちはそこから南の方の村々まで旅をして、市で話をして見たら唄をうたつたりして、面白い一生を送れるだらう。

モリイ (かなり面白く思つて、振り向いてマアチンを頭から足まで見てゐる) さあねえ、あんまりみつともないと言つて自分のおかみさんにさへ逃げられたお前が、わたしにそんな話をするのは、をかしいぢやないか？

マアチン (感情を傷つけられて、少し身を退さり腹立たしく言ふ) それは、をかしいかも知れない、世の中の事はをかしい事ばかりだから。(低い聲で、特に力を入れて) しかしお前に断つておくがな、もしあの女が俺のどこから逃げて行つたんだとしてもな、それはあの女に俺が見えたからぢやないんだ、おれがこの二つの眼であの女を見てゐて、あの女の起き出すところも、物を食ふところも、髪をゆふところも、床に寐つくところも、みんな俺が見てゐると思つたからなんだ。

モリイ (興味を持つて、うっかり言ふ) どの亭主だつて、さうだらうぢやないか？

マアチン (彼女の注意をひいてる機會をのがさず) おれが思ふには、ほんたうに見えるものはすくないんだ。前に盲らでゐたものででもなければ、ほんたうには見えないんだ。(興奮して) 年とつた女がだんだん枯れて墓場に近くなるのを見つける者もなければ、お前のやうな人を本當に見るものもないんだ、(彼女の方に屈んで) お前が、海の中の舟をひき寄せる燈臺の灯のやうに、ひかり輝いてゐるにしても。

モリイ (彼から身を離して) マアチン・ダオル、そばに寄らないでくれ。

マアチン (低い、物狂はしい熱情の聲で、口ばやにいふ) おれの言ふのは眞實だ(彼女の肩に手



をかけて、彼女の身を振り動かす。長いあひだ此世の悪い月日を見て来た男と夫婦になるのは止めてくれ、お前が朝起きて向うの細路の小さい戸口から出て来る姿も、あんな男にはほんとの眼で見るとは出来まい、ほんとに見えるものは、たとへ目がつぶれても、路を行く時には、お前の二つの眼が、自分の前にありありと見え、空を見れば、空にもお前の眼が輝いて、首を下げれば、目あきの人たちが世界ぢゆうのどここの道路にも見る堆糞カマドノクソの代りに、地べたにもお前の眼が見えるだらう。

モリイ (催眠術にかかったやうに聞いてゐたが、不意に身を退かして) 氣の違つた人のいふやうなことをお前は言つてるのね。

マアチン (彼女を追つて、彼女の右手に行く) お前のやうな人の側にゐれば氣が違ふのも、もつともだ。そのバケツをおいて、おれと一緒に行くつてくれ、おれは今日お前を見て、今までこの世界ぢゆうの誰もが見たことがないやうに、眞實にお前を見たんだ。(彼女の腕をとり、物やはらかに右方にひき寄せようとする) イヴァレイクの土地やコルクの領に行つて見よう、あすこいらの土地ではお前の兩足で一步踏んでも美しい花がたくさん踏みつけられて空氣に好い匂ひがするほどに花がたくさんあるさうだ。

モリイ (バケツをおいて、身を放さうともがく) 放しとくれ、マアチン！ 放しておくれと言つたら！

マアチン 常談にしないでくれ。さあ、あの樹の中の間路から行かう。

モリイ (仕事場の方に向き叫ぶ) チミイ——チミイ (チミイ仕事場から出て来る、マアチン彼女を放す、モリイ興奮し切つて、息を切らしながら、マアチンを指して) チミイ、眼が見えなくなる人は、正氣でなくなるものかねえ！

チミイ (疑はしきうに、しかし何の事か分らず) この男が正氣でないのは確かな事だよ、今まで眠らして貰つたり食はして貰つたり仕事の金まで貰つてゐた此處の家からけふは追ん出されるんさ。

モリイ (前の調子で) チミイ、この男はもつとそれよりも大馬鹿なのよ、この男を見ておくれ、口をあきさへすれば、わたしみたいな好い女がすぐ後を追つかけて行くものと思つてゐるんだから、偉い人だと思はないかい？

(マアチン・ダオル兩手を目にあて舞臺中央の方に身をちぢめて退く、モリイ・ダオル左手より靜かにやつて来る)



チミイ (呆れ返つて) ああ、盲らは悪い奴らだ、ほんたうに悪い奴らだ。だが、今日今からここを出て行つて、もうおれたちに世話をやかせて貰うまい。

(左方に向きマアチンの上着と杖を拾ひ上げる、上着のポケットから何か落ちる、チミイ、それを拾ひ上げる)

マアチン (向き直つて、メリイ・ダオルを見、苦痛を以て歎願するやうにメリイに囁く) メリイ、あの女と鍛冶屋の前でおれに恥をかかしてくれな、どうぞ恥をかかしてくれな、俺はお前に好いことを話してきかしてゐたんぢやないか、そして夢を……夜中……夢を見てゐただけなんだ。(言ひよどみ、空を見上げる) 雷が来るのか、それとも、世界の最後が来るのか? (メリイ・ダオルの方に、アリキのバケツに軽くぶつかりながら、よろけ行く) 天が暗黒に閉されて、空で大騒動があるらしい。(メリイ・ダオルの側に行き、彼女の左の腕を両手で握り——狂はしい聲でいふ) 雷で暗くなつて来たんだらうか! メリイ、お前の眼ではつきりとおれが見えるか?

メリイ (彼女の腕を振りはなし、空袋でマアチンの顔を打つ) わしにやお前がはつきり見えすぎるよ、そばへ寄らないでくれ。

メリイ (手を叩いて) さうだよ、メリイ。そんな男はさうするがいい、今そこでわたしの足許に立つてゐて、一緒に逃げて、わたしにもお前みたいになみつともない乞食婆さんになつてくれと、頼んだんだよ。

メリイ。(負けずに) メリイ・ピルン、お前の顔の皮がしなびる時分になれば、アイルランドのどこの隅を探してもお前ほどの皺くちゃや婆々は見つかるまいよ……ちやうど二人が好い一對さ、ほんたうに!

(マアチン・ダオル、舞臺後方、中央より右にうしろ向きに立つ)

チミイ (メリイ・ダオルの側まで来て) <sup>元</sup>メリイがお前みたいになるだらうなんて、恥を知らないか?

メリイ 肥つてぐにやついてる者の方が早くつかから皺がよるんさ、そして白つばい黄ろい髪の毛なんぞ豚小舎の裏の湿つばい地に枯れ残つてゐるちよぼちよぼの草みたいになつてしまふ。(立ち去らうとして右手に向いて) それよりか、四十年経つても五十年経つても變らないさつぱりした普通の顔の方がいいわ、わしの顔のやうなのの方が、一寸のあひだ馬鹿者どもを騒がせたつて、そのうちには子供たちも側によりつかないやうな化物になつてし



まふわ。

(メリイ・ゲオル退場する、マアチン・ゲオル再び前に出る、強ひてふんばつてゐるが、頼りなさ  
さうな様子をしてゐる)

チミイ ああ、モリイ、盲らの口に逢つちや、たまらないねえ。(マアチンの上着と杖を投げ  
出す) マアチン、ここにお前のぼろ荷物がある、お前の物はこれつ切だから、これを持つ  
て、さつさと出かけて世界の何處へでもうろついて行け、もう一遍おれに出會ふやうなこ  
とがあれば、お前が盲らだらうが目あきだらうが、おれは大きな槌を持出して一ト打ちぶ  
つたたいて最後審判の日までお前の目がさめないやうにしてやるから。

マアチン (一生懸命に元氣を出して) なんしに、おれにそんな事をいふんだ？

チミイ (モリイ・ピルンを指して) 何しにおれがそんな事を言ふか、分つてゐる筈だ。おれ  
が女房にしようと思つてる良家の娘に——お前みたいになうすぎたねえ馬鹿者が——とんで  
もねえ馬鹿話をきかして、心配させる因縁はない筈だが。

マアチン (聲を高くして) この娘はお前にからかつてるんさ、どこの目あきの娘がお前な  
んぞと夫婦になるもんかい？ モリイ、この男を見なさい、この男を見なさい、おれにだ

つてまだ此男は見える、大きな聲を出して言つてやれ、今が言ひ時だよ、この男に自分の  
仕事場に入つて、あそこへ坐つて、くしやみやつたり汗を出したりしながら、最後審判  
の日が来るまで鍋鉤をこさへてゐると、さう言つてやんなさい。(もう一度彼女の腕を抑へ  
る)

モリイ チミイこの男をわたしの側に寄せないでおくれよ！

チミイ (マアチンを押し退ける) おれになぐられようといふんか？ モリイはおれのところに  
置いて、お前に好いつり合ひの自分の女房の後についてけ。

マアチン (失望して) モリイ、何とも言はないんか、あいつの悪口に言ひ返してやらない  
んか？

モリイ (チミイの左手に立ち) わたしはね、お前の姿を見たりお前の聲をきいたりするのが  
死ぬほどいやだと、この人に言つてきかせてやるよ。さあさあ、お前のおかみさんの後を  
追つかけてい、又あの人に打たれたら、そこらの山をうろついている鑄掛屋の娘たちを追  
つかけるか、町のじだらく女の中にも行つてごらん、さうすれば、わたしみたいな几帳  
面に育つた行儀の良い娘に男がどんな口をきいていいものか、そのうちには覺えられるだ



ろ。(チミイの胸をとり) さあ、この人がどこかへ行つてしまふまで、仕事場にはいつてゐませう、この人は恐しい眼つきをしたらから、わたし怖いやうだわ。

(彼女仕事場に入る。チミイ敷居際に立止まる)

チミイ。ここいらで又とおれに見つかるまいぞ、マアチン・ダオル。(胸をまくし上げる) 鍛冶屋のチミイの腕つぶしの力は知つてるだらう、お前の頭のぼろい骨よりはもうちいつと固い物をぶつ挫いたのもたびたびの事なんだぞ。

(仕事場に入り、自分のあとの戸をしめる)

マアチン (しばらく片手を目にあてて立つ) これがこの世でおれの眼が見る最後のものかー  
ー女の悪い心と男の馬鹿力と。ええ神さま、なさない盲らをかはいさうと思つてくれ、もう今おれには彼奴等に仇をする力もないんだ。(しばらく手探りで探り廻り、やがて立止まる) おれはもう力もないが、まだ祈りをする力は残つてる、どうぞ神様けふ彼奴等をほろぼして下さい、わしの魂と一緒に滅びても構はない、もし来世で又あいつらを見る時、モリイ・ピルンと鍛冶屋のチミイが、二人とも高い床の上に載つけられて地獄の苦しみをしてみるのが見られたら、……そんなさまの二人を見ることが出来たら、好い氣持だらう、今

日も明日も、どの日もどの日も永久に、もがいたりわめいたり、もがいたりわめいたりしてゐるのが見られたら、その時にはおれも盲らちやあるまい、地獄もおれには地獄ぢやない、天国のやうだらう、ただ神様にはないしよの事にしておくばかりだ。(探りながら退場しようとする)

—幕—



## 第三幕

第一幕と同じ舞臺、ただ中央の石垣の破れ目が茨や何かの木の枝でふさがれてある。メリイ・ダオル再び盲目になり、左手より手さぐりで登場、第一幕の如く腰かける。すこしの闇を手にかけてある。

春のはじめごろのある日。

メリイ (悲しさに) ああ、どうしよう……どうしよう、せんの時には眼が見えないでも、これほど目先が眞暗ぢやなかつた、わしやもう死んじまはうか、一人で生活くらしを立てることはむづかしい、路通りもすくないし、風は寒しい。(闇を裂きはじめる) これからは、短かい日もわしのためには日が長からう、ひと目も見えず、一言も聞えず、なんにも思ふことがなくて、ただマアチン・ダオルの悪い心に一日も早く罰ばちがあたるやうにつて長いお祈りばかりやつてるのでは。これからはみんなが屹度いどわるくちの種こゝろにすることだらう、わしの側を通る時、指さして見たり、何處どこにあの男がゐるかつて訊いて見たりして、もう今日からは、

わしの顔に長い白髪が散らばる婆さんになる時分まで、わしや好い氣持にも落ちついた氣持にもなれないことだらう。(髪をいぢつてゐる、やがて何かの物音をきく糞子、暫時聴いてゐる) なんだか變な、のろくさい足音が路に聞えて来る……どうしよう、たしかに、あいつがやつて来る。

(彼女まつたく靜かにして動かすにゐる。マアチン・ダオル右手より、同じく盲目になり探り来る)

マアチン (陰氣に) メリイ・ダオルの奴め、おれを騙して、好い女だと思はせやがつた。あの聖人の奴め、おれの目をあけて、その嘘を見させてくれた。(メリイの側近く腰かける) 鍛冶屋のチミイの奴め、おれの身が續かないほど働かせやがつて、夜もひるも俺をすきつばらの吹き抜きの腹にしておきやがつた。いちばん憎らしいのはモリイ・ピルンのやつ——(メリイ・ダオル賛成らしく首でほつくりする) それと、この世界ぢゆうの女といふ女の隠してゐる悪い悪い魂だ。(マアチン片手で顔を被うて、身を揺り動かす) これから俺は寂しいだらう生きた人間はみんな悪い奴らにしろ、メリイ・ダオルのやうなきたねえ皺しわくちや婆々にしろ、一緒に坐つてゐる方が、だれも側にゐないよりは増した。もう俺はぢつき死ぬだらう、



寒い空気に一人ぼつちで腰かけてゐて、夜の來るのを聴いたり、鵜が互に鳴きあひながら  
 茨の中に飛ぶのをきいたり、さうかと思ふと、車が一臺東の方に遠くまで行くのが聞えて、  
 また別の車が西の方に遠く行くのが聞えて、犬もなくなだらうし、すこしの風が枯枝を動か  
 すのも聞えたりして。(きいてゐる、重い溜息をする) たつた一人でここに腰かけてゐたら死  
 んじまひさうだ、おれも眼が見えなくなつた上に、今度は氣違ひになるかも知れぬえ、誰  
 だつて恐しくなるだらう、たつた一人で腰かけてゐて自分の息の音を聞いたり——(小石  
 の上に片足を動かす) 自分の足の音を聴いたり、それにいろんな變な物がうごいてゐたり、小  
 さい枝が折れたり、草が動いたり——(メリイ・ダオル軽く溜息をする、マアチン恐怖して彼女の  
 方に向く) しまひにや、石の上に何だか息をしてゐる者があると、嘘でなく、お日様やお  
 月様を證人にしても言ひたくなる、(暫時彼女の方に聴いてゐる、それから不安らしく立上がり、  
 杖で探り廻る) もう出かけようかな、だが俺は自分の杖が何處をつつき廻してゐるか、ちつ  
 とも分らない、怖くつて怖くつて死んじまひさうだ。(探り廻るうち彼女の顔に觸れる、マアチ  
 ン叫ぶ) おれの傍に何だか冷たい生物らしい顔のものが腰かけてゐる。(マアチン逃げよう  
 として方向を轉じ、迷つて石垣に突きあたる) もう路が分らなくなつた! ああめぐみ深い神

さま、どうぞ今日わしの手引きをして下さい、わしは朝も夕もあなたにお祈りを上げます、  
 もう決して若い娘の行くあとにきき耳を立てたりいたしません、死ぬ日までなんにも悪い  
 事をしないでをりますから——

メリイ (腹を立てて) 神様に嘘をいひなさんな。

マアチン メリイ・ダオルか、さうか?(我に返つて、すっかり安心する) メリイ・ダオルかよ?

メリイ 長いあひだ聞かなかつた優しい聲を出すぢやないか。わしをメリイ・ピルンと取つ  
 違へてるんぢやないか?

マアチン (顔の汗を拭き拭き彼女の方に来る) やれやれ、眼が見えると、不思議に人間をと  
 まどひさせるなあ。俺が一生のうちに前を怖がるやうになるとは不思議だな、だが、ち  
 いつとの間吃驚したつて、もう直ぐ落ちついてしまふ。

メリイ そしたら又えばることだらう、きつと。

マアチン (少し離れて、きまり悪るさうに腰かける) そんな口をきいたつて、お前だつて俺と  
 おんなじに又盲らになつたといふことだがな。

メリイ わしが又盲らになつたにしろ、わしやちやあんと覺えてゐるよ、わしの亭主は世



界いちの馬鹿の顔をした背つびくの眞黒けの男だといふことを、それに、今日からもう一つ覺えたことは、氣の毒な女が自分ひとりで靜かに息をしてゐるのを聞いておつかながつて大騒ぎをやらしたこともなあ。

マアチン　それぢや、こなひだぢゆうお前が井戸や澄んだ池を覗いて見た時、風も動かす空が明るい時、お前がどんな物を見たか、それも大かた、覺えてゐるだらうな。

メリイ　そりや確かに、覺えてゐるとも、もしわしがそこらの嘘つき共の言つたやうな姿ではないにしろ、わしや心の中に嬉しい嬉しい氣持のするやうなものを池で見つけたよ。

(彼女もう一度自分の髪に片手を觸れる)

マアチン　(皮肉に笑ふ)　ふうん、そこうらの奴らは俺が正氣でなくなつたと言ひやがつたが、まだまだ俺もお前ほどにはなつてゐないな……かはいさうに、メリイ・ダオル、もしお前が二人とない美人ぢやなくとも、お前は東の州を歩き廻つてゐる女の中で二人とはない氣違ひ女だなあ。

メリイ　(馬鹿にして)　お前はいつでも嘘をきき分ける耳を持つてゐると自慢してゐたが、お氣の毒さまだな、今その耳を役に立ててゐるつもりなのか。

マアチン　もしお前が嘘を言つてゐるんでなけりや、お前は自分が六十か、それとも、五十くらゐに見える皺くちや婆々でないと俺にいふ積りか！

メリイ　マアチン、わしやそんな事をいつてるんぢやないよ、(熱心に前方にのり出して)わしや、そこいらの池で自分の顔を映して見た時、髪の毛がもうぢつきに白くかうす茶いろになるのに氣がついた、それに、自分の顔が柔かい白髪が垂れ下がるやうになると好い顔つきになることも氣がついた、わしや老女おぢやになれば、東の方の七つの州にも二人とないやうな老女おぢやになるだらうと思ふんだ。

マアチン　(本心から感心して)　お前は利口な考へつきをする女だなあメリイ・ダオル、ほんたうによ。

メリイ　(勝ち誇つて)　さうだともさ、美しい白髪の女は立派なものだとわしや思ふ、あのキテ・ポウンが村で酒を賣つてる時分、若い衆たちがいつまででもあの女の顔おぢやを見てゐて見あきなかつたと、噂にきいてゐるが。

マアチン　(帽子をとり、自分の頭に觸つて見て、躊躇しながらいふ)　お前氣がついたか、メリイ・ダオル、おれにもそんなやうな白髪が出て來さうか？



メリイ (ひどく輕蔑して) お前にか、やれやれ! ……もうぢつきお前は、溝にころがつて  
る古い蕪菁みたいなまる禿げの頭になるだらう。お前はもう決して自分の體裁の好い話は  
しなさんな、そんな話が出来たのは、それはもう昔のことさ。

マアチン そんなひどいことは言ふな、もしおれもお前のやうに、少しでも楽しみに出来  
ることがあれば、俺たちは昔とそれほど變らない面白い日も送れるだらうに、さうすりや、  
それは珍らしい好い話だらうぢやないか、おれはお前が白髪しろいの美しい女であるのに、おれ  
がみつともない恰好してゐると思つたら、とても好い氣持ちぢやゐられない。

メリイ わしにやお前の顔をどうにもならないよ、マアチン。ダオル。鼠ねずみみたいなお前の眼  
も、大きなお前の耳も、お前の脂ぎつた頤ほほも、わしが生みつけたものぢやないからねえ。  
マアチン (悲しさに頤を撫でてゐたが、やがて歡びに輝いた顔で) 一つお前の忘れたことが  
あるぞ、お前がどんな利口な考へつきをやる女でも。

メリイ お前の不恰好な脚のことか? それとも鈎かぎみたいに曲つたお前の頸か、それとも、  
始終ぶつけ合つて眞黒けになつてるお前の膝ひざつ子か?

マアチン (悦んで馬鹿にし切つて) それが利口な女の言ひぐさか、ほんたうに、利口な女の

言ひぐさだ!

メリイ (彼の聲の中の歡びを不思議さうにして) もしお前が嘘でなくつて言ふことがあるん  
なら、自分だけで話をしてるがいい。

マアチン (興奮して我慢し切れず言ひ出す) 話といふのは、これだよ、メリイ。ダオル。おれ  
はもうぢつき髭を生やさうと思ふ、うつくしい、長い、白い、絹絲絹糸みたいな長あい髭だ、  
東の國に二つとは見られないやうな髭だ……ああ、白い髭は老人おきなには立派たしななもんだね、髭  
のおかげで、いい身分の人たちも立ち止まつて銀貨や金貨を出してくれるだらう、髭とい  
ふものはお前には持てないんだから、もう黙つてるがいいぞ。

メリイ (嬉しさに笑ふ) ふうん、まつたく、わしらは立派たしなな一對ひとだね、まだこれから二  
人で面白い月日が送れるだらう、死ぬ時までは、ずゐぶん話も出来るねえ。

マアチン 神様のお助けで、今日から好い日が送れる、教父さまだつて頤ほほに立派な白い髭  
の生えた老人のいふ事なら嘘でも本氣まことにしてくれるだらうから。

メリイ 海うみの向うから春になるとやつて来る黄ろいチクチク鳴く鳥の聲こゑが聞える、もうお  
日様にも好い氣持の暖かみがあるし、空氣くわいもいい氣持になつて來た、此處こゝに靜しずかにらつく



り腰かけて、地べたから芽ばえて伸びてく物のにほひを嗅いでゐるのも、いいだらうねえ。  
 マアチン ついこの頃から山に芽を出しかけたフアズの匂ひがする、お前が口をきかずに  
 黙つて聞いてゐればグライナンの羊の聲もきこえるだらう、河の水量が増して谿に大きな  
 音をさせてゐるんで、羊の聲も消されてゐるが。

メリイ (聴く) ほんとに、羊が啼いてゐる、山の此方の面で牡鶏や鳩の牝鶏の騒いでるの  
 が一哩もこつちから聞える。(彼女びくりとする)  
 マアチン 西の方に聞える物音は何だ？

(鈴の音がすかにきこえる)

メリイ お寺の鐘ぢやないね、風は海の方から吹いてるから。

マアチン (狼狽して) 聖人の爺さんが、鈴を鳴らしてゐるんぢやないか。

メリイ 聖人さんはまつびらだ！(二人聴く) たしかに、この路をやつて来る。

マアチン (試みにいふ) 逃げようか？

メリイ どこへ逃げる？

マアチン 沼の中に細い路がある……接骨木が繁つてる向うの土手まで行きさへすれば、

誰にも見つけられる氣づかひはない、百人の衛士が通つたところで大丈夫だ、だが、ちい  
 つとのあひだ目あきになつてゐたおかげで、俺たちにはあの路が見つかからないかも知れな  
 3。

メリイ (立上がる) なあに、見つかるとも。お前が勘のいいのは世間でも知つてる、冬だ  
 らうが夏だらうが、雪が積つてゐようが、草や葉っぱがどんなに地に繁つてゐようが、お  
 前ならすぐに路が見つけられる。

マアチン (彼女の手をとる) ちいつと此方の方だ、ここいらで其路が始まつてゐる。(石  
 垣のくづれ目を二人して探る) 抜路のここへ木でも一本倒したのか、それとも何か變つた  
 ことがあつたかな、この前おれが此處を通つてからあとで。

メリイ 枝の下つ側を這つて通るがよかないか？

マアチン どうしていいか俺にもとんと分らねえ。眼の見えねえのは情ないこつたな、逃  
 げることも出来ず、目あきにされちや大變だし。

メリイ (泣き出しさうになつて) ほんとに情ないこつた、どうしよう、わしらが目あきにな  
 つたら、白髪になつたつて嬉しくもなんともない、毎日毎日白髪が抜けるのが見えるだら



うし、雨で汚れるのも見えるだらうし。(鈴の音近く聞こえる)

マアチン (失望して) もうそこいらまで来た、とても逃げられない。

メリイ お寺の西の隅のところに茨がちよつぱり生えてたが、あそこに隠れられまいか？

マアチン よし、隠れて見よう。(暫時きいてゐる) いそげ、森を歩いて来るみんなの足音が聞こえる。(探りながら寺内に入る)

メリイ 樹の中を若い娘たちが賑やかにしゃべつて来る。(二人で茨のしげみを見出す) マアチン、ここにわしの左側に茨がある、わしが先きに這入るよ、わしの方が體が大きくつて、すぐ見えつちまふから。

マアチン (心配さうに首を振り向けて) 大きな聲をするな、黙つてゐないか？

メリイ (半分ほど草むらに隠れて) さあわしの側においで。(二人しやがむ、まだ外からよく見える) マアチン、これで見えるだらうか？

マアチン 大丈夫だらう、だが俺にも分らない、わかい女たちは、恐しいほど眼が早いから、墓のなかに寝てゐる男でも、見つけ出すかも知れない、あんな奴ら鬼に喰はれちまへ。

メリイ わるいことを言ひなさんな、そんな事を言ふと、神様が指さししてわしらの所在を教へちまふかも知れないよ。

マアチン 馬鹿げた事を言ふなよ、聖人様が言つたぢやないか、悪い人間が盲らになるんだつて？

メリイ もしほんとにさうなら、何かとてつもない悪い事を言つて、あのお水でもとてもわしらの眼が癒らないやうにした方がよからう。

マアチン おれは恐しくつてびくびくしてるに、そんなとてつもない悪い事なんぞ言へるもんか、よしんば何か言へたところで、今日聖人さんの手から逃げようつていふには、善いことをいふのがいいか、悪いことをいふのがいいか、どうして分る？

メリイ みんなやつて来る。石の上にみんなの足音がする。

(聖人右手より登場、よそ行きを着物を着てゐるチミイとモリイ・ピルンを従へて来る、餘の人たちは前のとほりの姿)

チミイ 聖人様、人の話では、けふここいらの路にマアチン・ダオルとメリイ・ダオルがゐたといふことでございますが、どうか聖人様のお慈悲でもう一廻なほしてやつて下さいませ



まいか？

聖人 癒してやつても、よろしい、が、いつたい何處にゐる？ お前たち二人をその寺で夫婦いづれにしてやらねばならず、わしもだいぶん忙しいからな。

マツト (マアチン等の腰かけてゐたところで) この石の邊にあいつらの蘭が散らばつてゐる。きつと、この近所にあるに違ひない。

モリイ (驚いて指さす) チミイ、あれをごらん。

(一同向うを見てマアチン・ダオルを見つける)

チミイ この晝ひなか、あんな處に寐てゐやがつて、なまけものだなめ。(そつちの方になりながら行く) こうれ、そこから出るんだ。ねぼうのお蔭で、もうちいつとで、大變な幸運を取り逃がすところだつたぞ、マアチン……なあんだ、二人ともゐやがる！

マアチン (メリイ・ダオルと共にあわてて起き出す) なんだよチミイ、どうして俺たちを見逃しておけないんかなあ？

チミイ 聖人様がおれたち二人をめあはせて下さらうといふんで、此處まで來なすつたんだ。おれはお前たちの爲にも、どうぞ癒してやつて下さるやうお願ひ申しておいたぞ。お

前は馬鹿な男だが、一度眼が見えて、もう一遍盲らになつてまた乞食して口を過すのかと思ふと、おれは根が親切だから、かはいさうでしようがない。

(マアチン・ダオル、メリイ・ダオルの手を引き探りながら右手に行かうとする、帽子はどこかに落してしまつて、二人とも着物にごみや草の實をつけてゐる)

人々 そつちへ行くんぢやない、此方だよマアチン。

(人々マアチンを聖人の前に、殆ど舞臺中央に、押しやる。マアチン・ダオルとメリイ・ダオルしよげ切つて立つてゐる)

聖人 恐れずとよろしい、神はおなさけ深いから。

マアチン 聖人様、わしどもは怖がつちやゐませんよ。

聖人 神の四人の聖者の泉の水で癒された者が暫らく經つて又見えなくなることも屢々あることだ、しかしわしが二度癒してやつたものは、もう死ぬまで大丈夫見える。(器から破ひをとる) もうお水もちつとしか残つてをらぬ、しかし、神のお助けあれば、お前たち二人はこれで十分癒してやれる、さ、その路へ跪きなさい。

(マアチン、メリイ・ダオルと二人でくるりと向き直つて逃げようとする)



聖人　ここに跪けばよろしい、今度はもう寺に行かずと差支ない。

チミイ　（腹立ち聲で、マアチン・ダオルを引き向ける）頭がどうかしたのか、マアチン・ダオル？  
ここへ跪くんだ。聖人様の仰しやる事が聞えないんか？　今お前に言つてきかせなすつたがなあ？

聖人　さあ、跪きなさい、お前の立つてるところは地べたもかわいてゐるから。

マアチン　（困り切つて）聖人様、どうかわしどもをうつちやつてお置きなすつて下さい。  
わしどもがお呼び申したわけではねえんですから。

聖人　神はお前たちを盲目になされて、すでに大なる御教を垂れたまうたのであるから、わしはもう苦行をせいとも断食をせいともいはぬ。わしを恐れるには及ばぬ、目をあけてやるから、跪きなさい。

マアチン　（なほさら困つて）聖人様、わしらは目をあけて下さいとはお願いしやしません。どうかうつちやつて去つて下さい、断食でも、お祈りでも、何でもかでもあなたの勝手になすつて、わしらはこの儘、この四つ辻にうつちやつておいでなすつて下さい、この儘の方が結構なんで、目をあけてもらひたくはねえんですから。

聖人　（人々に向つて）頭がどうかしたので、目あきにして貰うて、生きて働き、この世界の不思議なことを見たいとも思はないのだらうか？

マアチン　わしや人ひとりの生涯には過ぎるほどいろいろな不思議なことも、ちよつとの間で、見てしまひました。

聖人　（いかめしい調子で）この世界の姿も、人間の上に現はれた神の御姿もをがむことを悦ばぬ者があらうとは、わしは今日まで知らなかつた。

マアチン　（聲を高くして）聖人様、この世の姿は見ものですねえ……わしが目をあいた時始めて見たものは、あなたの血の流れてゐる足で、石で傷だらけになつてゐましたつけ。あれは、大かた、神様のお姿の現はれた物なんでせう……それからわしがいちばん最後に見たのは、今あなたが鍛冶屋のチミイと夫婦にしてやらうとしてゐなざるその娘の眼の中に見えてゐた地獄のやうなおつかねえ心でした。きつと、それも好い見ものだつたんでせうよ。それから、まだ好い見ものは、路に北風が吹きまくつて、空がしぶい色をしてゐる時、馬も驢馬も犬までも、首を垂れて目をつぶつてゐましたつけ――

聖人　それではお前はまだ夏もうつくしい春も知らないのか、アイランドの聖人たちが



神のために御堂を築いた土地のことも知らないのか？ わしが思ふに、狂人でなくて、明を失ふことを願ふものがあらうか、きらめき光る莊嚴な海の姿を眺め、山にフアズの花が咲いて、やがて山々がみそらの下に金の魚籃のやうに光り輝くのを見たいと願はぬ者があらうか？

マアチン　そりやクノツクヤバラホールの話かね、そんならわしらの方がよつほどよく見える、今すこし前までわしらはここに腰かけてゐて、土手の小さい草つばの中にまで鳥が鳴いたり蜜蜂がうなつたりしてるのを聞いてゐた。「暖かい夜になれば、そこいら中たまらなく好い匂ひがして、空の中には羽の迅いものが飛び廻る音がきこえる、さうするとわしらは心の中で、見事な空をながめたり、湖を見たり、大きな河を見たり、耕やすに好ささうな山を見たりしますよ。

聖人　（人々に）こんな男に物をいふのは無駄なことだ。

モリイ　聖人様、この男は怠けもので働くのが嫌ひなんでござんせう、あなたが癒しておやりなされない前には、眼が見えるやうになりたいと始終そればかり言つて、願つたり祈つたりしてゐましたもの。

マアチン　（彼女の方に向いて）眼が見えればいいと俺はほんたうに願つてゐたのさ、だが

俺は、自分の女房の顔と、それからお前の顔つきだけで、見ることはもう澤山になつちやつた、お前が男にからかつてる時はをかしな悪い眼つきをするからなあ。

モリイ　聖人様、この男のいふ事をお氣になさらないで下さい、ついこなひだもわたしに悪い事を申しましたよ——それは女房持ちの男のいふことぢやないやうな悪い事で——こんな悪い心の男は、盲らのままでおいてやつて下さる方がよろしいんですよ。

チミイ　（聖人に）聖人様、メリイ・ダオルの方だけは癒してやつて下さいませんか、この女はまことに大人しいかはいさうな女で、誰にも悪い事をしたこともなし、ひどい事をいつたこともごさいません、ただ此男にいちめられた時か、村で若い女たちからかはれた時だけは別としまして。

聖人　（メリイ・ダオルに）メリイ、少しでも道理が分つたなら、わしの足許に跪きなさい、お前の目をあけてやるから。

マアチン　（前よりもなほ反抗して）聖人様、よして下さい。この女が眼が見えれば、死ぬ時まで始終わしを見てゐて、ひどいことばかりかましいやうになりますから。



聖人 (きびしく) この婦人が眼が見えるやうにと自分で望んでゐるのならば、お前ごとき者のために邪魔はされぬ。(メリイ・ダオルに) それ、跪きなさい。

メリイ (困ったやうに) 聖人様、どうぞこの儘でお置きなすつて下さい、かうやつてゐれば又ちつきに幸福な盲人といはれるやうになつて、食ふ心配をしないでも、路つばたで一文二文づつ貰つて、氣樂な時が送れませうから。

メリイ とんまな事をおいひでないメリイ・ダオル。さあそこへ跪いて、聖人様に目をあけて頂きなさい、マアチンには自分の勝手に乞食をさせて、一文でも二文でも貰はせとくがよいよ。

チミイ さうだともメリイ、もしお前たちが勝手な我儘を言つてぜひ盲らになつてゐたいといふのなら、もうこの土地ぢや誰もお前たちに手も出してやるまい、この世にどうかかうにかお前たちが生きていかれるやうに一杯の食物だつてくれる者はありやしまい。マツト もしお前が眼が見えればなあメリイ、お前あの男の手引きをして一緒に何處へでも行かれる、ほころびも縫つてやられるし、よるひる氣をつけてゐて、よそのどこの女もあの男の側に來ないやうにも出来るだらう。

メリイ (やや説得されて) それは、ほんとに、さうかも知れない——

聖人 さあ、そこへ跪くのだ、わしはまだ婚禮もやつてやり、その上に日ぐれ前に自分の目さす土地まで行かなければならぬから、急いでゐるのだ。

人々 メリイ、跪けよ！ 聖人様のおつしやる通り跪けよ！

メリイ (心配さうにマアチンの方を見ながら) あの人たちの言ふことは道理かも知れないから、聖人様、あなたの言ひなされるとほりに、やりませう。

(彼女跪く。聖人帽子をとり近くにゐる者に預ける。残らずの人たち帽子を取る。聖人一歩進んでメリイ・ダオルの手を持つてゐるマアチン・ダオルの手を離さうとする)

聖人 (マアチンに) どきなさい、お前は此處に用はないから。

マアチン (聖人をあらつぽく退けて、左の手をメリイ・ダオルの肩にかけて立つ) 聖人さん、どいて下さい、女房が盲らでわしや安心してゐるんだに、その安心のぶちこはしをやらないで下さい……あなたみたいなのが何しに夫婦の仲にはいつて來なさんだ——夫婦の話はあなたには分ることぢやないんだから——そのお水と、長いお祈りとで、大騒ぎをやらかしてさ？ さあ、さつさとそつちへ行つて、わしらはこの路つばたへうつちやつて置



して下さい。

聖人　もしお前が目あきの男であつて、さういふことをわしに言うたら、わしはお前の魂を地獄に墜とすやうな呪ひもかけるであらうが、お前は、かはいさうに、氣の毒な盲目の罪人であるから、わしは氣にもかけぬ。(水の器を持上げて) お前の女房のために祈つてやるあひだ、わきに退いてゐなさい、もしいやだと言うても、此處に見てゐる人たちがさうさせるだらうから。

マアチン　(メリイ・ダオルをひつばつて) さあ此方へ来い、あの人なんぞに構ふなよ。

聖人　(人々に向つて、命令的に) その男を押へて遠くへ追ひ拂つてしまへ。

(二三人マアチン・ダオルを捕へる)

マアチン　(振り放さうとして叫ぶ) 聖人様、こいつらに放すやうに言つて下さい! どうぞ放さして下さい、此女を癒さうとどうしようと、あなたの勝手にして構ひませんから。

聖人　(人々に) 放してやれ……やうやく分つて來たらしいから、放してやれ。

マアチン　(人々の手から身を振りはなして、メリイ・ダオルの方に探り寄り、巧者な鼻聲になつて) 聖人様、どうぞ癒してやつて下さい、わしや決して邪魔をしません——こいつも目があ

たら、あなたの顔を見て屹度うれしがることでせう——だが、どうぞわしも一緒に癒して下さい、でないと、こいつが嘘を言つてきかしてるかどうかわしに分りませんから、さうしてわしや夜もひるもおおりの聖人さん方を見てゐたいと思ひますから。

(メリイ・ダオルより少し前方に出て跪く)

聖人　(半分は人々の方にも聞えるやうに) 長いあひだ眼が見えずに居つて、自分の頭の中で奇妙な事ばかり考へ續けてゐた者は、毎日働いたり祈つたりして暮してをる我々の如き普通の人間とは違つてゐる、もしこの男が最後の時に至つて正しい心に立ち返つたものならば、今日わしども一同にこの男が言つた頑くなな愚かしい言葉は忘れてしまつて、神の御心のままに、わしはこの男も癒してやりませう。

マアチン　(熱心に聽いてゐる) 聖人様、待つてゐますよ。

聖人　(水の器を持つて、マアチン・ダオルの傍に立つて言ふ) 神の四人の聖者の墓より湧いた

この水の力を以て、お前の目にそそぐこの水の力を以て——(聖人水の器を持上げる)

マアチン　(不意に聖人の手から器を叩きおとす、器は舞臺の遠くまでころがる、マアチン立ち上がる、人々大聲につぶやき始める) わしや情ない盲らの罪人かも知れぬが、耳は早耳だ、そ



の入物の中にぼつちりしか水が入つてゐないのもわしにやよく分つてる、さあ聖人さんさつさと出かけなさい、あなたはえらい聖人様だらうが、盲人だつてあなたの思つてるよりはもうちつと利口で、そらほどの弱蟲でもねえんですよ、あなたの弱り切つた足や皺くちゃの膝をひきすつて出かけなざるがいい、斷食やおありがたい生活くらしのおかげであなたは頭ばかり大きくなつて腕は細つこくみぢめなもんだ。(聖人きびしい眼つきで暫時彼を見てゐたが、やがて振り返つて、落ちてゐる水の器を拾ひ上げる。それからメリイ・ダオルを引き起す)「鍛冶屋のチミイのやうに働いたり汗をかいたりで過すのも人の一生だし、あなたのやうに斷食をやつたり祈つたりお説教をやりながら過すのも一生なりや、わしらのやうに盲らの乞食で、微風が春の小さい葉つばを吹き返す音を聞きながらお日様に當つてゐるのも一生だ。わしらは曇つた日を見たり、聖人さんたちを見たり、この世をまごつき歩いてる汚れた足を見たりして胸くそを悪くしないでいいわけだ。

(メリイ・ダオルを連れて前に腰かけてゐた石の方に探り行く)

マツト ああ男のやうなものを、このグライナンの村に、わしどもの近所にゐさせるなあ危つかしい恐しいことだ。聖人様、ああ男のおかげで、わしどもの上にも天から悪い事

が降つて來やしますまいか？

聖人 (帯を固く締めて) 神は慈悲ふかくいらせられる、しかし罪ある者は厳しくお罰なさるであらう。

人々 さつさと行つちまへ、マアチン・ダオル、ここの土地から出ていつちまへ。お前のために神様のお手から大暴風や早魃が來ちや大變だから。

(ある人たちは何か投げつける)

マアチン (反抗するやうに向き直つて石を拾ひ上げる)ぎやんぎやん騒がすと、退いてゐやがれ、この石があたれば頭をぶち割られる奴が大勢できるぞ。そうら退いてゐろ、餘計な事を怖がるには當らねえ、おれたち二人はこれから南の土地へ行く、あつちの人たちは優しい聲の人たちだ、どんなみつともねえ顔をしてゐたつて、悪い心を持つてゐたつて、俺たちにやまるで分らねえから大丈夫だ。(再びメリイ・ダオルの手を取る) さあ行かう、南の方へ出かけよう、おれたちはこの土地の人間をあんまり見あきちやつた、こんな奴らの側にゐて、朝うすつ暗い明方から夜になるまで嘘ばかりしやべつてるのを聞いてゐたところで面白くもあるまい。



メリイ (力なく) ほんとに、さうだねえ、ちや、路は遠いだらうけど、行つて見よう。人の話ちや、あつちの土地へ行く路は、此方の方にも沼があるし、あつちの方にも沼があるし、うしろからは北風が吹きつける石ころ路を行くんだつてねえ。

(二人退場する)

チミイ 南の方へいく路には、石の上を徒渉してゆくやうな深い河もたくさんあるから、きつと、二人はちきに溺れ死んでしまふことだらう。

聖人 あれらはあれらで自分の運命を選んだのだ。神はあれらの靈魂の上に慈悲あらせたまへ。(鈴を鳴らす) さあお前たちモリイ・ピルンと鍛冶屋のチミイの二人は寺に行くのだ、あそこで二人をめあはせて、お前がた一同の上にも祝福を與へてやらうから。

(聖人寺の方に向く、彼等みんな行列をつくる、みんなが徐かに寺内に進み入る時幕が下りる)

西の人氣男 (三幕)



人

クリストファ・マホン

老マホン　クリストファの父、もぐり地主

マイケル・ジエームス・フラハルテ　酒店の主人

マアガレット・フラハルテ　(俗稱ヘギイン・マイク)マイケルの娘

シヨオン・ケオ　若き百姓、ヘギインの従兄

後家クイン　三十ぐらゐの女

ファイリイ・カレン

ジミイ・ファレル

小百姓

セイラ・タンセイ

スウザン・ブレイデイ

オリーナ・ブレイク

村の娘たち



口上いひ  
小作人

荒涼たるメヨの海岸の一農村の附近を舞臺とする。  
序幕は秋のある晩、第二幕及び第三幕はその翌日の出来ごと。

## 第一幕

田舎のもぐり居酒屋、粗野にしてうすぎたない店。右に棚のある帳場らしい所あり、その上に澤山の徳利や瓶が頭だけ出してゐる、帳場に近く空樽がいくつがある。後方、帳場より少し左手に、外に出る戸口あり、それより少し左に寄つて長椅子あり、その上に棚あり、其處にも徳利が並んでゐる。その側の窓の下にテーブルがある。舞臺の左手に大きな爐あり、泥炭が燃えてゐる、その側に奥の部屋へ行く小さい戸口がある。

二十歳ぐらゐの野育ちらしいが美しい娘ベギインがテーブルの上で何か書いてゐる。普通の農家の娘の服装してゐる。

ベギイン (書きながらゆつくりと) 黄いろい上着を作る切地六ヤード。あみ上げの靴一足、踵高く、あなは眞鍮の金具、婚禮の席に相當の帽子一個。上等の齒みがき楊子。右の品品及び酒三樽、ジエームス・ブラハルテ宛に、ジミイ・ファレルの籃車にて、今度の市の晩までにお届け下されたく、右御願ひ申上候。マアガレット・フラハルテ。

(丁度自分の名前を書き終る時、肥つた色白の若者、シヨオン・ケオがはいつて来る。若者は娘ひとりを見て、落ちつかない様子で室内を見廻す)



シヨオン 何處へ行つたい？

一九〇

ペギイン (見かへりもしないで) 今ちき歸つて来るよ。(手紙の上書きを書く) カツスルバア  
酒商シイマス・マルロイ様。

シヨオン (不安らしく) 途中ぢや見えなかつたつけ。

ペギイン 見えるわけではないよ。(切手を紙めて手紙にはりつける) こんな真暗な晩だもの、  
それに日がくれて三十分も立つぢやないか？

シヨオン (再び戸の方に向つて) おいらあ這入つてお前に會つてつて悪かあないか、寄ら  
ずに行かうかと思つて、ちよつと外で立つて考へてゐたんさ。(火の側に来る) さうすると、  
夜がしんとして、牛の奴らが大きな息をしたり溜息をついたりしてゐるんが、よく聞  
えて、橋からこの家の門まで人つ子ひとり通らねえ。

ペギイン (手紙を封じて) 四つ辻の向うまで行つてるのさ、其處でフィリイ・カレンだの、  
ほかにもう二人と一緒になつてケイト・カシデイさんのお通夜に行くつもりなんだよ。

シヨオン (びつくりして娘を見る) こんな真つ暗やみにそんな遠くまで行くんか？

ペギイン (じれつたさうに) さうさ、さうしてあたしはこんな山の下にたつた一人でおい

てきぼりさ。(立ち上つて手紙を流しの上のせて、それから時計を巻く) ねえ、シヨオン・ケオ、  
夜の長い今時分、あたしみたいな若い女を夜の明けるまで一人ぼつちで置いとくのは、あ  
んまりだと思はない？

シヨオン (きまりが悪さうに) でも、もうちき二人が婚禮すりや、お前もそんな愚痴をい  
はねえで済む。おいらあ、お通夜だらうが婚禮だらうが、こんな真つ暗やみに外へ出るな  
あ嫌えだ。

ペギイン (少し馬鹿にするやうに、元氣よく) お前、あたしがお前と夫婦になるものと一人  
で極めてるんだね。

シヨオン ちやあんと固い約束をしたんぢやねえか？ レイリイ神父様が主教様たちだか  
羅馬法王様だかのお許しを貰つて下さるのを待つてるばかりぢやねえか？

ペギイン (流しで手を洗ひながら調弄ふ積りで男を見る) お前、法王様がお前みたいなの事  
を心配して下さると思つてるのかい？ あたしが法王様なら、こんな村のことなんぞ構ひ  
はしないよ、あの藪脱のレッドリナハンだの、びつこのバツチインだの、カリホルニヤか  
ら追ひ歸されて氣が觸れた氣違ひのムラニイの一家だの、御所にいらつしやる法王様に心



配して貰ふのにや、今ぢやろくでなしの連中ばかりしかゐないぢやないか。

シヨオン (人聞きが悪いといふ風に) よしんば俺たちはろくでなしの連中にしろ、ほかの土地にだつてろくな人間ばかりゐるわけでもあるめえ、今時の俺たちがわるけりや、今までだつてわるかつたんだ。

ペギイン (見かけた調子で) へん、さうかい？ あの巡査の眼をめつかちにしたダニイン。サリバンだとか、死んだマアカス・クインのやうに、上手にアイルランドのむかし話をして婆さま達を泣かせて置いて、そのくせ羊を使へないやうな不具にして六箇月も牢に這入つたりさ。ああいふ連中がよその土地にもゐるといふのかねえ。

シヨオン ゐなきや、とんだ仕合せだ。(言葉に妙な力を入れて) レイリイ神父様はそんな奴等がほうつき歩いて若い女と無駄口たたいてゐるのをすてとくやうな間抜けぢやないや。

ペギイン (洗面器の水を外にぼちやりと捨てながら、じれつたさうに) レイリイ神父様レイリイ神父様もいい加減におし、(男の聲を真似て) この暗い今夜一晩どんなあんばいにしたら怖くなく過ごせるだらうと聞いてるだけのはなしだよ。(外を見る)

シヨオン (顔いろを見ながら) クインの後家でも連れて来ようか？

ペギイン あの人の殺してみたいな女かい？ まつびら御免だ。

シヨオン (彼女に近寄つて機嫌を取りながら) そんなに怖がつてると知つたら、父さんだつて家にゐてくれるよ、外は闇で、夜は長いし、それにおいら彼處のファズの茂つた土手に變な奴がゐるやうに思つた、まるで狂犬みてえに唸つてるんだ。お前が怖がるだけのことはあるよ。

ペギイン (鋭く男の方に向いて) なんだい？ お前が見たのは人間なの？

シヨオン (しざりながら) なんだか俺にやまるきり見えなかつたが、なんでも、唸りぬいて、さも苦しさうなんだ。聲のあんばいぢや若い男らしかつた。

ペギイン (男の方に進んで) それでお前、その人が怪我でもしたのか、何處か病氣なのか側へ行つて聞いても見なかつたの？

シヨオン ううん、おらあ聞かなかつた。あんな眞つ暗やみの寂しい所であんな聲を聞いてちやゐられないや。

ペギイン ほんとにお前は強いね。もしか、その男の死骸があしたの朝の露の中につつばつてるところを見付かつたら、巡査や裁判所の連中にお前なんていふ積りだい？



シヨオン (肝をつぶして) おいらそんな事まで考へてゐなかつた。なあ後生だから、ペギイン・マイク、おいらがこんな話をしたつていいはないで呉れ、父さんや今あつちからやつて来るほかの連中にも、聞かせちやいけねえ、こんな話を聞かせて見な、今夜のお通夜でしやべり散らしちまうだろ。

ペギイン あたしが聞かせるか聞かせないか、そりや分らないよ。

シヨオン ほら、もう其處まで来た。おい、云つちやいけねえ、いいかい？

ペギイン 自分でいいはないが。

(帳場の後に行く。肥った威勢のいい酒屋の主人マイケル・ジエムスが入り来る、後から瘠せて疑ひ深さうなファイリイ・カレント、肥った、女ずきらしい四十五六のジミイ・フアレルとが續いて入り来る)

男たち こんばんは。

ペギイン こんばんは。

マイケル (帳場の方に行かうとする男たちに) さあ腰をかけて、休んで行くがいいぜ。(火の側のシヨオンの方に行く) シヨオン・ケオ、どうしたい？ お前も今夜は濱を越してケート、

カシデイのお通夜に行くんか？

シヨオン おらあ行かねえ。これから近路して家へ歸つて寐るだ。

ペギイン (帳場から口を出す) シヨオンさんの方が感心だよ。お父さん、お前もあたしを店に一人ぼつちで置いといて、自分は他家で夜明かして、よくないとは思はないかい？

マイケル (機嫌よく) ちよつくら家をあげたつて、一晚あげたつて、おんなじだあな。一杯やつてから「死人の原」の中を抜けて歸つて来いつていふなあ、ひどい娘だなあ。

ペギイン あたしがひどい娘なら、お前もひどいお父さんだよ、この暗やみの一晚中ひとり留守番をさせといて、あたしが一人で爐の火をつきつき犬がほえたり牛が唸つたりするの聞きながら、怖がつて齒をがたがたさせてゐても構はないといふのは。

ジミイ (機嫌を取るやうに) なんにもお前怖がることはねえさ、お前のやうな立派な頑丈な身體の娘ぢやあ、男の二人ぐらゐ一息になぐり倒すだらうが？

ペギイン (次第に興奮して) 酒で舌のただれた作男の若い衆たちもゐるぢやないか、東の谷には鑄掛屋の連中が十人も野宿してゐるし、あのろくでなしの兵隊たちが千人も國中をうろついでるぢやないか。あたしをひどい目にあはせるやうな奴等は澤山ゐるわ、お父さ



んは自分の勝手にするがいいけど、あたしも一人で家に残つてゐないやだよ。

マイケル　そんなに怖けりや、シヨオン・ケオに泊つて貰ひな。これからはあれがお前の面倒を見るのが、神さまの思召しだ。

(一同シヨオンの方を見る)

シヨオン　(ひどく當惑してまごついて) そりやをぢさん、おいらだつて悦んで泊つてもいいんだが、レイリイ神父様が怖いや。おいらがさういふ行状をやつたら羅馬の法王様だの主教様たちがなんていはつしやるだらう？

マイケル　(馬鹿にするやうに) 意氣地なしだなあ！ お前は此處に灯をつけて爐にあたつてゐて、彼女は向うの部屋で寐りやいいぢやないか？ どうか頼む、なんでもそこらに變な奴がゐて、氣がふれてゐるか、死にかかつてゐるか、土手のくぼみに寐てゐやがるさうだから、今夜は誰かに此處へ泊つて貰つた方がこの娘も無事といふものだ。

シヨオン　(ぐちつぽく) おらあレイリイ神父様が怖いといつてゐるんだ。悪いことをすめなさんな、もうぢつき夫婦にならうといふとこだ。

フィリイ　(馬鹿にし切つた調子で) あの西つ側の部屋へ押込めて鍵をかけちまへ。さうす

りや、いやでも泊るだろ、神父さんにもそれで言譯が立つさ。

マイケル　(シヨオンと入口との間に身を置いて、シヨオンにいふ) そら、さうしなよ。

シヨオン　(ありきりの聲を出して) をぢさん、歸してくんな、後生だ、出してくれ。出してくんなよう。(マイケルの側を通り抜けようとする) ほんとに出してくんな、神さまのお恵みでお前も後生がよくなるぜ。

マイケル　(大聲で) こうれ、騒がねえで、まあ火にあたつてゐな。

(彼を押戻して大笑ひしながら帳場の方に行く)

シヨオン　(兩手を握り合せて煩悶しながら) ああ、レイリイ神父様、聖人様方、おらあ今日何處へ隠れたらいいだろ？ なむ、聖ヨセフ様、聖パトリック様、聖ブリヂッド様、聖ヤコブ様、どうぞ助けて下さい！

(振り返ると、入口に誰もゐないので、駈けて出ようとする)

マイケル　(上着のしりを捕へて) これさ、お前、歸るんか？

シヨオン　(叫び聲で) 放してくんな、放してくんなつたら。此罰あたりめ、放してくんなけりや、神父様たちや羅馬の御所の赤い衣の主教様方の罰をあたらせてやるぞ。いいか。



(不意に上着の中から身體だけすつぽぬけて外へ駈け出す、上着はマイケルの手に残る)

マイケル (向き直つて上着を高く持上げて) へん、かた藏さまの上着で御座あい。こんな寂しい西の田舎にも後光がさすほど堅い男が今日現はれた。ペギン、神様のおかげで俺があんな真面目な亭主を探しあててやつたから、若けえ娘つ子が何人揃つて来てお前んとこの畑で草取りをやつたつて焼く心配はないぜ。

ペギン (自分の所有物の辯護を始める) 何もあの人が神父様のいふことを聞くからつて、お父さんがそれをからかふにはあたらないわ? もとはといへば、お前がぼつちりばかりのお給金を惜しがつて、あたしの手助けになる店の小僧を置いてくれないのが悪いんぢやないか?

(上着を父の手からひつたくる、それを持って帳場に行く)

マイケル (呆れて) 何處で小僧を雇ふんだい? 口上いひに頼んでカツスルバアの街を、小僧はゐないかあつて、怒鳴らせるんか?

シヨオン (ほそ目に戸をあけて首だけ入れて極く小さい聲で) マイケル・ジエームス!

マイケル (シヨオンの眞似をして小さい聲で) なに御用だい?

シヨオン あの變てこな死にかかつた奴がな、土手の向うから見えてゐるよ。お前んとこの鶏を盗みに来るんぢやねえか。(自分の肩から後を透して見る) ああ大變、おいらの後をついて来た、(室内に逃げ込む) もしあいつが俺の今云つたことを聞いたんなら、きつと俺を生かしちや置くめえ、おら斯んなまつ暗やみにあんなさびしい路を一人で歸るんだもの。

(暫時一同は好奇心を以て入口を見てゐる。外で誰か咳をする。それから、癪せぎすな若者グィステ・マホン入り来る、草臥れ切つてゐて、びくびくしてゐる、そしてひどくよこれてゐる)

クリステ (小さい聲で) みなさん今晚は。

一同 今晚は。

クリステ (帳場に歩み寄る) ねえさん、ビールを一杯おくんな。(錢を置く)

ペギン (ビールを渡して) にいさん、お前はあの向うの谷に野宿してゐる鑄掛屋さんのお仲間かい?

クリステ さうぢやねえ。わしや遠くから歩いて来たもので、くたびれ切つてるんだ。

マイケル (撫はるやうな調子で) そいぢや、火の側へ来てあたんなさい。お前寒くつて腹がへつてるやうぢやねえか。



クリステ　ありがと！　（コップを持って少し左の方に歩み行く、ふいと立ち止まって見廻す）親方、時々此處いらへ巡查が来るかい？

マイケル　我家の繁昌の時分にはな「この構内に於て飲用するビール及酒精類の販賣を免許す」と入口に白く書いてあつたものだ。此四哩四方、店らしい店はほかにねえんだから、誰も彼もみんな本式に三哩旅行して飲みに来る奴らばかりさ。さうでないなあ後家が一人ゐるだけだ。何も巡查がこの家に目をつけるわけはねえさ？

クリステ　（安心して）　ぢやあ、大丈夫だね。

（火の側に行く、ため息をしたり、うめいたりする。それから側にコップを置いて腰掛ける。燕をかぢり始める、疲れて弱り切つてゐるので、ほかの一同が自分を珍らしさうに見てゐるのも気がつかない）

マイケル　（若者の方に行く）　なにかえ、お前が巡查を怖がつてるのか？　お前警察から追跡られてるんか？

クリステ　追跡られてる奴はいくらもあるよ。

マイケル　こんな不作だつたり、戦争がなくなつたりしちや、さういふ奴も澤山あるだら

う。（火の側にあつた靴足袋などを取つてそつと片づける）　なにかえ、竊盗かい？

クリステ　（陰気な聲で）　もうちつと違つた大い名だとわしや思ふんだが。

ベギイン　まあ變な人だ。お前自分でした事の名が分らないなんて、學校へはいらなかつたんかい？

クリステ　（きまり悪るさうに）　わしや物覚えの遅い方で、級でも下の方にゐたんだ。

マイケル　お前がいかに分らずやでもな、竊盜といふなあ、人の物をふんどくつたり盗んだりすることだらゐは知つてる筈だ。さういふことで警察から追跡られてるんか？

クリステ　（自分の家柄自慢で）　わしやこれでもちやあんとした百姓の息子だ、我家のおやぢは（急に氣がとがめるといふ様子で）　神さま、おやぢの後生を、おやすめ下さい、懐から金を出してお前さんとこの此家ぐるみすつかり買つたつて、懐を病めたとも思はないぐらゐの身上だつた。

マイケル　（感心して）　盗みでねえとすると、何かでけえことかな？

クリステ　（得意になつて）　うん、でけえことなんで。

ジミイ　性質の悪るさうな若い衆だ。さびしい夜みちで若い女でも追つかけたんか？



クリステ (汚らばしいといったやうに) ええ、とんでもねえ、わしや全く堅い人間だ。

フィリイ (ジミイの方を向いて) ジミイ、お前も察しが悪いな。今も此の人がお父さんは百姓だといつてゐたらう。それが今こんな情ねえ様子をしてゐるなあ、なんだらう、畑を取り上げられちやつたんだらう、それで一人前の人間が誰でもやりさうなことを此男もやつたんだらう。

マイケル (不審さうに) そいつあ執達吏でもあつたかい？

クリステ なあんの、さうぢやねえ。

マイケル 差配人かい？

クリステ なあんの、さうぢやねえ。

マイケル 地主様かな？

クリステ (じれつたさうに) さうぢやねえつたら。さういふ話ならマンスタアの田舎のちつぽけな新聞にだつて始終出てゐることだ。わしのやつた事はな、どんな人だつて、身分があらうが百姓だらうが、裁判官だつて陪審官だつて、まだやつたことのねえ真似だ。

(一同よろこばしい好奇心を以てクリステの側に近寄つて聞く)

フィリイ ふうん、珍妙な若い衆だなあ。

ジミイ 此奴にはダン・デビイの曲藝だつて負けつちまふだらう。人間の悪いことをお説教に作る宣教師さんだつて敵ふまい。フィリイ、なんだかもう一遍聞いて見な。

フィリイ お前なにか、白銀はんだで金貨でも打つたんか、それとも五十錢銀貨でも拵こしらへたんか？

クリステ わしや十錢銀貨だつて、一錢銅貨だつて、そんなことはしねえ。

ジミイ そんならお前女房の三人も持つたんか？ おらが聞いたにや、北の方ぢや、新教の信者の中には、そんな手合ひがちらほらあるといふことだ。

クリステ (恥かしさうに) わしや、一三人どころか、まだ一人の女房も持つたことはねえ。

フィリイ それぢや何か、向うの土地のあの男みてえにポーア人の助太刀にでも行つて、絞殺されて四つ裂きにされて引き廻されるところだつたんぢやねえか？ お前、東の國の方へ出かけて、クルーゲルやポーア人の獨立の血まびれ騒ぎでもやつて來たんか。

クリステ わしやあ、先週の火曜日に、生れて始めて自分の村を出たんだ。

ペギイン (轎場から出て來る) そんなら、此人は何もしたんぢやないんだよ。(クリステに)

お前、人殺しもしないし、なんにも悪いことをしないし、にせ金も造らないし、どろぼう



も血まびれ騒ぎもしないし、何もしないんなら、何もそんなに逃げて歩くにやあたらないわ。お前なんにもした覚えはないんぢやないか。

クリステ (自尊心を傷けられて) 親もねえ旅の者にそんなことをいふなあ不親切だろ、あとには牢屋があるし、前には死刑があるし、地獄は口をあいてわしを吞まうとしてるに。

ペギイン (他の連中に黙つてゐると合圖して) そりやお前、話だけだろ。何もしたんぢやあるまい。お前のやうな大人しい若い衆ぢやキイキイ泣いてる豚の喉笛を裂くことも出来ないだらう。

クリステ (見くびられたのを怒つて) そんなことがあるもんか。

ペギイン (わざと怒つた風を見せて) そんなことはないつ? これ、箒の尻でお前の頭をぶたれても、いいかい。

クリステ (驚きの叫び聲を以て彼女に纏ひつく) 打ちなさんな。先の火曜日に、わしやおやちを殺しちやつた。やつぱしわしを打つたからだ。

ペギイン (びつくりして) お父さんを殺したのかい?

クリステ (ぐつたりと腰をおろして) ほんとに殺した。尊とい聖母様、おやちの魂をお助け

下さい。

フリリイ (ジミイと兩人あとすさりする) どえらい男だなあ。

ジミイ すてきだなあ!

マイケル (大に尊敬して) そりや、あにさん、確かに絞罪だね、そんな事をやつつけるにやあ相當なわけがあつたんだろ。

クリステ (もつともらしい調子で) おやちはひでえ人間だつた、年を取つて、ごうつくばりで、もう我慢がし切れなくなつたんだ。

ペギイン 鐵砲で打ち殺したのかい?

クリステ (首を振る) なんにも道具は使はなかつた。鑑札を持つてないからね。わしや法律をもぐるやうなことはしねえ。

マイケル それぢや、柄の着いたナイフでやつたか? なんでも世間ぢや恐ろしいナイフでやるといふ話だ。

クリステ (あきれて、大きい聲で) わしを牛殺したとでも思つてゐなさんか?

ペギイン お前、お父さんの首を締めたんぢやあるまいね、ジミイ・ファレルが警察に届



けてなかつた犬を締め殺したやうなあんばいに。その犬といつたら、三時間も紐の端にぶらさがつてキイキイいつたりもがいたりしてゐるんだもの、それをジミイはもう死んでるといふし、巡査はまだ生きてるといふんだよ。

クリステ　わしやそんな真似はしない。いきなり鋤をふり上げておやちの頭の脳天へ打ち込んだ、するとおやちはからつぽの袋のやうに俺の足んとこへぐなりと倒れて、それつきり、うんともすんともいはなかつた。

マイケル　（娘にクリステの杯に酒を注げと合圖して）それで又どうしてお前が捕まらなかつたらう？　すぐ埋めちまつたんか。

クリステ　（考へながら）うん、埋めちやつた。丁度わしや畑で馬鈴薯を掘り返してるところだつけ。

マイケル　それから今日まで十一日といふもの、巡査はお前を追つかけて来ないんか？

クリステ　（首を振りながら）一人も来ねえ、わしや豚だらうが犬だらうが悪魔だらうが何にでも向ふつもりで表街道を歩いて来たんだ。

フライイ　（知つたらしくうなづく）彼奴等が腕力づくで行かうといふのはありきたりの殺人者

のことさ。この人は氣が立つたら大變にちげえねえ。

マイケル　大變だらうて。（クリステに）それで、あにさん、お前何處でその一件をやらかしたんだ？

クリステ　（疑ひ深くマイケルを見る）そりや、親方、遠いところさ、遠い、高い山の、吹きつさらしの隅つこの方だ。

フライイ　（感心したらしくうなづく）用心ぶけえ男だな、それが當然だ。

ペギン　お父さん、お前ほんとに小僧を探す氣なら、此人を小僧にしたら、ソロモンのやうな智慧者の小僧が出来るわ。

フライイ　巡査だつて此男をおつかながつてるから、此男を家に置いとぎや、庭の肥料溜から犬が密造酒を舐めてゐたところで、嗅ぎ廻りに来る奴は大丈夫あるめえ。

ジミイ　さびしい土地ぢや氣の強いのが寶だ。自分のおやちでも殺さうてい若い衆なら、地獄の扁石の上で、投槍を持った狐のやうな悪魔に出つくはしても負けやしめえ。

ペギン　みんなのいふのはほんとだよ。あたしや此人を家に置いとけば、除隊になつたカアキイ服の殺人者だつて、幽霊だつて怖くはないわ。



クリステ (驚きと勝利で得意になつて) どうも、すてきななあ!

マイケル (丁寧に) あにさん、お前に好い給金をやつて、あんまりとき使はないから、ここで落付いて小僧になる氣はないか?

シヨオン (心配さうに進み出る) ペギインのやうな娘がゐるこんな堅氣な静かな家へ、飛んでもねえ者を入れなさんな。

ペギイン (ひどく鋭く) お黙り、誰がお前に口をきいたえ?

シヨオン (身をすざりながら) こんな血だらけの人殺しを……

ペギイン (彼に向つて指を鳴しながら) おだまりといつてるぢやないか。お前なんぞに馬鹿にされるあたしたちぢやない。(あまつたるい優しい聲でクリステにいふ) ねえ、若い衆さん、お前ここに落ちつくがいいよ、あたしたちも出来るつたけの事はしてお前に不自由はさせないから。

クリステ (いかにも不思議さうに) それで、此處にゐたら、つかまらないで済むだらうか?

マイケル 大丈夫だとも、もし萬一お前をおつかながらないまでも、此處の土地の巡査の奴等と來たら、ごく大人しい、酒に餓ゑ切つてる、貧乏な野郎共だから、よる夜中にも前

觸れなしぢや野良犬にだつて手もつけやしねえ

ペギイン (ひどく親切に勤める調子で) なにしろ一寸でもいいから落付いておいでよ。お前だつて草臥れ切つてるだらう、足のまめから血が出るし、身體だつてウィツクロウの羊みたいによごれて、洗はなくちややり切れまい。

クリステ (満足して周囲を見廻す) 好い店だね、ほんとに瞞す氣でなけりや、わしや此處に置いて貰ひませう。

ジミイ (飛びあがつて) ありがたい、おやちを殺した男が張番すりや、娘さんだつて大丈夫だ、マイケル・ジュームス、出掛けようよ。さうでねえと、お通夜の奴等がいいところを飲みつからしてしまふだらうぜ。

マイケル (他の連中と月口に行く) それであにさん、すまねえが、お前の名は何といふ? 覺えて置きたいな。

クリステ クリストファ・マホンです。

マイケル ぢやあクリステ、ゆつくらおやすみ、あしたの午<sup>ひるまへ</sup>前また會はう。

クリステ みなさん、おやすみ。



人々 おやすみ。

(シヨオンのほか一同出て行く。シヨオンは戸口にゐる)

シヨオン (ペギインに) 何事もねえやうに、おいらに泊つて貰ひたくはないか?

ペギイン (不愛想に) お前はレイリイ神父様が怖いといつてゐたぢやないか?

シヨオン 今度はあの若い衆もゐるから、おいらが泊つてももう悪いことはあるめえと思ふが。

ペギイン お前に泊つて貰ふ必要がある時には、お前はとまれないといつたらう。もう必要はないんだから、さつさとお歸り。

シヨオン おらあ、レイリイ神父様さへ……

ペギイン だからレイリイ神父さんのところへ行つて、(嘲る調子で) お前も獨身の坊様の仲間にもしてお貰ひ、あたしは此人がゐてくれればいいよ。

シヨオン もし俺がクイン後家にも會つたら……

ペギイン さつさとお歸りといつたらさ、騒々しく寐る邪魔をしないでおくれ。(男を押出して戸を鎖す) あの男ときたら、どんなお慈悲の聖人様たちだつて氣を腐らしつちまふわ。

(忙がしく動き廻る。前掛けを取つて窓へヒンで張つて覆ひとする、クリステは怖々彼女を見てゐる、やがてクリステの前に来て落付き拂つて上機嫌で口をきく) 若い衆さん、お前火の側でらくにおし。旅をして来たんで草臥れ切つてゐるだらう。

クリステ (長靴を脱ぎながら、内氣な様子で) わしや十一日もめちやに歩いて、夜だつて怖くつて眠れないんだから、まつたく草臥れ切つちやつた。

(自分の片足を上げて底まめを觸つて見ながら、それを憐れむ如く眺めてゐる)

ペギイン (側に立つて嬉しさに男を見る) お前の家はきつと偉い人が出た家だらうね、小さな華奢な足だもの、そして苗字も身分のありさうな苗字だね、フランスやスペインの華族様や王様にでもありさうだわ。

クリステ (自慢らしく) まつたくわし等はえらかつたね、土地の肥えたマンスタア地方の廣い廣い地面を持つてゐたんだ。

ペギイン そしてお前は額つきの上品な、立派な男ぶりの若い衆だからね。

クリステ (よろこばしい驚きを見せて) わしがか?

ペギイン ああ、お前の出て来た西や南の方で、若い娘たちがお前にさういつて聞かせた